
テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー ~ 吸血鬼物語 ~

サニーレタス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー〜吸血鬼物語〜

【Nコード】

N6388Y

【作者名】

サニーレタス

【あらすじ】

吸血鬼・・・

ここ、ルミナシアではそんな存在は空想、または御伽噺とされていた

そして誕生した・・・

イレギュラーな少年の物語・・・

作者初投稿です・・・よろしく願います

第1話（前書き）

作者初投稿です^^

できるだけ良い作品にしていきたいと思しますので感想、アドバイスを良ければしてやってください・・・

第1話

ウリズン帝国・・・

そこで、ある物語が始まった・・・

NOSIDE・・・

彼・・・

顔は中性的、そして長い黒髪を後ろで束ねており・・・少し暗さを帯びた青い瞳を持つ彼・・・。

名前はイザック・フーバー

生まれてすぐ親に捨てられてウリズン帝国の城下町の孤児院で育った

フーバーは孤児院の先生がくれた名字だ

そして彼は学校に通いながら仕事をし、いままで孤児院で暮らし

ていた
だが・・・

イザックSIDE・・・

「失礼します」

俺はある部屋に来ていた

先程仕事が終わりに、孤児院に帰ってきたので部屋に行く途中
みんなから先生と呼ばれているリン先生が深刻な顔をして

『後で私の部屋に来な・・・』
と言われたからだ

そして先生の部屋に入るとそこには見知らぬ二人の騎士団の男が
立っており

先生の顔は苦虫を噛み潰したような悔しそうな表情をしていた
そして先生が・・・

「・・・イザック・・・今日からあなたは王立研究所の博士に引
き取られることになりました・・・」

そう言われた・・・

一瞬、体が固まった

「・・・何故ですか？」

俺は先生に尋ねた

孤児院は俺の家だ、今更誰かに引き取られるなんてゴメンしたいし何よりこの孤児院を出て行きたくない

何より「引き取られることになりました」と先生は言ったが

・・・何故決定事項なのだ？

俺の意見も聞かず、強制的に連れて行こうとしている

しかも王立研究所は悪い噂が多い

最近では人を実験体にし、鬼畜な実験を行っているとか・・・

少なくともそんな噂が立っているところに望んでなんて絶対行きたくない

俺がそう考えているうちに騎士の一人が先生の代わりに答えた

「皇帝陛下直々の命令だ。研究所まで連れて行く・・・逃げれば・

・・・わかるな？」

こうして脅迫をしてくる時点でおかしかった

しかし・・・孤児院に・・・何より、恩人である先生に迷惑を掛けたくなかった

俺は要求を呑むしかなかった・・・

N O S I D E . . .

「陛下．．．例の実験の代わりを用意できました」

金髪で目に縦の切り傷がある男が言葉を発する

陛下と呼ばれた人

豪華な衣に体を包み、黒い髪の上には豪華な王冠をかぶっている
ウリズン帝国皇帝のガンドである

「うむ．．．早速行くぞ」

「はい、今度こそ成功させます」

「当たり前だ!!」

実験の話をしている男性を怒鳴りつける

「私をいつまで待たせるつもりなのだ!!もう十二回目だぞ!!」
「!」

「はい、承知しております」

「．．．で?今回の”実験体”はどんな奴なのだ?」

怒鳴っても仕方が無いと思ったのか、王はまた実験の話に戻る

「・・・イザック・フーバー。17歳、180cm 66kg
生まれてすぐに

親に捨てられ、孤児院で育っています。孤児院の者には一応話を
通しました

渋りましたが脅して口止めもしてあります。それに陛下と同じ
ような体格ですので実験体には最適かと・・・」

「ふん・・・なら早く始める・・・」人体吸血鬼化実験”をな・・・
」

にやりと歪めた口元にはとてつもない欲望が見えていた・・・

イザックSIDE・・・

あれから、お城の研究所に連れて来られた
俺は兵士が言うがままに動いていた

そして俺の目の前に二人の男が現れた・・・

N O S I D E . . .

「 」

「この餓鬼か？」

「はい、この少年がイザック・フーバーです」

ガンドがイザックを指差し金髪の男に問いかける

「ふん、悪いが . . . 少し眠ってもらおうぞ」

そうガンドが言い放った直後

「 ! ? 」

「 ハッ ! 」

皇帝の横に立つ金髪の男が突如こちらに突進してきた
掛け声と共に突き出された拳をイザックは何とか受け流すが . . .

「ハア ! 」

「がはっ ! ? 」

次の蹴りは先程の拳とは段違いに速く . . . 重かった
腹にもろに蹴りをくらったイザックは為す術無く倒れる

「 (こゝ、こいつ . . .) 」

クは . . . 孤児院でも、町でもどんな奴にも負けたことは無いイザックは
その事実を信じられないでいた

学校の剣術、格闘術の授業では常に一番、大人にも負けたことが無いイザックだったがこの男は

油断していたとはいえイザックを一撃で立てなくしてしまったのだ

「ふむ……まだ意識があるか……」

「が……お前……なにもん……」

ここまで言い、イザックは気絶した

「……運べ」

そして気絶したのを確認するとガンドは研究室内に運ぶように命じた

第1話（後書き）

難しいです・・・

ぜひともご意見待ってます!!!

第2話(前書き)

2話目です・・・
難しい・・・ほんとに・・・

第2話

イザツクSIDE・・・

「・・・・・・・・ここ、は？」

真っ暗で何も見えない・・・

恐らくどこかの大きな部屋だろうか・・・

「・・・・・・・・つ・・・」

動こうとしたが手と足を拘束されていた

強い力で縛ってあり、解けそうに無かった・・・

そこに・・・

「・・・・・・・・!？」

急に電気がつき、まぶしさに目を細める

周りを見ると古い感じで周りの壁には石が詰められていた

「ここは？」

「目が覚めたようだな」

「・・・・・・・・!？」

上のほうから声が聞こえた

見るとそこには踊り場があり二人の人・・・ガンドと金髪の男が
立っていた

「……………何をするつもりだ」

「ふん……愚民め、口を慎め」

「……いきなり連れて来られて、こんな扱いをされて……事情くらい知る権利は俺にはあるんじゃないか？」

苛立ちを抑えながら状況を問う

そして返ってきた言葉は……最悪のものだった

「……お前には、ウリズン帝国繁栄のための……そして……私の永遠の命の

ための実験体になってもらう……人体実験のな」

にやりとゆがめた口元を見て、背筋に悪寒が走った

「（逃げるしか……）」

必死に拘束から逃れようと腕を動かす

しかしやはり解けそうな気配は無い

「……おい、始める」

「はい……」

そして……最悪の実験が始まった

「おらぁ！」

「っ!?!」

いきなり頭をつかまれ床に叩きつけられた額からは血が流れてきた

「きひひひ・・・初めまして、イザック君」
「・・・誰だ？」

気持ちの悪い声で俺の名前を呼んだ男は床についている俺の顔を強引に上げると

気持ちの悪い笑みを浮かべた

「私の名前はエリック、今からこの、私が長年研究し続けてやっ
と完成した

『アムリタ』を投薬しますね？きひひひひ・・・」

エリックは君の悪い笑いと共に・・・真つ赤な液体、『アムリタ』
を注射器に

入れる・・・

「ちなみに・・・今残念ながら、11人失敗しています。あなた
は成功してくださいね？きひひひひ」

今・・・なんて言った？

11人失敗？

マジかよ・・・成功するのかほんとに？

「みんな『アムリタ』の拒否反応に耐えられなくて死んでしまっ
んですよ・・・薬が全くもったいないですよ、きひひ」

もう俺の中には恐怖しかなかった

そして・・・こう思った

死にたくない・・・と・・・

「じゃあ・・・いくよ!」

それを見た・・・俺は・・・

急に・・・アイツヲ・・・コロシタク・・・ナッタ・・・

金髪の男SIDE・・・

「おお・・・せ、成功したのか!？」

「・・・そのようですね」

隣で驚愕に顔を染めるガンド陛下・・・いや、クズ

「よし、エリック!その薬をわしに!!!」

「きひひ、もちろんですよ皇帝陛下『ザシユ』か・・・?」

クズが薬を求めエリック博士を呼んだ瞬間・・・

エリックは言葉を止めた

いや、止められた

何故なら少年の手刀がエリックの胸を突き刺していたから・・・

すげえな・・・流石に大人一人手刀で突き殺すのは俺でも無理だ

「なっ・・・!？」

「(はは・・・面白くなってきた)」

ぺろ、と唇をなめる

さあ・・・久々の戦闘を楽しみましょうか・・・

第2話（後書き）

見てくれた方には感謝を！

誤字脱字などがありましたら教えていただけると幸いです（汗）

第3話(前書き)

初戦闘・・・どうか批判だけは勘弁を><

第3話

NOSIDE・・・

「があ・・・ひい・・・！」

悲鳴も上げれずエリックは目から光を失い、倒れた

そして持っていた『アムリタ』も落ち、容器が割れて地面に染み込んでいった

「あああ!!!『アムリタ』が!!!!・・・おのれ・・・小僧!!!
!!!!!!」

イザックは腕に流れてきた血をペロリと舐めた

・・・彼らからは見えなかったのだろう・・・イザックの口元が緩むのを・・・

ガンドは目を見開き絶望した後、怒り狂って

「殺せ!!!八つ裂きにしろ!!!」

そう近衛兵に命令した

それと同時に十数人も近衛兵が部屋に入ってきて、最初から居た兵士合わせると

二十人程となった

そして・・・

「おらあ!!!」

「ハッ!!!」

二人の兵士がイザックを殺そうと飛び出した
一人は突き、一人は上段から剣を振り下ろした・・・が
その二つの剣はイザックに斬り裂くことはなかった・・・

パキン、という音と共に剣を振り下ろした兵士の剣がイザックの
手に掴まれ・・・
粉々に壊れた・・・
そして突きを繰り出した兵士の剣は地面に落ちていた・・・
腕ごと・・・

「なっ!?!」

「ぐああああ・・・バキィ」ぐえ・・・!」

剣が壊されたことにより驚愕する兵士、その間にもう一人の兵士
は痛みに絶叫した 直後・・・イザックに顔面を殴られ・・・首が
無くなった・・・

否、上から殴ったため首の骨が胴体に陥没してしまったのだ・・・
どちらにせよその一撃で絶命し、その男の剣がイザックに渡った
そして

「・・・瞬迅剣」

イザックの繰り出した一撃はもう一人の兵士の胸を貫くには充分
な一撃だった

悲鳴を上げる前にその男も地に伏せた・・・

そして・・・イザックによる近衛兵たちの惨殺劇が始まったのだ
った・・・

金髪の男SIDE・・・

「な・・・わ、我が国の近衛兵が・・・」

惨殺劇が始まって十分・・・

少年・・・イザック・フーバーの周りには死体、そして、致命的な傷を負ったものしか残っていなかった・・・

「お、お前だけが頼りだ。行け!!」

「……拒否します」

「は……?」

クズは俺に命令してきたが……もう聞いてやる必要も無い

「……クロス……」

「ひっ!?!」

いつの間にかこちらの踊り場が上がってきた少年
それを見てクズは小さな悲鳴を上げる

「クロス……」

「た、助けてくれえ!!」

「クロス……」

「なんでもする、なんでもしてやる。か、金か?」

「クロス……」

「金でも何でもくれてやるから……頼む!!殺さないでくれえ
ええ!!!!!!」

「クロス!!!!!!!!」

クズが叫んだと同時に少年は剣を振り上げ……クズの首が胴体
とお別れした

「……やるねえ」

口笛を吹きながらそついうが反応が無い

そして少年はぎろりとこちらを数秒睨み、突然笑みを浮かべたか

と思つと

．．．人とは思えない速度で襲い掛かってきた

第3話（後書き）

やばいです・・・難しいです・・・

誤字脱字ありましたら報告してもらえるとありがたいです

第4話(前書き)

更新です^^;

見ていただけると幸いです

第4話

NOSIDE・・・

「アアアアアア！！！！！」

狂ったように剣を振り回すイザック

その剣の速度、技術は『アムリタ』を飲む前のものとは格段の違っていた

そうでなければあの数の近衛兵たちを倒すことはできなかっただろう

しかしその剣技を・・・金髪の男はいつも簡単に弾き返していた・・・

「よっ・・・ふん！！」

「・・・！？」

袈裟懸けに斬り下ろしたイザックの剣を金髪の男はバックステップで避ける

そして、先程の近衛兵のものとは比べものにならないくらいの突きをイザックに
繰り出す・・・

その一撃はイザックの頬を掠め、イザックは横に飛び退き距離をとった

「・・・薬の効果か・・・傷がもう治ってきてるじゃねえか」

金髪の男は楽しそうにそう言う
見ると先程の頬を掠めた一撃は見る見るうちに回復していく

「吸血鬼……か……あのクソ野郎、気に食わなかったけど面白くも残して言ったな……」

そう言うと笑みを深めて舌なめずりをした

「俺の名前はキラ。キラ・エクスだ……覚えとけよ？」

金髪の男、キラはそう言い終わるとまた剣を構えた

「さあ……楽しませてくれよ？……魔神剣!!」

そして、また戦闘が始まった

「……(ギイン)……陽炎」

「おおっと!!」

イザックはキラの魔神剣を剣で弾くとキラの真上に瞬間移動してから膝落としを繰り返す

「守護方陣……」

「ぐはっ!!」

それをバックステップで避けるが守護方陣によりダメージを受ける

「ちっ……雷神剣!!」

「(ガキン)……!!?」

だがそれでは終わらずキラは剣を突き出し落雷がイザックを襲った
突きは剣で弾けたものの落雷を受け、全身にダメージと痺れを受ける

「ちっ……薬飲んだとはいえまさかガキに一撃いられるとは・

「・・・」

「・・・・・・」

「まあ・・・いいや・・・それならこっちも、ちょっとばかり本気を出そうかな」

「・・・!？」

一瞬でキラの雰囲気が変わる

「俺・・・実は魔法剣士なんだよね・・・」

そう言い終わると突如、キラの足元に魔法陣が浮かびだした

「・・・長年修行を積んで・・・やっとできるようになったんだよな・・・」

『詠唱待機』は誰にだってできる、しかしそれは、その間行動ができないという

弱点がある・・・そこで俺は・・・『遅延魔術』を習得したんだよ・・・」

殺気の密度が上がり、思わずイザックは後ずさりする・・・

「詠唱時間は普通の三倍強掛かるが・・・剣術もそれなりに使える俺にはたいしたデメリットのはならない・・・そして、お前がここに上がって来た時すでに詠唱は始まってんだよ!!!!!」

キラはまた笑みを深くし

「耐えるよ・・・行くぜ・・・!・・・インディグネイション!!!!!!!」

刹那、研究室に裁きの雷落とされ、周りは土煙に包まれた……

崩れた研究所の瓦礫の上に立つ人影……

「……やり過ぎた……しかも逃げられた……」

はあく、と溜め息をつくキラ

「まあ……いいか。とりあえず戻るか……」

そして歩いていく

ふと、キラは足を止めた・・・

「次会うときは・・・もっと楽しませてくれよ・・・イザック」
そう呟くと今度こそ歩き出し、研究所から姿を消した・・・

イザックSIDE

「はあ・・・はあ・・・はあ」

イザックは走っていた足を止め、息を整える

「（なんだ・・・さっきの感覚・・・）」

あの・・・エリックとか言う男を・・・いきなり殺したいという
衝動が襲った

そして、気が付くと殺してしまっていた・・・
そしてそれを・・・心から楽しいと思ってしまった・・・
それからは、体が言うことを聞かなかった・・・

イザツクは思い出していた・・・
人を斬った、あの感覚を・・・

「(俺は・・・)」

やるせない気持ちに俺は拳を強く、強く握り締めた

そして、雨だ振ってきた音と共に城では研究所が破壊されたこと
による騒ぎが起こっていた・・・

第4話（後書き）

インディグネーションを使わせたのは・・・作者が好きだからです
^^

かっこよくないですか？インディグネーション^^

誤字脱字がありましたら報告お願いします
もちろん感想もしていただけると嬉しいです

第5話(前書き)

とりあえず更新^^;

第5話

NOSIDE・・・

「なんだ・・・これは・・・」

騎士を十人ほど引き連れた恐らく騎士団隊長と思われる男が呆然としながら呟いた無理も無いだろう・・・

いきなり轟音が鳴り響いたと思えば、城の敷地内にあつた研究所が瓦礫の山になっているのだから・・・

「だ、団長・・・」

「なんだ・・・っ!？」

一人の騎士に呼ばれそちらを向くと兵士の目線の先には・・・皇帝の生首が

転がっていた・・・

「へ、陛下・・・一体、何が・・・」

転がる首を見ながら呆けていると

「隊長!!この近衛兵まだ息があります!!!」

そんな声が聞こえた・・・

団長はすぐさま声を上げた騎士の元に走った

「おい!近衛兵!!!何があつた!!!?」

今にも消えてしまいそうな呼吸をしながらうつすらと目を開けた一人の近衛兵

「……極秘……じ……験……しつぱ……い……被験者……逃走……」

そこまで言い終えると近衛兵は力尽きた

しかしその情報で団長は全てを悟った……

「（実験が失敗しただど!?……しかも、被験者は逃走?……この惨状を見る限り能力を得て逃走した……となると……）……まずいな……」

騎士団長も実験のことは聞いていたようだ

そして団長は最悪の結果を想像していた

「……おい」

「はっ!」

「今日、ここに連れて来られた被験者の名前は?」

「はっ!、イザック・フーバー、17歳です。私が連れてきたので間違いありません」

「そうか……恐らくそのイザックとやらがこの事件を引き起こしたらしい

騎士団全班を召集!その男の身柄を拘束する!至急だ!!急げ!

!!!」

「はっ!!!!!」

兵士は敬礼を済ますと駆け足でその場を去った

「（もし……もし吸血鬼化に成功していたら……報復にやってくる可能性がある……これだけの戦闘を行った今なら拘束できるかもしれない……その後は……城で幽閉させるか……）」

団長は頭を抱えていた

そして、先程から降っている雨が一段とまた強くなった・・・

イザツクSIDE・・・

雨が降っていた・・・

しかしそれでも俺はその場所から動けずにいた・・・

人を殺したという事実・・・殺人をしたというのにそのときには
楽しさ・・・

快樂までも感じてしまっていた事実・・・そして・・・返り血を
浴びて・・・

血を口を含んだときの・・・とてつもない力が溢れてきて・・・
制御できなかった事実

そしていつの間にか溜まっていた水溜りに目を向けると・・・イヤツクは驚愕した・・・

漆黒の闇のように黒かった髪は正反対の雪のように白く染まり、美しい青色をした両目だったのが、左目だけ炎のような真っ赤な赤に染まっていた

そして・・・口をあけると・・・鋭利にとがった・・・犬歯があった・・・

「ああ・・・そうか・・・俺・・・」

もう・・・・・・化け物になっちまったんだ・・・

第5話（後書き）

イザック吸血鬼化・・・

さて・・・この後どうしようか・・・（汗）

まあがんばって更新します^^

誤字脱字の報告、感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第6話(前書き)

とりあえず投稿^^;

第6話

イザックSIDE・・・

途方に暮れていた俺はただ歩き続けた・・・
気が付くと・・・俺が育った孤児院の前だった・・・

「・・・はは・・・いまさら何しに来てんだか・・・」

自嘲したように笑う

「・・・・・・・・」

そして、孤児院に背を向け歩き出そうとしたそのとき

「イザック！！！！」

・・・そこにはいつもの服ではなく戦闘用の軽鎧に剣を携えた孤
児院の先生の姿があった・・・

騎士団長SIDE・・・

「・・・まだ見つからないのか!!」

「す、すいません・・・まだ捕捉できていません」

イライラしながら部下の報告を聞く

このままでは取り逃がしてしまう・・・

一刻も早く被験者のイザックを捕らえなければ・・・

「（あの数の近衛兵を一人で倒した・・・完全に回復してから攻められてはひとたまり無い・・・）」

未知の力を持つイザックに恐怖を覚える団長

だからこそ、今捕まえておきたかった

そこに・・・

「団長!!被験者イザック・フーバーを捕捉しました!!!」

「どこだ!!!」

「被験者の住んでいた孤児院前の路地です、三個小隊が今向かい、到着しだい迎撃するようです！」

「よし！全員向かうよう通達！我々も出るぞ！…いいか！？必ず捕まえる！…！」

「「「「「はっ！…！」「「「「「

団長の言葉に敬礼を返し、どたどたと音を立てて部屋から出て行った…。

イザツクSIDE・・・

「あ・・・」

「イザツク・・・」

頭が真っ白になった

「・・・なんで・・・」

「？」

「なんで・・・俺って・・・」

俺は今の容姿を見て一瞬でイザツクだとわかった先生に驚いていた・・・

それを聞いて先生は

「あんたの髪の色や眼の色が変わってても・・・何年も一緒にいればさすがにわかるよ・・・」

そついい先生は微笑を浮かべた

「それよりあんた指名手配されてるよ？・・・何があつたんだい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・先生・・・俺・・・」

そして俺は、ついさっきの出来事をすべて先生に話した

人体実験を受けさせられ、化け物になったこと……そしてその力でたくさんの人を殺したこと……血をなめると……おいしいと感じる……化け物になったこと……

「……俺……怖いんだ……自分が」

「イザツク」

名前を呼ばれ、体が震えた

「大丈夫だ」

そして力強く一言、そう言い放った

「……なんで……そんなことわかるんですか？」

「あたしは……あんなこと信じてるからさ」

「信じてる……先生はそう言った……」

まただ……この人は……根拠も無いのにそんなことを言って……

……それにどれだけ救われ、どれだけ嬉しかったことが

先生は俺のさっきの話を聞いても……変わらずに接してくれた

「先生……」

自然と涙が流れた……

さっきのような悲しみの涙ではない……

「・・・泣くんじゃないよ、全く・・・」

先生は呆れたように言いながらもどこか嬉しそうに微笑んでいた

そのとき・・・

「イザック・フーバーだな？」

くぐもった声が聞こえた

そしてそこには・・・三十人は超える人数の騎士が武器を構え立っていた・・・

第6話（後書き）

・・・先生については説明する回を作ったほうがいいかな？
感想、アドバイスを頂けたらたら幸いです

第7話（前書き）

はい・・・孤児院の先生が・・・

続きは本文でどうぞー！

第7話

NOSIDE・・・

「・・・」

「おとなしくついて来い、さもなければ・・・」

一人の兵士がこちらに歩み寄る

「・・・わか「待ちな」・・・!?!?」

おとなしく捕まろうとしたイザックだったが・・・先生が言葉を
遮り一歩前に出た

「なんだ?」

「・・・この子を孤児院を脅してまで無理やり連れて行って、人
体実験を行いこの子を苦しめたあんたたちに・・・あたしが返すと
思うのかい?」

先生の顔には・・・明らかな怒気が含まれていた

「・・・孤児院がどうなってもいいのか?」

そして、騎士が一番効果的だと思われる孤児院の名前を出した・・・

しかし帰ってきたのはかすかな笑い・・・

「はっ・・・もう他の子達は違う場所に移したよ・・・この子引

き渡してからあたしは助けに行くつもりだったからね・・・大事な
大事な・・・息子をね・・・」

先生は優しくそういった

「先生・・・」

「逃げな、イザック」

一言、先生はそう言った

「でも先生！この数は・・・」

「大丈夫だよ・・・あんたに剣を教えたのは誰だと思ってるんだ
い？」

先生は振り返りイザックにそう笑いかけた

「・・・いきなり孤児院を人質に取られたから対処できなくて・・・
悪かったね・・・辛い思いをさせて・・・」

「先生・・・」

「港町の近くの森の中にあたしの友人、エルフのルナ、っていう
あたしの古い友人が居るそいつのところにはまらずには行きな・・・いい
ね？」

小声で先生はイザックに言う

何かを言おうとするが、うまく言葉にできず押し黙ってしまいうい
ザック

「もう行くんだね・・・囲まれる前に」

「・・・ありがとう・・・ございました」

頭を下げ、そう言った

「……早く行きな……」

……イザックは背を向けて走り出した
だから気づかなかった

先生が涙を流しているのを……

「追え!!」

イザックが走り出した姿を見た騎士が声を張り上げ、イザックの
後を追うが……

「待ちな」

「邪魔するな!!」

進路を阻んだのは一人の女性

先程イザックを逃がした孤児院の先生である

そして、威勢よく斧を振りかぶりながら突進した騎士・・・

しかし、その斧は先生に届くことは無かった・・・

「がはっ・・・」

・・・いつの間に斬ったのだろうか

斧を持った騎士は脇腹から血を流し、前のめりに倒れる

後続の騎士はそれを見てたじろいだ

「かかってきな・・・あの子が遠くに行くまで・・・時間稼がせてもらおうよ!!」

「なめるなあ!!」

「虎牙破斬!!」

袈裟懸けに剣を振るった騎士だが先生は後退することなく、体勢を低くし流れるよ　うな動作で懐に入り込み、技を繰り出した

そして、騎士は反応することも叶わず二回の斬撃を受け絶命した

「・・・」

「次・・・」

その気迫は孤児院の先生をやっているものとは思えないほどのもので

騎士を睨みつけるその目は、視線だけで人を殺せるんじゃないか

と思うほどに鋭くなっていた

「怯むなあ！！連携して攻撃をしろ！！術師、詠唱準備！！」

そして、騎士団と一人の女性の戦いは苛烈を極めるものとなった

騎士団長SIDE・・・

「・・・なんだこの惨状は・・・」

イザック・フーバーが捕捉された場所に着いた団長

そこには、多くの騎士の屍と・・・血塗れで拘束されている孤児院の先生の姿があった

「・・・この女が・・・イザック・フーバーを逃がし、なおかつ騎士団に大きな損害を与えました・・・」

疲れきった声で報告したのは先程指揮を取っていた小隊長である

「被害は？」

「・・・死者23名・・・重傷者3名です」

「・・・」

団長は言葉を失った

先にこの場所に向かわせた人数は32名

しかし、そのほとんどが彼女によって帰らぬ者となっていたのだ

「・・・処刑しろ、その女は危険すぎる」

「はい」

そして・・・騎士は彼女に歩み寄った

「（イザック・・・ごめんね・・・まともな母親できなくてさ・・・）」

「（・・・かばってやれなくてごめんよ・・・あの糞研究者どもにお前を売った

あたしが言うのもなんだけど・・・）・・・幸せになっとくれよ」

その言葉を最後に・・・先生は舌を噛み切り・・・息を引き取った・・・

「……自ら命を絶つとは……本当に何者だ？この女は……」

口から血を流し、呼吸を止めてしまった女性を見ながら、
今やるべきことに集中することにした

「イザック・フーバーを探せ！決して一人で動くな！何かあったら逐一報告しろ！」

「いいな!？」

「ハッ!!!」「」「」

そして騎士達は団長の言葉に敬礼を返した後持ち場に戻った

第7話（後書き）

先生無双・・・になったかな？

感想、アドバイスしてくださいと嬉しいです！

第8話（前書き）

短いですが投稿・・・

第8話

イザツクSIDE・・・

俺は走った

全力で

するとすぐに町の外に出ることができた

町の入り口で・・・俺は足を止めた

・・・幼くして捨てられていた俺を、一生懸命育ててくれた先生

・・・剣に興味を持った俺に嬉しそうに剣を教えてくれた先生

・・・最後まで・・・俺のことを考えてくれた先生

そんな先生に・・・感謝を込めて・・・

「・・・ありがとうございました・・・」

震える声を絞り出しながら深く、深く頭を下げた・・・

きつと先生に会うことは二度とないだろう

だからこそ・・・深く、深く感謝をした・・・

先生に助けられたこの身を大事にしていくことを心に誓って・・・

そして、先生に言われたとおり、港町の近くにある森に向けて走り出した

NOSIDE・・・

無事に町を脱出し、港町近くの森を着いたイザック

そこには、暗い雰囲気のある森があった

「ここか・・・」

イザックは一歩足を踏み出し森の中に入っていった・・・

時々襲ってくる魔物を撃退しながら森の奥へと歩を進めるイザック

「・・・何処にいるんだろ？」

「案外広いこの森を探し回るのは少々きついものがあった
そんなことを考えていると

「・・・誰だ？」

突然とても澄んだ女性の声が聞こえた

その声音は明らかに警戒を含んだものだった

「・・・俺はイザックといいます・・・孤児院の先生に言われて
エルフのルナさん

がここにしていると聞いて来ました」

「孤児院の先生・・・？・・・まさか」

すっと木の影から姿を現したのは女性

長い銀髪をポニーテールにしている、整った顔立ちだがエルフの特徴であるその

長い耳が印象的だった

「まさか……リンの孤児院の子か？」

「……はい」

イザックは女性の問いにはっきりと答えた

「……来な……事情を説明してもらおうよ」

女性は先生の名前……リンという名を聞きいまだ警戒しているものの

話を聞いてくれるようである

イザックは黙って彼女に従った

第8話（後書き）

新キャラ登場です

ティルズにはハーフェルフの仲間がたくさん出てきますが・・・エルフの人っていたっけ？

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第9話（前書き）

投稿です

見てもらえると幸いです ^ ^ ;

第9話

イザックSIDE・・・

女性の後を追っていると小さな家が見えてきた

「・・・ここがあたしの家だ、入りな」

「・・・邪魔します」

ドアを開け、入るように促す女性
俺は一言そう言い家の中に入った

「・・・座りな」

家に入ると中には者がほとんど置いてなく、テーブルと椅子そしてキッチンがある

だけであった

そして言われたとおり俺は椅子に腰を下ろした

「・・・まず・・・あなたが探してるって言うルナってのはあつた・・・

あつた・・・イザックと言つたね？・・・リンがここに人を寄越すなんて

よほどのことでもない限りない・・・それにその目・・・普通の人間のものじゃない・・・何があつた？」

エルフの女性・・・ルナさんはこちらをじっと見たまま俺の返答を待っていた

「・・・俺は・・・先生の孤児院の子で・・・昨日・・・城の研究室に無理やり引き取られて・・・人体実験を受けました・・・そしたら・・・」

「その体になつてた・・・つてことか？」

「はい・・・それから急に・・・研究者たちへの殺意を・・・抑えられなくなつて

・・・研究所にいる奴たちを皆殺しにした後・・・逃げました・・・」

「それで？」

「・・・偶然先生と会つて・・・あなたに会いに行けといわれま

した」
「・・・もしかしてさ・・・その研究者の名前はエリックだったかい？」

「!?!?・・・はい」

ルナさんは俺の話聞いた後少しの間考えたかと思うと、あの・・・

最悪の研究者の名前を口にしたことに、俺は驚愕した

「ちつ・・・最悪だな・・・」

「・・・何がですか？」

俺は気になっていた

彼女がエリックという名を知っていることに
そして確信した

彼女は何か知っていると・・・

「・・・”アムリタ”だろ？あんたが投薬されたの・・・」

「・・・」

「その顔を見るとやっぱりそうだね・・・」

はあく、と溜め息を吐きルナさんはこちらを見た

「あなたは・・・」 吸血鬼化実験”の被験者になって・・・成功
しちまったんだね
・・・」

俺はルナさんの言葉を理解できなかった・・・

「エリックって奴はあたしがまだ研究者だった頃に知り合った奴
でね・・・

研究のことになるととにかくやばい奴だった・・・それからあた
しは研究者を

辞めてここで暮らしてたんだけどね・・・一年前、あいつがここ
を訪ねて来たんだ よ・・・『エルフの飲み薬』を寄越せてね」

「・・・」
「はじめは拒否したんだ・・・だけど・・・リンの孤児院を潰す
って言われたら

・・・折れるしかなかったんだ・・・そしたらあたしの血までほ
しいとか言い出してさ理由を聞いたら・・・あいつはこう言った
よ・・・」

『永遠の命を持つ・・・吸血鬼になれる薬を作るんだよ・・・
キヒヒヒヒヒ』

「・・・気味悪かったさ・・・そして、完成したのが”アムリタ
・・・」

あたしはすぐに解放されて戻ってきた・・・つまりあなたは・・・
”吸血鬼”

「なった……ってことだ」

「……そんなもの……あるわけ……」
「あるんだよ……」

あるわけ無いと、信じたかった

だがその小さな呟きもルナさんによって否定された

「……エリツクはね、この世でたった一人……錬金術を受け継いだ奴だったんだ……」アムリタ”は錬金術のみで作ることができる霊薬で……

不老不死の力を得ることができる……だから……」

そこでルナさんは言葉を切った

理由はわからないが……俺の頭にはもうルナさんの言葉は入ってこなかった

「……あなたは……血を舐めたかい？」

ビクツと俺は肩を震わせた……

「そうかい……血を舐めたら体が……軽くなっただろう？……身体能力が上がっていただろう？……全部、吸血鬼の衝動なんだよ……」

ルナさんは淡々とそう述べていった

おれは……最後の希望を持ってルナさんにこう問いかけた

「元には……人間には……戻れますか……？」

そう問いかけルナさんの顔を見た

数秒、深刻な顔をした後・・・首を振った・・・

横に・・・・・・・・

俺はそれを見た瞬間意識が遠のいていった・・・

ルナSIDE・・・

「・・・・・・・・酷だったね・・・・・・・・やっぱり・・・・・・・・」

いろいろあったのに加えていきなり化け物といわれ・・・これだけ考えさせられたら・・・

「……リンはきつと……」

旧友の彼女を思い出す

清楚なイメージだった第一印象とは裏腹に、やんちゃで活発で責任感が人一倍強かった彼女は……今

「（……エルフの耳って……こういう時……嫌だよね）」

彼、イザックが来てから町の情報を聞いていた

エルフは耳がいい

ルナは耳を強化し、町で出ている情報を探っていた

その情報のほとんどが彼の搜索结果だったが……

その中に……

『孤児院の先生が騎士団に反逆し、死亡』

こんな情報が聞こえてきた……

「（リンは……優しすぎるよねきつと）」

この子が追われているところを見ると……逃がすために時間を稼いだのだろう

そして……私のところに来させた

そしてリンは……責任感と愛情を胸に……死んで行ったのだらう……

「……安らかに眠りなよ……しばらくの間は……この子を任されてあげるよ……」

親友の死に流れる涙を拭おうともせず、ただただ涙を流し続けた。

•
•

第9話（後書き）

暗い話でした・・・

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第10話(前書き)

イザツクの眼の話です・・・

批判とか来ないか心配です^^^;

「つつっ!?!」

「!?!」(ビクッ!?!!)

「……………あ?」

周りを見ると…………見知らぬ部屋に一人の金髪の少女が泣きそうになりながら立っていた…………

「(夢…………か?…………っ、それより…………)(…………悪い…………
びっくりさせちまったな…………」

「…………大丈夫…………です」

少女は涙目のままながらもそう返してくれた…………

「…………ルナさん…………呼んできます」

そう行って少女は部屋を出て行った

数分後・・・

「起きたかい？」

「はい・・・すみません」

「謝ること無いさ」

先程と違い、柔らかくなつた雰囲気ですルナさんは笑いかける

「・・・気分は？」

「・・・正直、悪いです・・・」

「・・・だろうね・・・はい」

ルナさんはおもむろに俺に何かを差し出した

「・・・これは？」

「眼帯だよ・・・あんたその左目の影響で魔力を常に消費してるんだよ」

ルナさんは俺の左目・・・色が変色したほうの目を指差しながら

「あんたの目・・・かつて、吸血鬼が持っていたとされる眼・・・いわゆる”魔眼”ってやつだね・・・その眼には能力があるんだ」

「能力？」

「ああ・・・一つは暗示と幻覚、異性には先の二つと共に好意の錯覚をもたらす能力」

「二つ目は身体能力の増加、これは解放して無くても一緒だけど
解放したときとは比べものにならないから」

「三つ目は……得意属性の見分け……今のあなたの目はその
状態になってる

右目閉じてみな……」

言われたとおり右目を閉じると……

「……!?!?」

「あたしはどんな感じだい?」

「……ほとんどが青ですが……緑と……黄色が少し混ぜっ
て見えます……」

「そうだろうね……あたしの得意な属性は水、風と土は基本程
度使える

分かるかい?」

「つまり……色で属性が分かれていると?」

「そういうこと……赤なら火、青なら水、緑なら風、黄色なら
土、紫なら闇

白なら光、桃色なら回復術、灰色なら補助術……そしてその色
の濃さによってどれだけ

強い術を使えるか……こういった見分け方ができるのさ」

「……よく知ってますね」

「……エリックが奪って行った文献の情報だからね……」

ルナさんは少し顔を曇らせながらそう答える

「……恐らく、その三つの能力があんたの”魔眼”についてる
……」

制御方法はわからないから・・・これから練習するしかないね
「・・・わかりました、ありがとうございます」

そう言っただけは立ち上がるつもり・・・が
ルナさんに手で制された

「・・・まだ何か？」

「どこ行くんだい？」

顔を真剣なものにしてこちらを見るルナさん

「もう行きます・・・お世話に」「ここにいな」「・・・」

別れを告げようとした瞬間言葉をかぶせられ出て行くことを許されなかった

「お話も聞けましたし」

「・・・まだ眼の制御できないじゃないかい」

「・・・これから練習しますよ・・・」

「あんた一人でかい？」

「ええ」

そう答えた瞬間胸倉をつかまれた

「・・・餓鬼が大人ぶってんじゃないよ・・・」

すさまじい威圧感に俺は思わず押し黙った

「・・・そんな顔して・・・そんな心で・・・一人でいようとするんじゃないよ」

「……………」
「あんた……リンが困ってたの……知ってるかい？」
「？」

ルナさんは少し笑みを浮かべながらこう言った

「『私の息子は……どれだけ辛いことされても……絶対にあたしに言わない……』

子供らしく甘えたっていいのにね』……ってね……何年か前に来たときにそう言ってたよ」

「……………」
「……あんたは……背負い込みすぎだよ……まだ弱いくせに」

ルナさんの威圧が消えて……まるで先生のように優しく俺に笑いかけてきた

「……………ここにいな……せめて少しでも傷が癒えるまで……」
「……………」
「……やつぱり……見かけによらず涙もろいんだね」
「え…………？」

いきなりルナさんがそう言いだしたので思わず呆けた声で返事を返す

そして頬を触ると……温かい雫が流れていた……

「……………リンほど器用に親できるなんて思わないけどさ……
あんたはもう少し甘えることも必要だよ……ずっと気張ってたら……しんどいじゃないか」

優しく・・・頭に手を乗せながらルナさんはそう言う

「・・・さっきここにいた子の相手もしてあげてほしいしさ・・・
もう少し・・・ここにいなよ・・・」

「・・・はい」

止めたいのに・・・止まらない涙

無くなったと思っていた俺の居場所ができた気がして・・・
素直に嬉しかった・・・

第10話（後書き）

どうでしたか？

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第11話(前書き)

今回はリンの弱点(?)が判明・・・

テイルズにはやはりこのキャラがいなくては^^

第11話

イザックSIDE・・・

「・・・すみません」

「いいよ・・・コリィー！おいで」

ルナさんは泣き止んだ俺を見て薄く笑った後、女の子の名前を呼んだ

ドアが開き、そこから姿を現したのはさっきの少女だった

「・・・(ペコッ)」

少女は俺にお辞儀をしながらルナさんの後ろに隠れてしまった

83

「こらこら・・・悪いね、この子人見知りする子でさ・・・」

「いえ・・・全然気にしません、しばらくここでお世話になるよ・・・よろしくね

「コリィ・・・」

「はい・・・よろしくお願いします」

小さな声だったがそう答えてくれた

NOSIDE・・・

「・・・コリイ、そっちの皿取ってくれ」

「はい」

「・・・しかし意外だね・・・あのリンの息子なのに料理ができるなんて・・・」

ルナさんは感心したように椅子に腰掛けながらそう言ってキッチンを見る

「・・・先生に作らしたら・・・孤児院の全員の人が食中毒になりますよ・・・」

「だね・・・」

補足すると・・・リンは洗濯や掃除などは完璧だったが・・・料理がからっきしであった

最初は苦笑を返していたイザックだったが先生の料理を思い浮かべた瞬間

顔色が悪くなった・・・

ルナも思い当たる節があるのか青い顔で同意を示していた

「・・・？」

もちろんコリィは何のことかわからず首をかしげていた・・・

「はい・・・とりあえずある材料でしたのが・・・『オムレツ』です」

「・・・美味そうだね」

「・・・美味しそう」

「どうぞ」

「「いただきます」」

二人は出来上がった料理を口にし・・・ルナさんはイザックを凝視して一言

「・・・ほんとにリンのところで育ったのかい？」

「・・・年長者が作るしかなかったもので・・・」

ありえないものを見ているようにイザツクを見るルナさんに苦笑を返しつつ

コリイに目を向けた

「コリイ・・・どうだ？」

「・・・先生のより美味しい・・・」

「・・・コリイ・・・」

「（ビクッ！）・・・」

その発言にいい笑顔でルナさんはコリイを見た

・・・瞬間コリイはすごい速度でイザツクの後ろに隠れた・・・
オムレツを持って・・・

「ま、まあまあ・・・」

「・・・全く・・・でもほんと美味しいよ」

「良かったです」

はにかんだ笑いを返すイザツク

”・・・明日から眼の制御始めていくから・・・あたしも” 魔眼
の制御なんて

初めてだから・・・一緒にやっていこう、いいね？」

優しく・・・安心させてくれる微笑みを浮かべるルナ

「はい」

イザックもまた微笑みながら、ルナの言葉に頷いた

第11話（後書き）

短いですが投稿・・・

ティルズには××料理人がいなくては！！

ちなみにルナさんは違います^^;

一応作れるといった感じです

第12話(前書き)

本日二回目の投稿!!

第12話

ルナSIDE・・・

「・・・」

目が覚めた・・・

私は必ず夜明けには目を覚ます
長年の習慣だ

「・・・顔でも洗ってくるかね」

自分のベットから降り、居間に出ると・・・

「・・・ふぁ・・・おはようございます」

「・・・あんた起きてたのかい？」

イザックがすでに起きており、朝食の準備をしていた・・・

「・・・夜は・・・寝れないみたいです・・・」

「・・・そうかい・・・で？今眠いと？」

「はい・・・」

本当に眠そうな声でイザックは答える

一般的に知られている吸血鬼の印象どおり・・・

吸血鬼は夜に強く・・・朝に弱い

「・・・ま、練習するの夕方にして、後で寝てきな」

「・・・すいません」

大人っぽい印象だったイザックだったが・・・

「（こうしてみると・・・やっぱり年相応だね）」

しっかりした子だと思うがこういった一面を見ると自然と笑みが
浮かんだ

「コリイ起こしてくるよ・・・食べたら寝ときな」

「・・・」

「て・・・もう寝てるのかい・・・」

呆れた視線を送るもイザックは夢の中だ

「・・・ちよつとずつ・・・慣れてくれるかね・・・」

この調子なら心配なさそうだと私は少し安心した

夕方・・・

ゆさゆさ、と寝ているイザツクの体が揺れる

「・・・・・・・・ん？」

「・・・・・・・・ルナさんが・・・呼んでます」

イザツクが目を開けるとそこにはコリイが立っていた
外を見ると景色が茜色に染まっている
夕方になったので起こしに来てくれたようだ

「悪い・・・ありがとな」

「いえ・・・大丈夫です・・・」

コリイはまだぎこちないものの笑顔でそう答えてくれた

「すぐ行くなって伝えといてくれ」

「（コクッ）」

イザツクはコリイにそう言い着替えを始める
コリイは頷くとルナの元に走っていった

「よし・・・あなた、魔術は使えるのかい？」

「・・・それなりに」

「魔力の制御ってやったことあるかい？」

「いや・・・」

「だろうね・・・その年で制御できてたらたいしたもんだよ」

けらけらとルナは笑う

「瞑想が一番効果的だね・・・とりあえず2時間」

「い、いきなりハードじゃないですか？」

ルナが出した方法にイザックは軽くうろたえる

「・・・いいからやる！ちなみにちゃんとできてるかできてないかはあたしが

見分けることができるから・・・魔力乱れたらこの棒で・・・わかるね？」

とても・・・いい笑顔で肩にごつい棒を担ぐルナ・・・
イザックはから笑いを漏らし・・・現実逃避していた・・・

数分後・・・
鈍い音とイザツクの悲鳴が森に響いたのは言うまでも無い・・・

第12話（後書き）

最初が暗すぎたので、少し平和な感じを出していきたいと思います
^^

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第13話(前書き)

・・・少し悩みましたが投稿！

コリイの正体が明らかになります

第13話

NOSIDE・・・

イザックがルナの方に訪れて二週間が経った

ここはルナの家の中・・・そこには二つの人影があった

「・・・大分制御できるようになったね」

ルナは先程瞑想を終えたイザックにそう話しかけた

「・・・まあ最初よりは幾分かましになりましたね・・・ご迷惑を掛けました・・・」

「ほんとだよ全く・・・何回暗示に掛けられたことか・・・」

厄介だったよほんとに、とぼやくルナにイザックは苦笑を返す

「魔力を込めない通常の状態が”好意の錯覚”なんて将来絶対女たらしになるね」

「ははは・・・」

最近では上手く制御できるようになったのだが”暗示”の制御の練習中は

かなりしんどかった・・・主にルナが

「・・・いや・・・まさか、服脱いで迫ってくるとは・・・なんでもないです・・・」

練習中のことを思い出し口にしたイザックだったが物凄い形相でルナが睨んでいたの
即座に話題を中断した

「……ま……あんたの初な反応もいつもと違って可愛らしかったけどね」

「……」

形勢逆転である……ルナが迫ったときイザックの反応は……自ら頭を思い切り壁にぶつけ……気絶
イザックが気絶した瞬間ルナは正気を取り戻し……事なきを得たのだった

「……しょうがないじゃないですか……女の人の扱いなんて知らないんですし……」

「はいはい……そろそろ晩飯の時間だね……コリイ呼んできとくれ……」

あたしは街に買出しに言ってくるから
「了解です」

そう言っつてルナは港町に向け歩いていき、イザックはコリイの部屋に向かうのだった

イザックSIDE・・・

コンコン、とコリイの部屋のドアをノックする

「はい」と中から可愛らしい声が聞こえた

「イザックだ、飯の準備するから手伝ってくれ」

「はい、わかりました・・・すぐ行くんで待っていてください」

了承し、俺は先にキッチンに向かった・・・

「・・・」
「・・・」

あの後すぐにコリイは部屋から出てきたのだが・・・

「・・・」
「・・・」

今日は何故かいつもより無口だ・・・

物静かな子だとは思っていたが今日はいつもと何かが違う気がした

「（なんかあったのか？）」

そう思っただがなかなか聞きにくく黙々と夕飯の準備をしていく
ちなみにコリイは準備等を手伝ってもらっている・・・

すると突然・・・コリイが口を開いた

「・・・イザックさん・・・」

「なんだ？」

いきなり話しかけられて多少あせったものの何か言いたそうなコ
リイを見て

悟られないように問いかける

「・・・人間じゃないヒトって・・・どう思いますか？」

「・・・え？」

「・・・」

いきなり、そんなことを聞かれ少し混乱する

「・・・別に、どうって言われても・・・」

「怖いですか？」

「それは無い」

俺は返答に困っていると言っているとコリイは「怖いか？」と聞いてきた

俺は自信を持ってそう答えたが、コリイにとっては以外だったらしい

「何故ですか？」

「・・・俺がもし種族差別してるような奴だったらまずエルフであるルナさんに

会いに来たりしないだろ？それに・・・俺のいた孤児院にハーフエルフの子が

いたからな・・・」

「ハーフエルフ」・・・

その種族は人間とエルフの間に生まれ、人間でも、エルフでもない存在

そして、双方からも忌み嫌われる存在であった・・・

「・・・自分と違う種族・・・それが何だ？・・・人間だって顔、性別、性格と

一人ひとり自分とは違う・・・なら種族が違っててもそれは俺の中では個性としてみる

・・・同じ・・・この世界で生きてるなら・・・そんなことできちやごちややってちや

いけないはずだ」

俺はそう自分が思った意見を述べた

「コリイはその意見が予想外だったらしく・・・狼狽していた

そして・・・一言・・・

「世界中の人間が・・・イザックさんみたいだったら・・・良かったのにな・・・」

「・・・どどういう意味だ？」

少し泣き声でそう呟くコリイ

俺はその意味を尋ねた

「・・・イザックさん・・・私は人間ではないです・・・」

そう言いコリイは胸に手をあて、唇をかみ締めながら

「・・・私・・・天使なんです」

そう言ったと同時に・・・淡い水色の・・・透き通った羽が姿を現した

第13話（後書き）

コリイの正体は”天使”でした

ティルズの天使は一般的に知られている天使の羽とは結構違いますよね？

作中にもあるように白い羽ではなく透き通った羽で人によって様々な色をしています・・・

何か意味があるのでしょうか？

私にはわかりませんが、天使のキャラ（クラトスやコレット）は大好きなので

いつか絡ませてみたいと思います^^

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第14話(前書き)

ルナさんが・・・

とりあえず投稿！

第14話

NOSIDE・・・

「・・・天使？」

「はい・・・」

コリイは震える声でイザックにそう告げた

「・・・私は・・・奴隷として・・・この国に来ました・・・そしてその途中で

私は逃げ出し・・・迷い込んだこの森でルナさんに拾われました・

・

ルナさんは人見知りといザックさんに言いましたが・・・本当は怖かっただけなんです・・・自分が人間じゃないってことを誰かが知れば・・・また・・・あんな風に・・・人として扱われないんじゃないかって・・・」

小さな拳を力一杯握りながらコリイは続ける

イザックは黙ってコリイの話を聞いていた

「この羽も・・・連れて行かれた貴族の人に見せたら・・・『気持ち悪い』って

・・・その後違う場所に行くまでは・・・まともな扱いをしてくれませんでした」

コリイはイザックを見た・・・

大半が恐怖・・・そして・・・ほんの少しの希望が映る目で

そして・・・

「……イザックさんはどう思いますか？……この羽のことや
・
・
天使のこと……」

そうコリイはイザックに問いかけた

イザックは……少し何かを考えてから……コリイに優しく笑
いかけた

「……さつきも言っただろ？俺は種族なんて気にしない……
天使だろうがなんだ

ろうがそれはそいつの個性だって……それに……その羽を気
持ち悪いって言った

奴は目が腐ってるんじゃないか？……コリイのイメージに合っ
ていてとてもきれい

だと思うよ」

イザックはそう言った……

コリイの目が見開かれる

そして……涙が溢れ出した……

「……っ……すいません……つく……」

そっといザックはコリイの頭に手を乗せる

「……もう……一人で抱え込まなくていいよ……コリイは
もう、一人じゃない」

その言葉を聞き、コリイは声を上げて泣いた

今までどんなに辛くても……人前で泣いたりなんかしなかった

そのコリイが・・・大声で・・・泣いていた
イザックは黙って彼女の頭を撫でる
そしてイザックは彼女が泣き止むまで撫で続けた

「・・・大丈夫か？」
「はい・・・すみません」

一時間ほど泣き続け、コリイはようやく泣き止んだ
そしてイザックはコリイの肩に手を置き

「また辛いことがあったらちゃんと俺かルナさんに話してくれた

らしい・・・

わかったな？」

「・・・はい」

コリイは頷きイザックは満足そうに笑った

「よし・・・飯は・・・」

「あ・・・」

「・・・あ!？」

・・・話をしていたのですっかり忘れていた
夕飯の準備がまったくできていない

そして・・・

「ただいま、今日の夕飯は・・・」

ルナが帰ってきた・・・

そしてルナは見た

料理を途中で止めている+

コリイ涙目・・・+

イザック肩に手を置き若干青い顔+

何故かはだけている服（コリイは泣くと胸元の襟を引っ張って涙
を拭く）
〓

以下ルナの妄想・・・

『イザックさん！やめてください！！』

『ゴメン・・・もう我慢できないんだ』

『ダメ・・・嫌なの！！』

『大丈夫・・・すぐに良くなる』

『あ・・・だめえ！！』

妄想終了・・・

「イザックウウウ！！！！！！」

「は、はい？・・・」

「お前！！コリイに手を出したな！！！！このロリコン！！！！」

「・・・は？」

イザックは夕飯ができていないことに怒られると思ったが・・・
予想外のことに混乱する

「え？何のことです？」

「問答無用！！！！天誅！！！！！！！！！！」

「え！？ちょ！！！？？まっ・・・」

その後何かを殴る音と一週間ぶりにイザツクの悲鳴が轟くのであった

コリイSIDE・・・

あの後ルナさんの誤解を解くのに一時間、ようやく理解してくれたようだ・・・

「はぁ・・・疲れた」

私はそう呟き自分のベットに倒れこむ
本当に今日はいろいろあった

「（イザツクさん・・・）」

心の中で名前を呼んだ

私は・・・親の顔知らない
物心ついたころにはすでに奴隷だった
そして貴族は私を人ではなくものとして扱っていた
男の人に犯されかけたことだっただけである
みんな・・・私のことを見てくれない・・・
そう思ってた

でも・・・あの二人は違った

ルナさんは初めてここに来たとき空腹で死に掛けていた私に食べ
物と居場所をくれた

イザックさんは他の人たちとは違い私の全てを受け入れてくれた。
・
・

二人は他の人と違った
必ず・・・

「私を・・・見てくれる」

そこが・・・違っていた
そして何より・・・嬉しかった

「（生きてて良かった・・・）」

心からそう思った

「（それにしても・・・）」

ベットについている枕に顔をうずめながら先程のイザックの言葉を思い出す

『コリイのイメージに合っていてとてもきれいだと思うよ』

先程は嬉しさのほろが上回っていたので思わなかったのだが・・・

「（は、恥ずかしい／＼／きれいって言われた・・・い、いや羽のじとってわかってるけどきれい
って・・・）」

初めて言われた異性の甘い言葉を思い出し赤面し、コリイが寝付いたのは

深夜になってしまったのだとか・・・

第14話（後書き）

はい、ルナさんが暴走しました^^；

クールキャラにしようと思ってたんですが・・・やっぱり無理でした^^；

作者の力不足でして・・・許してください

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

閑話・・・スキット1（キャラ崩壊注意）（前書き）

テイルズIIスキット

というあほな方程式が私の中に取りまして書いてみました・・・

それではスキット(?)をどうぞ・・・

閑話・・・スキット1（キャラ崩壊注意）

『リンの料理』

「いやイザック・・・あなたの料理ほんとおいしいね！」

「それはどうも」

「・・・ちなみに・・・先生？ってひとの料理はどんなだったんですか？」

「・・・」

「・・・」

「あ、あの・・・どうして遠い目になってるんですか？」

「・・・ルナさん・・・先生の一番ましな料理ってどんなのでした？」

「・・・オムレツだね・・・中の肉がアックスビークだったけど・・・」

「・・・そうですか・・・俺のは・・・肉じゃがですかね・・・」

「じゃガイモがさつま芋でした」

「一番ひどい料理は・・・」

「・・・（ガタガタ）」（急に震えだすイザック）

「イ、イザック！？コリイ！！精神安定剤取っとくれ！！」

「え”！！は、はい！！」

『君もか・・・』

「練習終わったな・・・今日の飯は何だイザック？」

「今日はコリイが作るって……」

「……何？」

「いや、だから……コリイが……」

「……」(急に血の気をなくすルナ)

「どうしました？」

「……ちよつと町に言ってくる……」

「は？い、いや飯食ってからでいいじゃないですか？」

「……コリイは……」

「あ、ルナさくん、イザックさくん！」

「!？」(絶望に満ちた顔のルナ)

「お！コリイ……それなんだ？」

「これですか？サンドイッチです!!どうぞ」

「お！サンキュー……ルナさん食べないんですか？……なん

でキュアボトル

持つてるんですか……？」

「……すぐわかる」

「?……まあいいや、じゃあいただきます」

「はい」

「(パクっ)……(バタッ)」(一噛みして倒れたイザック)

「イザック!!しつかりしろおお!!飲め!早く飲めええ!!!!」

「……あれ？」

『その後日』

「……死ぬかと思いました」

「あたしのあの表情の意味……わかつただろ？」

「ええ・・・まさか・・・この吸血鬼の能力に助けられるなんて・・・」
「・・・いいかい？絶対にコリイに料理を作らしちゃいけない！」
「わかってますよ・・・先生のよりひどいですから・・・」
「だるうな・・・ちなみに感想言つならどんな感じだ？」
「・・・この世のものじゃない」
「フタリトモ・・・？」
「「（ビクッ）」」
「・・・フッフ・・・聞こえてますよ・・・全部」（目に光が無
い）

「「（ダッ）」」（逃げ出す二人）
「逃がしません・・・！！」
「ちょ・・・弓！！」
「こ、コリイ！落ち着いとくれ！！」
「ウフフフ・・・」
「あああああー！！」
「イザックウウウ！！」

『年齢』

「イザックさんは年いくつなんでしょうか？」
「17だ・・・コリイは？」
「15です」
「2つ違いか・・・そんなに離れてないんだな」
「そうですね、イザックさん大人っぽいですから」
「はは・・・思ったんだが・・・ルナさんって何歳なんだ？」

閑話・・・スキット1（キャラ崩壊注意）（後書き）

それぞれのスキットで・・・ポケとツツコミが違ってる・・・

どうでしたか？批判があったら・・・次回は考えます・・・

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第15話(前書き)

とりあえず投稿

次回からまた戦闘です

第15話

ルナSIDE・・・

「・・・やつと完全に制御できるようになったね」

「はい、おかげさまで」

イザックはそう言って笑う

この子が来て1カ月・・・ようやく3種類の”魔眼”の制御に成功した

「といっても”魔眼”の制御なんてやったことも無いっえ、魔術の扱人も平凡だった

イザックがこの期間で制御できるようになったのは賞賛に値する

「さて・・・あたしはこれからコリイに魔術と弓を教えなきゃならないんだが

・・・一緒に来るかい？」

「そうですね、どうせ暇ですし」

イザックと一緒に行くといっただのであたしは心の中でガッツポーズした

「（あたしが楽だからねえ・・・）」

そう・・・イザックは飲み込みが尋常じゃなく早い

あたしが教えられるのは水、風、土の魔術と弓、槍の武器の扱いだ
そして家の書物の中に回復術の本がある

それらをイザックとコリイに教えているのだが・・・

「(イザックの奴・・・ほとんどマスターしてるからねえ・・・)

「そう・・・この1ヶ月でほとんどマスターしてしまっているのだ
弓ではまだ負けないが、槍術ではもうあたしでは勝てないレベル
にまでなっている

「それにこういった武術や魔術に対する貪欲さは半端が無かった・・・
回復術も本を読んでほとんど使えるようになってしまっていた

「・・・全く・・・神は不平等だね」

「恐らく彼の才能を見た人全員に共通するだろう
それほどまでにすごい奴なのであった

「ルナさん？どうしました？」

「いや、なんでもない・・・コリイが待ってる、早く行こう」
「はい」

「コリイを待たしてはいけない、あたしはそう思い、急いでイザックに駆け寄った

そして、彼のつける眼帯を見て一言告げた

「もう大体制御できるようになった、イザックもこれでやっと眼帯がはずせるな」

「あまりつけていて良く思われるものではないのでそう言った
しかし、イザックから返ってきたのは意外な返事だった

「そのことですが・・・これ、全力で戦うとき意外はつけとくとにします」

「・・・なんでだ？見た目的にも似合ってはいるが・・・」

イザックは苦笑しながら

「別にそういう意味じゃなくて・・・ルナさんから貰った品ですから」

そう言った・・・

その一言にあたしは驚いた

「・・・そんなの気にしなくてもいいぞ？」

「いえ・・・俺がつけておきたいんで」

はっきりそう言った

「全く・・・」

こういったところは・・・ほんとに子供っぽいし・・・リンに似ている

薄く笑って一言

「ガキ」

「・・・否定しません」

そう言ってやると拗ねたようにそっぽを向いた

確かに・・・嫉妬するくらい才能に恵まれたイザックだが・・・
あたしの教え子には変わりが無い

だから・・・あたしは死ぬまで・・・この子を見ていようと思った
そして、力になれるなら・・・全力でこの子の力になるうと・・・
もうあたしの中では・・・この子もコリイも・・・大切な子にな
っていた

「早く行きましょう」

「ああ・・・」

そう思っているとイザックの声で現実に戻された
そして、イザックと共にコリイのところに向かった

NOSIDE・・・

「悪いコリイ・・・待たしたな」

「いえ全然です、もう制御の練習はいいんですか？」

「ああ」

「もう大丈夫だよ」

ルナは短く肯定し、イザックは薄く笑って答える

「じゃあ……弓の鍛錬から始めようかね……的用意してくれ」
「はい」

「じゃあ俺は弓の用意してきます」
「ああ頼んだよ」

いつもどおり、コリイの鍛錬が始まるうとしていた

そのとき……

「！？コリイ！！伏せろ！！！」

「え……？」

ルナの声に的を運んでいたコリイはしゃがみこんだ

ヒュン、と空を切る音がし……見ると木に矢が刺さっていた
コリイが立っていれば肩あたりに直撃している高さであった

「誰だ！！出て来い！！！」

ルナの怒声が響く

「……ちつ……外した……」
「当てるよアホ」

そして森の中から二人の人が現れた

「……何しに来た」

「……その天使……渡してもらおうか」

ルナの静かな問いに弓を持つ男が答えた

「さもなければ……殺すぜ？」

もう一人の男……ゴツイ図体に合った大きな斧を持っている男が舌なめずりしながらそう告げた

「……コリイをどうするつもりだい？」

「決まってるんだろ！！貴族に売り渡すんだよ……なあ？」

ビクツとコリイの体が震える

「……久しぶりだな、お前が逃げたせいで……報酬をまだもらえてない」

「おとなしく捕まれ……な？」

ガタガタ、と震えるコリイ

そこに……

「アクアエッジ」

「エアラスト！！」

「「!?」」

二つの術が詠唱された……もちろん行ったのは……

「渡すかよ……お前らなんか」

「イザックの言とおりで……あたしが……コリイを縛るあ
んたたちを……」

屠つてやるよ……」

怒りに顔を染めたルナと弓をへし折って怒りを示すイザックであ
った

第15話(後書き)

はい・・・意味わからん二人の登場です^^;

感想アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第16話(前書き)

書けたので投稿

ルナさん無双です

二つ名的なものが出てきますが・・・すごく安直です
ネーミングセンスが無いので・・・

それではどうぞ^^

第16話

NOSIDE・・・

「ああん!?なめたこと言うアホ二人やな」

「・・・邪魔するのなら・・・排除するぞ?」

斧を持つ男は無機嫌そうにこちらを睨み、弓を持つ男は無機質な声でそう告げた

そんな二人を憤怒の表情で睨みつけるイザックとルナ・・・

「上等だ・・・排除できるんならしてみろ・・・」

「・・・身の程を知りな・・・糞蟲共」

「・・・ルナさん、弓の男の相手してください」

「・・・そのつもりだったよ・・・コリイに矢を放った男だよ?

ぼこぼこにしなきゃ気がすまないね」

「・・・ごちゃごちゃ何言ってやがる!!行くぞ!!」

「・・・言われなくても」

斧の男が我慢しきれなくなったのかこちらに突進してきた
弓の男は詠唱を始める

「・・・シャープネス」

「爆碎斬!!」

補助呪文が詠唱された瞬間斧の男は得物を振り下ろす

「・・・なるほど・・・この二人はコンビでそれなりにやってき

てるようですね」

「・・・だね・・・まあ・・・あたしの敵じゃないけどね・・・
陽炎!!」

「!?!」

素直に男たちの連携に感心していると、ルナさんが動いた
目標の真上に瞬間移動し、落下しながら蹴りつける技である
弓を持つ男はルナさんを見失い、狼狽したところをルナさんが蹴
りつける

「マーク!!」

「・・・仕事中は名前を呼ぶな・・・大丈夫だ」

マークと呼ばれた男はルナの蹴りを受け倒れそうになるが瞬時に
受身を取った

「・・・あなたの相手はあたしだ・・・手加減しないから」

そしてルナは受身を取り膝をついている弓の男、マークを冷たい
目で睨み

そう言い放った・・・

イザツクは・・・

「・・・おい、こら・・・仲間の心配じゃなく自分の心配をしろ」

斧の男に・・・怒りを隠そうともせず、激怒した顔で睨みつけた
そして、戦闘が始まった・・・

「・・・手加減しないとってたが・・・得物も持たないあなたが
・・・俺に勝てるとは思えないが？」

マークは警戒を緩めることなくルナに弓を向けたままそう尋ねる。

「・・・そうだね、丸腰じゃ流石に厳しいね」

「・・・」
「でもね・・・あたしにあんな金属でできた得物なんていら
んだ」

「・・・何？」

意味がわからないといった風に再度狼狽してしま
う
すると突然ルナは右手を横に突き出した

「・・・昔・・・ここら辺でちょっと有名だった”光の妖精^{エルフ}って
知ってるかい？」

「・・・20年ほど前から姿を消したって言うあれか？」

「・・・そんな前だっけ？覚えてないわ」

「・・・それがどうした・・・っ!？」

マークは何の話かわからずに苛立った風にルナを睨みつけるが、
すぐにその顔は驚き一色に変わってしまふ

何故なら・・・ルナの手には淡い水色に光る・・・
槍が握られていたのだから・・・

「・・・魔力構成があたしの得意分野でね・・・水の魔力を具現
化して武器を

作れるのさ・・・これがあたしの武器、『魔槍』・・・そして、
あたしが

さっきの話題を出したわけがわかっただろう？あたしがその・・・
”光の妖精”と

呼ばれたエルフさ！！手加減しない・・・徹底的に叩き潰してや
る！！光龍槍！！」

「ちっ・・・!?!?」

マークは向かってくるルナの光龍槍を身をかがめて避ける
そして、彼女に向け弓を引き絞る、がそこに彼女の姿は無い

「(上!?!?)・・・!?!?!?!」

ザン、と先程まで彼のいた地面がえぐられる

「・・・瞬迅槍!!」

しかし、そこからすぐさま攻撃態勢
マークは受け流すことができず直撃を食らふ

「ぐ・・・!?!?」

「天雷槍月！」

「がはっ……!?!」

マークは槍を叩きつけられ続く落雷もまともに受けてしまっ
落雷を受け……電流が走り麻痺して動けないマーク
そこに……冷たい目で見下ろすルナの姿が見えた

「ひっ……!?!」

「……あたしの……家族を侮辱したんだ……痛い目見ても
らっよ」

そう告げるとルナは詠唱を始めた……
マークは麻痺した体を必死に動かそうともがく……が
結果は……絶対に覆らない

「くらいな……インブレイスエンド……」

「うああああああ!?!」

巨大な氷の塊を相手に落とす水属性最強術……インブレイスエ
ンド

完全に格が違う強さを見せつけたルナ

下半身が下敷きになり……気絶したマークを縄で縛りつけ

コリイのいる場所に戻る

「（コリイのところに行かないと……!?!）」

こうして、マークは一撃も攻撃することが叶わず、ルナの圧勝に
終わった

第16話（後書き）

ルナさん強すぎた感が否めませんが・・・

まあ相手がそんなに強くなかったんだと思っといってください^^ ;

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第17話(前書き)

イザツクの戦闘

魔眼を使つての初戦闘です！

第17話

イザツクSIDE・・・

「おい兄ちゃん・・・悪いことは言わん・・・そこをどきな」

斧を持った男が笑みを浮かべながらこちらに一步近づぐ

「断る・・・さつきも言っただはずだ・・・コリイは渡さない」と

「・・・こつちは商売なんだ」

「・・・人を売るのが商売？ふざけたことを・・・余計渡すわけにはいかない」

「そうかい・・・じゃあ・・・死ねよ!!」

やはり、強行策で来るようだ・・・斧の男は先程と同じようにこちらに

突進してくる

「おらあ!!爆碎斬!!」

「・・・それしかできないのか・・・!!」

またも斧を地面に叩きつけ石つぶてをこちらに飛ばしてくる
俺は剣を抜きその全てをはじき返す

「瞬迅剣!!」

「甘い!!発!!」

「ちっ!!?」

「おらあ!!獅子戦吼!!」

イザックはすばやく剣を突き出すが、相手の鬨気の爆発に吹き飛ばされる

受身に成功したがすぐさま斧の男はイザックを吹き飛ばそうと技を放つが……

俺は身を低くし、獅子戦吼をかわす、そして

「散沙雨!! 秋沙雨!!」

「ぐお……ぬっ」

「驟雨双破斬!!!」

連続にして25回の突きを食らった斧の男
たまらずに膝をついた

「ちっ……やるな兄ちゃん……」

呻く斧の男はゆっくりと立ち上がった

「……だが!! 負けるわけにはいかねんだ!!!」

うおおおお、と声を張り上げながら再び突進してくる斧の男

「……降参してくれば楽だったんだが……いいだろう」

そう言いイザックは眼帯をはずした

「……”魔眼” 壱の型……発動……『ビジョン・エターナ永遠の幻』!!!」

眼帯をはずした目を開く

その目は……真っ赤に染まり……まるで血のように濃かった

そして・・・斧の男は・・・その目をしっかりと見てしまった・・・

男は意識が遠のき・・・視界は黒に染まった

そして男は目を覚ました・・・

「あ・・・あれ・・・俺なんでこんなとこに・・・」

そして周りを見渡すと・・・見る限り荒野が広がっていた・・・

「（俺はたしか・・・天使を探しに森にいたはずじゃ・・・）」

ガチャン・・・と金属の音がする

「あ・・・？」

振り返るとそこには・・・数え切れないほどの骸骨が・・・鎧と
剣を持ってこちら

に向かってきていた・・・

「は・・・なんだよこれ・・・」

斧の男は後ずさり、逃げようと試みるが・・・

「は・・・？なんで・・・いつの間に!？」

後ろには先程まで無かった壁がそそり立っていた

ガチャンガチャン、と金属音が近寄ってくる

「く、くそおおおお!!」

覚悟を決めたのか、斧の男は骸骨の群れに突貫する

「おらあ!!・・・死ね・・・!シネエエ!!」

斧を振り回し、骸骨たちを破壊していく・・・
が・・・

「がつ・・・!」

直後、腹部に痛烈な痛みを感じる

思わず斧を落としてしまい、骸骨の群れの中に消える

「ひっ・・・!」

そして、骸骨は剣を振り上げる・・・

「うわあああああ!!」

そしてまた・・・斧の男の視界は黒に染まった

「はあ……!!」

斧の男は再び目覚める……周りを見渡すと……

「(俺の……家?)」

そう、彼の我が家だ

そして男は安堵したように息を吐く

「全部夢か……」

そう……信じたかっただろう

また……ガチャンガチャン、と金属音が響く……

「あ……う、嘘だろ……?」

そしてドアがゆっくり開かれる……

そこには……先程の骸骨がまた……現れた……

「うああああああああああああああああ……!!」

その幻は……かけた者が解くまで永遠に続く
何度死ぬ体験をしようと……いつまでも続く

「イザツク!!!」

ルナさんがこちらに駆け寄ってきた、そして・・・

「あんた・・・魔眼使ったのかい？」

「はい」

白目をむき、泡を吹きながら失禁している斧の男を見てルナさんは顔を引き攣らせる

「えぐいね・・・あんた」

「コリイを物扱いしたんです・・・これぐらい当然です」

そう言いきった俺にルナさんは苦笑いをする

「弓のほうも捕縛しておいた、後で港町の駐屯兵どもに渡してお

くよ」

「お願いします」

「・・・コリイのほうに行こう」

「・・・当然です。またあいつのことですからきつと私のせいでは
とか言ってると思うんで」

俺とルナさんはこうしてコリイの元に走ったのだった

第17話（後書き）

はい、戦闘終了です^^；

いかがでしたか？

お見苦しい点は多々あると思いますが・・・

また感想などをもらえると嬉しいです^^

・ ちなみに魔眼の技名は『永遠の幻』をイタリア語にただけです・

それと、幻覚の種類は一応イザック自身がどんな感じの幻覚を見せるか

決めれるという設定で行きたいと思います^^；

第18話(前書き)

LUISIDE

ルイデ

第18話

コリイSIDE・・・

私は・・・矢の刺さった木の陰で震えていた・・・

「（また・・・あの人たちが・・・）」

忘れそうになっていた・・・いや、忘れたかった記憶がまた蘇った
奴隷であることを・・・

そして・・・初めて優しくしてくれた・・・あの二人に迷惑を掛
けてしまった

自分はここでずっと震えていただけ・・・

「・・・やっぱり・・・私は・・・」

私は決意する・・・私がここにいたらきつと・・・また二人に迷
惑を掛けてしまう

「・・・ありがとう・・・ルナさん、イザックさん・・・さよな
ら」

私は歩き出す・・・恐らく近くに駐留しているであろう奴隷商人の
一団を目指して・・・

そのとき・・・私の手を掴むものが現れた・・・

「どこ行くんだいコリイ？」

ルナさんであった
走ってきたのか呼吸を乱している

「……イザックさんは？」

「……なんか、あの二人だけじゃなかったらしくてさ……
他のやつが攻めてきたから相手してる。一人でいちゃ危険だから
あたしと一緒に……」

「……私……あの人たちのところに行きます」

私は正直にルナさんにそう告げる
瞬間、ルナさんの表情が固まった

「……何言ってるんだい？」

「……もう……嫌なんです……私のせいでお二人に

迷惑を掛けるのが……」

「迷惑なんてあたしもイザックも思ってるよ」

「……でもあたしはきつと……二人といると甘えてしまうか

ら……

今回みたいなことが起こっても……私は何もできないから……
だから……

迷惑を掛けないように……ここから出て行きます」

「ダメだって……」

「もう放っておいてください!!!!」

私は止めてくるルナさんの手を振り払い叫ぶ

「私は!! 奴隷なんです!!!!そして……貴方達みたいな強さ
も無い

弱い子なんです!!!!……どうして止めるんですか!!!!どうして・
・

やさしく・・・ずるんですか・・・」

最後のほうは泣いてしまっていて上手くしゃべれなかった・・・

「・・・迷惑がかかるって・・・わかってるのに・・・どうして捨てないんですか・・・」

ボロボロと・・・落ちる涙

止めれずに流れ続ける涙を・・・ルナさんはそっと拭った

「・・・あんたをあいつらに渡すなんて・・・できないよ・・・
もう

あんたに情が移っちまってるしね・・・何日も一緒にいて・・・
生活

してきたあんたを・・・わざわざ辛い思いをするとわかってると
ころに

渡すなんて・・・あたしにはできない」

そしてルナさんは言葉を続けた

「まだあんたもイザツクもここに来て少ししか経ってないけど・・・

あたしにとっては息子と娘みたいに思ってる・・・あんたはどう
だい？

・・・あたしは・・・・・・もう二人と別れたくないよ」

ルナさんは・・・少し不安そうな顔をしながら私に問いかけてきた

「・・・私だって・・・一緒にいたいです・・・」

「なら・・・一緒にいよう・・・あんたに害する奴が現れたなら・・・

・
あたしとイザックが追い払ってやる・・・安心しな・・・もうコ
リイは

「・・・一人じゃない」

私は目を見開いた・・・

まだ涙は流れているが・・・少し笑って

「イザックさんも・・・同じこと言ってくれました」

「・・・だろっ？・・・なんだかんだ言っ・・・あの子はあた
しに似てるから」

ルナさんは嬉しそうに微笑んだ

そして・・・声が聞こえる

「・・・すいません！遅くなりました!!」

「ああ・・・大丈夫だったかい？」

「ええ・・・どうやら最初に来た二人がトップの二人だったみた
いです

「・・・数で襲おうとしてきましたが問題なく全員捕縛しました」

「悪かったね・・・でもまあ・・・あなたの言うとおり、コリイは
やっぱり自分のせいだと思ってたみたいだね」

「でしよう？・・・全く・・・」

イザックさんはこちらに歩み寄ってきて頭に手を乗せた

そして・・・

「・・・もう少し・・・俺たちのこと信用してくれてもいいと思
うぞ」

苦笑しながらそう言った

「同感だね」

けらけらといつもどおり笑うルナさん

「さて・・・特訓はまた明日にして飯にしましょうか？」

「そうだね・・・ん？」

「どうしました？」

「ご飯にしようということなので家に入ろうとするとルナさんは立ち止まった

「ああ!?!??ゆゝ、弓が・・・!?!」

「「あ・・・」」

そう・・・ルナさんが作ってくれた自作の弓が真っ二つに折れるのだ

「・・・」

「・・・」

「・・・」

イザツクさんに視線が集まる

たしか・・・

『渡すかよ・・・お前らなんか』

第18話（後書き）

はい・・・どうでしたか？

コリィはこれから強くて優しい子にしていく予定です

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第19話(前書き)

ネタバレです^^^；

コリイが明るくなる回にしよつとしたら・・・
何故かこうなりました・・・

どうぞー！

第19話

NOSIDE・・・

そしてそれから一週間

コリイも前のような暗く無口な性格から一変し、たびたび笑顔を見せ

三人で平和な生活をしていたのだが・・・

「・・・暇だな」

「そうっすね・・・」

ルナとイザックは家の椅子に腰掛けそう呟いていた

あの奴隷商人どもはイザックの暗示でこの森での出来事を忘れさせた後、ルナが港町の

兵士に引き渡し、事件は解決した

「・・・そういえばコリイはどうしたんですか？」

「さあ？・・・今日は朝からみてないね」

不思議に思った二人だったが特にどうということも無いのでスルー
そしてまた

「・・・暇だな」
「・・・暇ですね・・・」

無駄に時間を過ごしている二人だった

一方・・・コリイは

「・・・」
「・・・」

物凄い勢いで何かを編んでいた・・・
女物の服を編んでいるようだ・・・コリイが着るには大き
すぎる

サイズである
そして・・・

「できた・・・やっと」

疲れの色が半端無い顔だったがコリイは歓喜の声を上げた

その服はワンピース、薄い水色をしてとてもシンプルなデザ

インである

「・・・ウフフ・・・楽しみです」

コリイは笑みを浮かべた・・・その笑みはどこか異様な笑みであった

「暇だな・・・」

「そうっすね・・・もう夕方ですよ」

朝から二人はこんな調子であった

ひたすらルナが呟き、イザツクが返す・・・

ただそれだけで半日以上過ごしていた

そこに

「イザックさん・・・ルナさん・・・」

コリイが現れた、後ろに何か隠した感じで・・・

「おう、コリイ・・・どうした？つてか今日なんで部屋から出てこなかったんだ？」

「・・・それよりコリイ・・・目のくまがひどいよ？寝てないのかい？」

イザックとルナはそれぞれ心配そうに声を掛ける
しかしコリイは嬉々とした表情で

「全然大丈夫です！・・・それより二人とも・・・これ、どう思いますか？」

そして先程から後ろ手に隠していたものを二人の前に出す・・・
それは

「・・・ワンピース？」

「へえ・・・上手じゃないかい！昨日糸をくれって言ってたのはこれを

作るためだったのかい？・・・それにしても、サイズでかかないかい？」

イザックは出された服をみて不思議に思い、ルナはコリイが作ったその
出来を素直に褒めていた、そして一つの疑問・・・

そう・・・サイズが大きいのだ

「あたしでも大きいよ?・・・探寸したのかい?」

「はい・・・もちろんです」

「ならなんで・・・」

「私のもルナさんのでもありません・・・イザックさんに着て貰いますから」

刹那、時間が止まった・・・

「「は・・・?」「は」

同時に声を上げたルナとイザック

「ですから・・・イザックさんに着てもらいます」

「・・・ちよつと待て、何で俺・・・?」

「そんなの簡単です・・・似合いそうだからです」

「なんてシンプルな理由なんだ・・・」

「感心してる場合じゃないでしょ!?!?コリイ・・・俺は男だ」

「百も承知です」

「なら・・・」

「一生懸命作っただんです・・・着て・・・もらえませんか?」

「ぐ・・・」

イザックは何とか逃げようとするがコリイのねだる顔にたじろぐ
コリイはつい先日辛い目にあっただけだから、だから自分のできる
ことなら

やってあげたい・・・が

「・・・流石に・・・ちよつと」

イザックも男であり着たくは無いだろう・・・

しかし・・・

「面白そうだ・・・着ろ」

「ルナさん!？」

「だってほんとに似合いそうだし」

そう言っつていつものようにけらけらと笑うルナさん
確かに、ルナのいうとおりなのだ

長く、白く、後ろで縛っている美しい髪

中性的ながらも可愛らしい顔

スラッとした細身の体型

長い足に、縛った髪の影響で覗くうなじには色気があるように見える

「・・・ちよつと・・・失礼・・・!」

マジで危険な空気になってきたので全力で逃げ出すイザック

が・・・

「ライトニング」

「ぐわっ!？」

・・・見事にコリイの術がイザックに命中

イザックの全力の走りは目で追えないほど早いのに・・・恐るべしコリイ

「でかしたよ!!!それ!!!」

それを見たルナがどこから出したのかロープでイザックを縛る

「ちよつと!?!ほんとにまつ・・・」

「着せ替え〜〜〜〜!!!!!!」

「やめてくれええええ!!!!!!」

数分後・・・

「やっぱり似合うね」

「でしょう・・・私にも生きがいができました」

「・・・もうヤダ・・・」

いつもと同じく笑うルナと頬を赤らめうつとりするコリィ

そして・・・絶世の美女といっても過言ではない姿となったイザック

その顔には疲労と絶望・・・羞恥ととにかくいろいろ混ざった顔をしながら

泣いていた

「次はどんな服がいいでしょうか?」

「メイド服とか?」

「やめろおおお!!!!」

「いいですね!猫耳もつけましょう!!!!!」

「聞けええええええ!!!!!!」

コリイは明るくなってよかったのだが・・・イザックはこれから
心に
傷を負うことになるのだった・・・

第19話（後書き）

イザックの容姿は・・・一応女よりの中世的ということだ・・・
・・・女装することになりました・・・

容姿の説明って難しいですね・・・

それぞれ皆さんはどんなイメージを持ってるんでしょうか？

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第20話(前書き)

とりあえず投稿

今回は吸血鬼関係の話です

どうぞ！

第20話

イザツクSIDE・・・

奴隷商人の件も片付き、コリイにも笑顔が戻り平和な日が続いた
しかしその日々は、急に終わりを告げた

深夜・・・

ほとんどのものが眠りに落ちているであろうこの時間帯
俺は体に異変を感じ、苦しみの中にいた

「・・・ぐ・・・がは・・・!!」

体が・・・焼けるように熱い・・・眼帯に隠している眼からは血が
流れ落ちていた・・・

「（この感覚・・・あの時と・・・）」

そう・・・酷似していた

彼が人間ではなくなった・・・あの時の感覚に

「（つく・・・くそお・・・）」

必死に痛みを堪え、耐え続ける
しかし・・・

意識は拒んでも・・・体は違った・・・

気づけば俺は・・・動いていた

ルナSIDE・・・

私は・・・異様な気配を感じ取り目を覚ました

「(何だこの気配・・・)」

警戒し、コリィの部屋に移動しようとしたとき

目の前に一つの人影が現れた・・・

「・・・イザック？」

声を掛けるが返事が無い・・・

いつものイザックではない

なにかが・・・何かが違っていた

「ル・・・ナ・・・ざ・・・ん・・・逃げ・・・」

ここまで言つとイザックは・・・剣を手に襲い掛かってきた

NOSIDE・・・

ギイン、と響く金属音

ルナは咄嗟に魔力を練り槍を作りだし、イザックの攻撃を受け止める

「イザック!? どうした!?!??」

ルナは明らかに動揺していた

「……ぐ……から……だが……い……う……と」

途切れ途切れに言葉をつむぐイザック

しかし、イザックの体は剣を振りかぶりルナに迫っていた

「……つく!」

「ウウウウ……!」

苦しそうに呻くイザック

そしてルナの頭に一つよぎった文があった

それは……昔研究していた……吸血鬼について……

それは……

『吸血衝動』である

それは、どうしても抑えられない吸血鬼の特性

それは理性では制御できず、異性の血を本能のまま求めるものだ

「（……最後にイザックが血を吸ったのは……確かエリックの血……異性の血

でもなければ舐めただけ……）……!?!」

剣を振り下ろし、ルナの槍との鏝迫り合いとなる

ルナが分析している間もイザックは襲い掛かってくる

「（・・・とりあえず動きを封じ・・・）・・・何っ！！??？」

動きを封じることが前提に戦うことを決めたルナだったが
その前にイザックが行動を起こした

なんと、罅迫り合いをしていたルナの魔力で作った魔槍に噛み付いたのだ

そして、『魔槍』は消えうせ、イザックの剣はルナを斬り裂いた

「くっ・・・!?!？」

肩から血が流れ出す、痛みに一瞬気をとられる

そして・・・

ダン、と音がるほど勢いよくイザックは床を蹴り・・・

「ガハッ!?!？」

ルナの首を片手で持ち、そのまま上に上げた

「がっ・・・」

息ができず、苦しむルナ

もがきながらイザックを蹴りつけるが全く動じない

そしてイザックは・・・鋭利な犬歯をむき出しにし・・・
ルナの首元に顔を近付ける・・・

「（・・・殺られる・・・!!!）」

そう思い目をきつく閉じた・・・そのとき

「ウインドカッター!!」

小さな風の刃がイザックを切り裂いた

「・・・っ!?!」

突然の攻撃を予期してなかったのか、腕の痛みに思わずイザックはルナを落とした

その隙にルナは床を蹴り後退する

「・・・ごほ・・・すまないコリイ・・・助かったよ」

「いえ・・・あれは・・・イザックさんですか?」

「ああ・・・暴走してるみたいだが」

ルナの窮地を救ったのはコリイだった

恐らく物音が聞こえたので駆けつけたのだろう

「・・・どうでしょう?」

「一旦気絶させるしかないね・・・」

ルナはそう言いました『魔槍』を構成した

「・・・コリイはとにかく術・・・当たるまでの時間はあたしが稼ぐから・・・」

「・・・自信ないですが・・・やります」

そうルナはいいコリイの返事を聞いてから突進した

第20話（後書き）

どうでしたか？

やはり吸血鬼といえはこれになるかなと思ひまして・・・

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^^

第21話(前書き)

とりあえず投稿・・・

第21話

NOSIDE・・・

キン、ギイン、と甲高い音が鳴り響く

「・・・くっ・・・瞬迅槍!!」

ルナは渾身の力を込め槍を突き出すがイザツクは軽くその槍を弾く

「アア!!」

弾いた隙に剣を横なぎに振るう

ルナはジャンプして何とかかわす

「旋風槍!!」

着地してすぐにルナは魔槍を横に振るい、真空波を発生させる
それは見事に命中し、イザツクに傷を負わせる・・・が

「・・・」

「・・・すぐに治っちまうねえ・・・ホント、敵に回すと厄介だ
ね」

切り裂いた箇所が徐々に回復していくのを見てルナは呻いた

「ライトニング!!」

コリイの術が完成した……しかしイザックはいとも簡単にかわ
してしまっ

「（動きを止める……ダウンさせるしかないかね）」

ルナはそう考えるが……

「……………」

「（……隙が無いんだよね……）」

元々隙が少ないイザックだったが今はいつも以上である
寸分の隙も見せないイザックにルナは焦り始めている

「……………」

「……………つく!?」

そして、攻撃の出だしを全く読めない太刀筋……
過去にルナが戦った相手でもここまでの者は数えるくらいしかい
ない

「……………てやあ!!瞬迅槍!天雷槍月!!!」

突きの後、ジャンプしながら魔槍を叩きつける

そして、イザックは剣で受け止め、直後その脳天に雷が……落
ちなかった

「ちつ……ほんとに厄介だね」

恨めしそうにルナは呟く

イザックはルナの槍を受け止めた瞬間半歩後ろに下がり、落雷を

くらわなかった

「（あたしの唯一ダウンを取れる技だったのに・・・）」

ルナが覚えている技にはダウンを取れる技は「天雷槍月」しかない
これが効かないとなると、やはり気絶させるしかないのだが・・・

「（コリイの術は当たりそうにないし・・・参ったね）」

八方ふさがりである

そして、イザックはまた動き出した

すぐさま槍を構えるルナ

しかし・・・イザックはルナを飛び越えた

突然のことに一瞬硬直するルナ

そして、イザックは突進した・・・狙うのは・・・コリイ

「コリイ！！」

「!？」

ルナは叫びながらイザックを追うが、純粋な身体能力ではイザックのほうが上

追いつくことはできない・・・

そして、イザックは詠唱し、無防備になっているコリイに剣を振り上げた・・・

その姿を見たコリイはきつく眼を閉じ・・・殺されると思った

が・・・

いくら経っても剣で斬られる痛みは来なかった

恐る恐る眼を開けると・・・

剣を持っていた右手が・・・彼の左腕によって抑えられていたからだ

「イザック・・・さん？」

「・・・ぐ・・・ぎ・・・コリイ早く・・・」

苦しそうにイザックはいつもの声で答える

「まさか・・・吸血鬼の衝動に・・・イザックの理性が勝ってるだど・・・!?!?」

ありえない、そう思ったがルナは一旦考えるのをやめ

「コリイ！詠唱！！あたしもやる！！イザックの理性があるうちにやるよ!!!!」

「は、はい!!!!」

そして・・・

「「ライトニング!!!!」」

二つの雷がイザックを襲い、その場にイザックは倒れこんだ・・・

そして二人はイザックを縛り、居間で彼の目が覚めるのを待った

「……ん……ぐ」

「目が覚めたかい？」

イザックはうつすらと目を開けるとルナの顔が見えた

「……大丈夫かい？」

「……なんとか」

そうかい、とルナは言うといザックの目の前に座った

「……異常があつたなら、ちゃんと知らないかわからないだろう？」

「……すみません」

「まあいい……恐らく、さっきのは”吸血衝動”だろうね」

「”吸血衝動”??」

「ああ、吸血鬼は異性の血を飲まないと理性を保てなくなる、理性を保てなくなった

吸血鬼は異性の人々を襲うようになる……これが吸血鬼が恐れ

られる理由の一つだね」

ルナはそこで言葉を切った
イザツクは不安そうにルナを見つめ

「・・・これから・・・またこんな風に、二人を襲ってしまうんでしょうか？」

そう尋ねた・・・

もし、そうなら・・・自分は二人が止めたとしても出て行くつもりだ

そう思ったが・・・

ルナは薄く笑って

「大丈夫、ちゃんと暴走しないようにする方法はあるよ」

そう優しく答えた

「何をすればいいんですか？」

「簡単さ、理性があるうちに血を吸えばいい・・・」

なんともシンプルなものだった

「・・・それだけでいいんですか？」

「ああ・・・少なくとも暴走はしないだろうね」

ルナさんはそう答えた後・・・こちらに首を傾けたまま近寄ってきた

「ルナさん？」

「吸いな・・・また暴走されたら敵わないしね」

そう言わずいつと首を出してくるのだが・・・

「（・・・地味に恥ずかしい）」

イザツクは顔を赤くしてそう思っていた

ルナは美人だ

そんな彼女が髪を片手でたくし上げ首元を晒している

（ちなみに今は髪は下ろして いる）

妙に色っぽく、吸血するということは顔を近づけるといことだ

「・・・・・・・・／／／／」

「?どうした??」

イザツクの顔が真っ赤になっていることに気づき、ルナはイザツクに問いかける

「・・・・・・・・いや、その」

「・・・・・・・・恥ずかしいのかい?」

「うぐ・・・・・・・・」

見事の中し、イザツクはさらに顔を赤くする

「全く・・・かわいい所もあるじゃないかい」

「からかわないでくださいよ・・・」

ちよつと拗ねた感じに唇を尖らせるイザツクにルナは笑みを浮かべる

「でも吸わないとまたああなるよ」
「……………」

真剣な顔でルナはそう述べる

「……………すいません……………失礼します」

「ああ……………死なない程度に吸ってくれよ？」

「わかってますって……………」

そう言いイザックはルナの首元に顔を近付けた……………

第21話（後書き）

んゝ・・・悩んだんですがこうなりました

しかしあれですね・・・文字で説明するもってほんとに難しいです
ね・・・

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第22話（前書き）

とりあえず投稿・・・

次の次の回から戦闘予定です

第22話

NOSIDE・・・

朝・・・イザックにとって眠くなり始める時間だったが・・・
居間では顔に艶があるものの申し訳なさそうに視線を落としてい
るイザックと

・・・やばいくらいやつれているルナの姿があった

「・・・ルナさん大丈夫ですか？」

「・・・ああ」

コリイがルナに声を掛けるが、その声には全く覇気が無い

「ほんとにすみません・・・」

「いいって・・・あなたが気にすることじゃないよ」

そう言い微笑むルナだったが・・・そんな青白い顔で言われても
イザックの気は
晴れなかった

「・・・おかゆなら食べれますか？」

「・・・ああ・・・頼むよ」

イザックは立ち上がり、キッチンに向かった

ルナがやつれている原因はもちろん、昨日の吸血にあった
あの後、イザックは初めての吸血だったので、要領がわからず・・・

少し血を吸いすぎてしまったのだ
そのせいでルナは貧血を起こし、体調が悪い

「……まさかこんなになるなんて思っても見なかったよ……」

ルナがそう呟くとコリイは苦笑を返す

「次回は私がやりますから」

「……きついよ？」

「大丈夫です……イザックさんのためですから」

と少し顔を赤らめて言うコリイ

その顔を見た瞬間ルナの顔に幾分か血の気が戻った

「……あんだ、イザックのこと好きなのかい？」

「ふえ!？」

いきなりそんなことを言い出すルナにコリイは素っ頓狂な声を出
してしまふ

「い、いきなりなんですか!？」

「いや、ちよつと気になって……でどうなんだい？」

「し、知りません……」

ブイツとそっぽを向くコリイ

「初々しいねえ……」

ルナはそう呟き微笑んだ

「できました、どうぞルナさん」

「悪いね・・・いただきます」

「イザックさん、私もおなか空きました」

「ん？そっか・・・なら・・・卵焼きとサラダならあるぞ」

「食べます！」

「じゃあ、運ぶの手伝ってくれ」

「はい！」

コリイはイザックの料理を運ぶためキッチンに向かう

平和な日々が・・・続いていた

しかしそれは・・・長くは続かなかった

数日後・・・

「あああああ！！」
「はあ！」

森の奥、戦っている二つの人影

イザックとルナだ

二人はそれぞれの得物を持ち今模擬戦中である

そして……

ギイイイン、といつも異常の甲高い音なる
イザックの剣がルナの魔槍を弾き飛ばしたのだ
魔槍はルナの手元から離れて地面に落ちると溶けるように跡形も
無くなくなった

「ふう……もうあなたに近接じゃ勝てないね……強くなった
ねえ」

「ありがとうございます」

ルナは呆れた視線を向けるがそれはどこか嬉しそうで
イザックもそれを感じたのか素直に礼を述べる

「……さて……コリイ！そろそろ飯にするよ！！」
「はあ〜い！！」

ルナが呼びかけると回復術の本を呼んでいたコリイが返事をし
こちらに走ってくる

今日の昼は何にしようか・・・そう考えていたとき・・・

「ここにいたか・・・全く、面倒掛けやがって・・・」

一人の男の声がした・・・

振り返ると黒い髪をただ短く切っただけという髪型をし、無精ひげを生やした

一人の男が立っていた

第22話（後書き）

新たな波乱・・・という予定です^^；

まあ頑張りますのでお暇でしたらまた見てやってください^^

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第23話(前書き)

新たな敵と吸血鬼化実験の黒幕登場？

どじぞー！

第23話

イザックSIDE・・・

「誰だいあんた・・・？」

ルナさんは警戒しながら男に問いかける

「・・・説明めんどくさいんだが・・・まあ省略して言うと俺の目的は・・・

そこの吸血鬼を連れて行くことだ」

無精ひげの男はめんどくさそうに・・・しかし、鋭い視線を向けてそう告げた

「・・・イザックに何のようだい？・・・答えによっちゃただじやすまないよ」

「簡単だ・・・そこに吸血鬼イザックは・・・俺たちの組織によって

作られたからな」

「は？」

「・・・どういうことだ・・・俺はウリズン帝国の研究者に・・・

」

ルナさんは一瞬男の言ってる言葉の意味がわからずに戸惑った視線を向けた

それは俺も同じので声は少し震えている

「・・・だから・・・その研究者が俺たちの組織の一員なんだよ、

皇帝に永遠の命

が欲しくないかと持ちかけ、協力する形で『吸血鬼化実験』を行ってただよ

人材がいるし・・・できるだけ無償でことを進めたかったからな

めんどくさそうに頭をかきながらそう言う男

「・・・ま、そこでお前を逃がしちまったから俺が借り出されたってわけだ・・・

な？・・・あんまりめんどくさい事はしたくないから素直に來い」

男はまた俺に鋭い視線を向けた

「・・・断るといったら？」

「・・・力づくで連れて行く、無論・・・その二人は始末する」

・・・男はそう告げた

「（こいつ・・・隙が無い）」

その間俺は男を観察していたのだが・・・そう、この男には隙が無い

全くと言っていいほどだ

めんどくさそうにしているのに、時折見せるその鋭い視線に動きを封じられる

その目は相当の腕をもつ戦士のそれと思った

「・・・わかった俺が行けば・・・二人は見逃してくれるんだな？」

「ああ・・・それは保障してやる」

男はそう告げ、満足そうに俺を見た・・・
そして、俺は男のほうに歩を進めようとしたが・・・
ルナが俺の腕を掴んだ

「・・・ルナさん？」

「・・・何馬鹿なこと言ってるんだい・・・行かせる訳無いだろ
！……！」

ルナさんの怒号が・・・森に響いた

「ルナさん・・・でも」

「でもないんだよ！・・・あんなそんなことしてあたしが喜
ぶと思ってるのかい！？」

そう言い俺の胸倉を掴み・・・背負い投げた

「なっ・・・」

突然のことに全く反応ができず、見事に背中から地面に叩きつけ
られた

その行動に俺は戸惑い・・・ルナさんを見て固まった

「・・・あなた・・・あたしが前にいったこと忘れたのかい？」

ルナさんは・・・泣いていた

「・・・ここにいらって・・・言ったじゃないか！！あなたは
人で背負い込み

過ぎだつて・・・言ったじゃないか！！！！忘れてるんならもう一

「イザックさん・・・前に私に言いましたね『一人じゃない』って・・・」

「イザックさんも一緒ですよ？・・・何かあったら・・・私も微力ながら」

「力になります・・・だから・・・もつと自分を大切にしてください・・・」

「イザックさんがいなくなったら・・・私もルナさんも・・・悲しいんですよ？」

「コリイは優しく・・・しかしどこか震える声で俺にそう言った・・・」

「そして・・・また俺は涙を流す・・・」

「全く・・・本当に、泣き虫だね・・・」

「・・・すいません・・・」

ルナさんは前と同じように微笑んで俺を見た

「コリイも優しく笑ってくれた・・・」

「そして・・・再確認した・・・」

「ここは・・・本当に俺の居場所なんだと・・・」

「そう・・・嬉しさに浸っていたとき・・・」

「・・・感動の場面悪いんだが・・・交渉決裂でいいのか？」

「そう・・・めんどくさそうな声をした無精ひげの男がこちらに声を掛けてきた」

「・・・イザック」

「イザックさん」

二人は俺の名前を呼んだ

・・・俺は・・・もう迷わない

「・・・俺は行かない・・・この二人と共にいるために・・・お前とは行かない!!」

そう断言した

「・・・そうかい・・・なら、力づくだ・・・!」

男は・・・懐から二本の短剣を取り出し・・・こちらに突っ込んできた

第23話（後書き）

ルナさんがかつこいい回でした^^

感想、アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第24話(前書き)

戦闘です

やはり苦手ですね・・・戦闘描写^^;

それでも・・・まあ見てやろうという方はどうぞ^^

第24話

NOSIDE・・・

男は二本の短剣を構え、イザックに斬りつける

「・・・虎牙破斬」

イザックは咄嗟に剣を抜き斬撃を受け止める

「スプレッド!!」

「ライトニング!!」

そこにイザックを援護するようにルナとコリィの術

「・・・ちっ・・・陽炎!!」!?!」

男は術をバックステップで避けるがそこをイザックの攻撃が襲った

「閃空裂破・・・」

「がつ!?!」

しかし、その蹴りが男を襲う前に、男は上空で旋回しながら剣を斬りつけ

イザックはふきとばされ、体勢を崩す・・・が
そこでただ飛ばされるだけのイザックではなかった

「魔神剣!!」

「ぐ……!?!」

体勢を崩し、宙を待っている間に剣を振るい、男に向け衝撃波を繰り出す

予期してなかった男はそれをまともに受けた

ズシャ、という音と共にイザックが背中から地面に落ちる

そしてイザックと入れ替わるように……『魔槍』を構成し、手にしたルナが

駆け込んだ……

「瞬迅槍!!」

男は片方の短剣で槍を受け止め……もう片方の短剣を握る拳で

「裂破衝!!」

「ぐはっ!!」

男の攻撃はルナの腹部を直撃
後方にルナは吹き飛ばされる

「……死ぬ……襲爪雷斬!!」

剣を横薙ぎし直後起こった落雷がルナを襲った
がそこに一つの影

「おらああああああ!!!!!!!!」

ルナを抱え、落雷が落ちた場所から間一髪救い出すイザック

「サンダーブレード!!」

技を終えた直後の隙を見逃さず、コリイの術が炸裂した

「ぬおお……くそ……」

しかし、コリイの術を受けた男はまだまだまだ余裕があるようだった

「……ちっ……三人がかりかよ……本当にめんどくさい……」

そう言い悪態を吐いているが状況が芳しくないのはイザックたちのほうである

「（俺とルナさん……二人掛かりでかかって……息も切らしてないのかよ）」

「（……術は完璧に決まったはずなのに……全然応えてない……）」

「これはいよいよ……まずいね」

ルナさんは声を出し、冷や汗を流した……

「……仕方ない……あまり外したくは無かったんだけど……」

イザックはそういうと……ゆっくりと左目の眼帯を外した

「……使いすぎるんじゃないよ？」

「わかってますって」

ルナは一応イザックに忠告する

イザツクの魔眼は強力だ・・・しかし、使えば使うほど魔力を消費してしまう

「・・・行くよ!」

「「はい!!」」

ルナの声にそれぞれがまた動き出した

「・・・魔神連牙斬!」

男は三つの衝撃波を飛ばし、ルナ、イザツクを襲う

二人はそれをかいくぐり

「瞬迅剣!」

「飛天翔駆!!」

イザツクが瞬速の突きを繰り出し、ルナは高くジャンプし上空から鷹が

得物を駆るように急降下しながら斬りつける

「・・・断空剣!!」

「ぐ・・・!?!」

「ちい・・・!!」

しかしまたしても相手の空中に飛び上がる剣技によってダメージを与えることができない

「プリズムソード!」

コリイの術が完成し、光の剣が男を襲った

しかし、男はそれを受けることなく・・・

「・・・瞬迅剣!!」

距離の離れた・・・コリイに向けて突きを繰り出した

「!?!?あう・・・!?!?」

術で無防備になったコリイは咄嗟に横に飛び退くが男の剣はコリイの肩口を

深く斬り裂いた

「魔神・・・空牙衝!!」

しかし追撃は終わらず、男の剣はコリイを襲った

「いつ・・・ああああああ!!!!」

衝撃波で吹き飛ばされ、尻餅をついたコリイに・・・剣が突き刺さった

「・・・」

「うぐ・・・」

肩口・・・それも先程斬られたところを貫かれ、痛みに顔を歪めた・・・

「コリイ!!!!」

ルナの声が聞こえた

「・・・動くな」

そして・・・男の冷徹な声が響いた

「・・・動いたら・・・この子を殺す」

そして肩から血を流し、涙を浮かべるコリイを抱き上げ・・・片方の短剣を

コリイの首元に当てた

「くっ・・・」

ルナは悔しそうに唸り、イザックは無言で男を睨んだ・・・

「・・・わかっただろ？お前ら三人でも・・・俺には勝てない・・・おとなしく

俺と来い・・・」

「・・・ダメ・・・です」

男の言葉を・・・小さな声が否定した

「・・・正気か？お前が死ぬことになるぞ？」

男は軽く驚いた顔をし声の発生源のコリイを見る

その目は・・・子供らしからぬ・・・決意した強い目だった

「・・・死にません・・・私たちは・・・あなたなんかには負けない・・・！」

「ふっ・・・この現状を見て・・・まだそう言えるのか・・・」

男は嘲笑うかのようにコリイを見た・・・

「気付かない・・・あなたは馬鹿です」

「・・・何？」

コリイは薄く・・・笑った

「・・・よく頑張ったコリイ」

「・・・!？」

その声が聞こえた瞬間・・・男は声の主・・・イザツクのほうを見た

「・・・コリイが時間稼ぎしてくれたおかげで・・・完成した・・・

”魔眼” 弐の型・・・『神の目』(グラス・ボーガ)!!!」

そう・・・男は気付いていなかった・・・

コリイは何のために、即座に殺される状況ながら反抗したのか
そしてイザツクが・・・魔眼の制御に集中しだしたのに・・・

「・・・瞬迅剣!!!」

「・・・!!!????」

先程イザツクが使った技と同じとは到底思えないほど・・・

段違いに速く・・・重かった・・・

男は二本の短剣で何とか受け止めるが・・・

「空破衝!!!」

「ぐああああ!!!」

二度目の突き・・・その突きは風を纏って男を襲い
後方に大きく飛ばされ・・・コリイを手放した
倒れそうになるコリイをイザックが抱きとめる

「イザックさん・・・気付いてくれたんですね？」

「ああ・・・一瞬こっち見ただろ・・・あれでわかったよ・・・

」

コリイは傷ついて苦しいはずなのに・・・満面の笑みを見せた・・・

・

「それに・・・あんた、コリイ殺す気・・・無かつただろ？」

イザックは二本の剣を携えた男に・・・そう尋ねた

「・・・なに？」

「・・・俺やルナさんを攻撃してきたときと・・・明らかに精度
が違ってた

殺さないように気遣ってる感じがした・・・何より・・・二撃目
でコリイの

肩を狙ったのを見て思った・・・コリイが死ねば、術師が減り俺
たちの援護が

なくなるのに・・・何故か・・・殺さなかった・・・理由は何だ
？」

イザックは先程の戦闘の違和感を話し、男を見た
そして男は・・・

「……ガキを殺すのは……性分じゃない……それだけだ」

男はそれだけ言い、短剣を構えた

「……俺の名前は……エリオ・ゴードンだ」

「?……今更なんだ?」

いきなり名前を言い出した男

「……その嬢ちゃんに敬意を示してな……その年でさっきの状況を

冷静に判断され、なおかつ打破されたんだからな……」

男は戦闘の場には似合わない、優しげな笑みを浮かべたが、それも一瞬

「……イザック・フーバー……どうしても俺と一緒にには来ないか?」

「ああ」

男……エリオの問いをイザックは即座に返した……

「そうか……なら……結局力づくになるのか」

エリオは頭をかき……そして

「行くぞ!!」

「……望むところ!!!!!!」

そしてまた……二人の剣がぶつかった

第24話（後書き）

はい、次回に続きます・・・

12月に中旬から家の用事などで忙しくなるので今のペースでの更新は

きつくなるかもしれません・・・

それでもできるだけ頑張ります！！

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第25話(前書き)

エリオとの戦闘

もう少し続きます・・・どんどん！

第25話

NOSIDE・・・

・・・森の中、そこでは激戦が繰り広げられていた

「・・・虎牙破斬！」

「空破衝！」

男、エリオはイザックに向け、二つの斬撃を浴びせる

斬り上げ、そしてそのまま短剣を振り下ろそうとした瞬間

イザックの剣から発した風の暴風を纏った突きが繰り出される

「ちっ・・・」

まともに受けるとまずいのでエリオは自分の前で短剣を交差させ突きを受け止める

「魔神「空破絶掌撃！」ぐお！」

牽制のために放とうとした技をイザックの素早い突きにより封じられる

「・・・ぐ」

エリオは吹き飛ばされながらも体勢を立て直し・・・

「・・・瞬迅剣！」

また、イザックに向け突貫する
が、イザックはそれを読んでいるかのように・・・

「幻晶剣！！守護方陣！！」

「ぬああああ！！」

右足を軸に回転し、遠心力を使い剣を振るう

鋭い突きと共に飛び込んできたエリオに防ぐことはできず
深々と胸を斬り裂かれ・・・

そこにイザックを守るように光の魔法陣が現れ追撃する
その光を受け・・・エリオはたまらず後退し、膝をついた

「（こいつ・・・格段に力が上がってやがる・・・これが吸血鬼
が持つ

魔眼か・・・）」

エリオは傷つきながらも冷静にイザックを見つめ、観察した

「・・・くそ・・・ほんとにめんどくさい」

ボソツと・・・エリオは呟き

「！？」

エリオの雰囲気が変わりイザックは身構える
エリオは顔をこわばらせ

「・・・本気で行く！！！」

両腕を同時に引き・・・彼を青い光が包んだ
そう・・・限界突破である

オーバーリミット

「・・・来い！」

イザックは再び剣を構えなおし

「・・・魔神剣！！！」

お互い同じ技を繰り出した・・・
結果は、相殺

「瞬迅剣！」

「・・・閃空裂破！」

「ぐ・・・！？」

先手必勝と考えたイザックはエリオの懐に潜り込むが、
またエリオの得意技である空中に飛び上がる剣技によって攻撃は
届かず

吹き飛ばされる

「ちっ！」

イザックはすぐさま剣を構えなおした・・・
そしてエリオは・・・
自らの最強の技を繰り出した

「・・・めんどくさい」

そう呟いたエリオは・・・神速とも言える速度で
イザツクの目の前に移動し・・・斬り上げる
イザツクは一瞬硬直してしまい、為す術なく上空に舞う

「・・・本気出すのは・・・めんどくさい」

エリオはしゃがみこみ・・・足に全神経を集中させ・・・飛び上
がる

「・・・だから・・・この一撃で終わってくれ」

そして・・・鳥が空を舞うように・・・空中で一撃、二撃、三撃
加える・・・

そして、エリオは地面に着地し遅れて落ちてくるイザツクを
・・・先程から見せている「閃空裂破」や「断空剣」とは比べも
のにならない

速度で回転しながら・・・

「・・・閃空・・・天翔撃！！！！！」

二本の短剣が・・・イザツクを無数に切り裂き・・・地に落とした

「・・・終わったな」

数え切れない傷を負い血塗れになったイザツクを見て・・・
エリオはそう小さく呟いた

イザツクは・・・何もしゃべらない・・・
否・・・しゃべれなかった・・・

第25話（後書き）

・・・はい、イザック初の戦闘不能です

イザックにとつての戦闘不能は吸血鬼の回復能力を上回る傷・・・
すなわち死となります

それにしても・・・エリオ強すぎたかな・・・？

しかも主人公や主要人物よりも先に秘奥義使わってしまった・・・

次回はまたもヤルナさん回です

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第26話(前書き)

遅くなりました><

なんとかできた・・・^^;

よろしければどうぞー!

第26話

ルナSIDE・・・

「嘘だ・・・」

私は・・・倒れてるイザックを見て眩いた

・・・魔眼を使ったイザックが・・・負けた？

その事実が信じられずにいた・・・そして・・・同時に

抑えきれない怒りも・・・こみ上げてきた

「・・・貴様！！！！」

あたしは叫んだ

「ルナさん・・・っ!？」

後ろでコリイの声がある・・・痛みで蹲っているコリイ

回復術を自ら唱えたのだが、コリイも魔力はもう底をついている
『ファーストエイド』を唱えるので精一杯だった

「イザックを・・・よくも・・・!」

そんなコリイを放って・・・あたしは駆け出した
それほどまで・・・あたしは冷静じゃなかった

イザックSIDE・・・

暗い・・・空間だった

光なんていつさい無い真っ暗な空間・・・

俺はそんな空間を彷徨っていた・・・

どこに行けばいいのかもわからず・・・

すると・・・いきなり映像が浮かびだした・・・

その空間に映し出されたわけではなく、

直接俺の頭に流れ込んできている感覚だった

その映像は・・・エリオと名乗る男が・・・ルナさんを圧倒して
いる

光景だった・・・

N O S I D E・・・

「がはっ！」

ルナはエリオの持つ短剣に肩から袈裟懸けに斬り裂かれ・・・
後方に吹き飛ばされた

「・・・もういいだろう？・・・お前一人じゃ・・・俺には勝て
ない」

エリオはルナを見つめながらそう告げる

ルナはエリオを睨んだままだ

「……はぁ……はぁ……」

息を切らし……泥と血だらけのルナ

「もう……やめてください！！ルナさん！！！」

コリイの悲痛な声が森に響く

しかしルナは聞く耳を持たず……また『魔槍』を構成する

「……イザツクを……よくも……あたしの息子を……」

しかし……ルナはそのまま、膝から崩れ落ちた

「……吸血鬼が死んでからよみがえるまでの時間は程度によるが約四時間くらいかかるはずだ……それまでに俺は組織に戻らなきゃならん……」

そう言い短剣を構える

「……もういいだろう？……俺はあまり殺しはしたくないんだ……」

だが……これ以上抵抗するというなら……容赦しない」

冷徹にエリオはそう告げる

恐らく本気だろう、とその目が物語っていた

「……」

はずだった・・・

「なっ・・・!?!?」

響いたのは・・・エリオの狼狽の声
そしてそこには・・・

「・・・遅いよ」

「・・・すみません」

先ほどまで倒れていた・・・イザックが・・・エリオの剣を受け
止めていた

第26話(後書き)

はい・・・どうでしたか？

途中のイザックについては後々説明していくつもりなので
またよろしく願いします^^

感想、アドバイスしてくれるとうれしいです^^

第27話(前書き)

戦闘終了です！

結構長くなりました・・・

どうぞ^^

第27話

NOSIDE・・・

エリオはイザックに剣を受け止められ動揺するも、すぐに正気を取り戻し

バックステップで後退するとイザックのほうを見た

見るとまだ完全に傷が回復しているわけではない・・・先ほどの傷を多々残しながらも

イザックは立ち上がっていた

「（・・・間違いない・・・イザック・フーバーだ・・・しかし何故）・・・

何故動ける・・・息の根は止めたはずだ・・・吸血鬼とはいえない
つたん体の

機能を失えば数時間は蘇生に時間がかかるはず・・・資料にはそう・

「・・・資料は資料・・・実際に吸血鬼になったのは俺が初めてなんだろ？」

「・・・イレギュラーなことがあっても不思議じゃないだろ？」

イザックの言うとおりである

実際に吸血鬼化実験が成功したのは彼だけであり

他に例が無い・・・無論、資料の予想に反したものがあってもおかしくは

無いということだ

「（・・・なるほど・・・あの糞じじいの資料も確実じゃないのか）

「
今は目の前にイザックに葬られたエリック博士だが
一応組織に資料を残していた

イザックの情報や、吸血鬼の情報も書いてあり
今までのイザックの情報と全て合致することからあの資料は絶対に
正しいと思ってしまっていたのだった

「・・・俺もまだまだだな・・・しかし・・・」

疑問を振り払い・・・今日何度目だろうか二本の短剣を構えなおす

「・・・もう一度ダウンさせるのみだ!」

そう言い・・・エリオはまたイザックに向かって走る
二本の短剣を振るい・・・そして・・・斬りかかる・・・

「・・・悪いが・・・そろそろ」

イザックは剣をゆっくりと構えた

「終わらせる!」

そしてイザックもまた・・・エリオに向けて走る

「おおおおおおおおおおお!!!!!!!!!」
「・・・あああああああ!!!!!!!!!」

雄叫びを上げながら・・・二人の剣は・・・交差した・・・

・・・そして、次の瞬間血しぶきが起こり・・・倒れたのは・・・
エリオだった

「ぐ・・・」

そしてイザックも・・・膝から崩れた

「・・・任務・・・失敗か・・・」

エリオは脇腹から流れる血を押さえながら呻く・・・
そして・・・押さえるのを止めた

「・・・お前・・・強いな」

「・・・俺ら三人がかりでやっと勝てたのに・・・あなたのほうが
強いだろ？」

エリオは大の字に転がりながら、イザックに声を掛ける
イザックも少し驚いた感じだったが、そう返した

「・・・キラの言っただとおりだ・・・まさか負けるとは」

「・・・キラだと？」

イザックは城であつた目に縦の傷がある男を思い出す

「ああ・・・俺はあいつと同じ組織の仲間で・・・俺と同じ幹部だ」

「・・・」

「・・・幹部は俺合わせて四人・・・残りの三人もお前を襲つてく
るだろっよ」

エリオはこちらを向き・・・薄く笑って

「・・・逃げる」

そう言った

「は？」

「・・・逃げる・・・ここから・・・他国に逃げれば・・・なんとかなるかもしれん」

「何言ってるんだ・・・あんた敵だろうよ？」

「・・・俺は・・・望んで組織に入ったわけじゃない・・・娘を・・・人質に

とられてな・・・仕方なくだ・・・」

「・・・だからあんた・・・」

「ああ・・・あの子・・・俺の娘と同じくらいの年だと思うんだ・・・傷付けるのが物凄く嫌だった・・・せめてもの償いだ・・・あの子とそのエルフ連れて来い」

「・・・」

少し怪しんだイザックだったが今のエリオにはもう攻撃することはできないだろう

と判断し・・・ルナを担ぎ、コリイの手を引きながらエリオの元に向かった

「・・・」

コリイはやはり警戒の色を解かない
この反応は当然だろう

「嬢ちゃん・・・肩だしな」

「・・・？」

言われたとおり肩を出す

「……キュア」

男は……単体への高位回復術を唱えた

それ自体はあまり驚くものではない……問題は

「……無詠唱!？」

そう……詠唱に一秒もかかってないのだ

「……回復術は……昔から得意でな……そっちのエルフも……」

言われたとおり、ルナをおぶったまましゃがむイザック

そしてまた同じ術を使い……ルナの傷が癒えていく

「……どうして？」

「何……負けた俺の最後の良心さ」

エリオはまた薄く笑い

「……あなたも……回復しないと……!」

「……無理だな……血を流しすぎた……それにもう魔力が残
つてない」

「……」
「それに……お前らに負けたから……どうせ戻っても殺される・

……」
そして……組織は俺の娘を殺すだろうよ……」

エリオは・・・そう言って一筋の涙を流す・・・

「・・・娘には・・・生きてて・・・欲しいんだがな」

歯を食いしばり・・・そう呟くエリオ

「・・・名前は？」

「あ？」

コリイは小さくエリオに尋ねた

「・・・あなたの・・・娘さんの名前です」

「・・・アルクだ、アルク・ゴードン」

エリオはコリイの問いに不思議に思いながらも答える
そして・・・

「・・・あなたの娘さんですから・・・きつとお強いでしょう・・・
だから

きつと生きてると思います・・・そして、もし私たちがアルクさん
に出会ったら

・・・お友達になろうと思います」

「は？」

コリイの言葉に・・・エリオは耳を疑った

「何言つてやがる・・・ありえない、第一俺はお前たちを殺そうと
した・・・」

そんな奴の子供と友達？・・・狂ったのか？」

エリオはまたもや狼狽し・・・コリイを見る

「・・・傷を治してくれたお礼です・・・それに・・・あなたは確かに

私たちを襲った・・・でも・・・あなたの娘さんは・・・関係ないです」

コリイはそうエリオに告げた

「・・・あなたの娘なら・・・確かに強いだろうから・・・生きてるかもな」

イザックはそう呟いた

「・・・馬鹿みたいだな」

エリオはそういうが・・・少しだけ口元が緩んでる

「・・・俺の娘だ・・・信じてみようかな・・・お前ら・・・」

エリオは二人を呼ぶ

「なんだ？」

「何でしょう・・・？」

エリオは・・・

「こんなこと頼むのもおかしいってわかってるんだが・・・もし娘に会ったら・・・」

これを・・・渡してくれ」

そう言い差し出したのは・・・金色のネックレス
いや・・・ロケットだった

「俺の宝物だ・・・殺しの依頼が来ても・・・そのロケットがあっ
たから
・・・精神を保つことができた」

エリオの言葉を聞き

「・・・娘さんに会ったら・・・必ず渡す」

イザックは力強くそう告げた

「・・・はっ・・・こんな甘い奴らに負けるなんてな・・・だが・・・
俺が倒されるのが・・・お前らでよかった」

そして・・・

「娘に会えたら・・・頼むな」

最後にそう言いエリオは・・・こちらに目を向け・・・一瞬笑うと・・・目を閉じた
そしてその目は・・・再び開くことはなかった

第27話（後書き）

実はそうだった理由があったエリオ

・・・ぐだぐだですね・・・^^;

一応コリイの言葉はエリオは本当に悪い人ではないと判断したから
です

・・・馬鹿な子ではなく優しい子にしていきたいと思うので
まあ見守ってやってくださる人はお願いします><

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第28話(前書き)

遂にウリズン帝国から出て行きます

騎士団については何も言わないでください・・・^^^ ;

第28話

イザックSIDE・・・

エリオとの戦闘が終わり翌日・・・

俺はエリオを弔うため・・・穴を掘り・・・簡単に作った棺桶に彼を入れ

墓を作った

「・・・」

昨日のことを思い出す

『・・・逃げろ』

『他国に逃げれば・・・逃げられるかもしれん』

『何・・・負けた俺の最後の良心さ』

『・・・娘には・・・生きてて・・・欲しいんだがな』

『・・・はっ・・・こんな甘い奴らに負けるなんて・・・だが・・・

俺が倒されるのが・・・お前らでよかった』

『娘に会えたら・・・頼むな』

思い出せば思い出すほど・・・俺は悔しい思いで一杯になる

もし・・・もしもつと・・・違う場所で出会えたなら・・・
思うだけ・・・無駄だとわかっててもそう思ってしまう

それに・・・エリオの事情が・・・あまりのもひどすぎる
娘を人質に取る・・・そんな卑劣な行為をしてまで・・・エリオ
をこき使った

奴らがいる・・・それだけで・・・許せないと思った

「・・・ほんとに・・・俺は無力だ」

その心の声は・・・誰にも聞こえない

NOSIDE・・・

「・・・なるほどね・・・しかし」

気絶していたルナさんはもう起き上がれるくらいに回復していた
エリオのおかげであった

そして今は・・・ルナさんが気絶している間のことをイザックと
コリイが

説明しているところだった

「聞けば聞くほど・・・あなたもコリイも・・・エリオって奴も・
・
甘いねえ・・・」

呆れた風に言うルナ

返す言葉が見つからない二人は返す言葉が見つからないようだ

「でも・・・あなた達らしいけどね」

そう言いルナはけらけらと笑う

「・・・それよりルナさん」

「・・・ああわかつてる・・・ここを出よう」

イザックが言う前にルナがそう告げた

「・・・いいんですか？」

「当たり前だろ？・・・ま、エリオって奴が攻めてきたときから
考えてたから」

「・・・でもどうするんです？」

「・・・船なら港町であてがある、任しときな」

「・・・すいません」

「謝るんじゃないよ・・・ほら準備してきな」

「はい・・・」

ルナは自分のせいで引越しすることになり申し訳なさそうに言う
イザックに

苦笑を返していた・・・

が、同時に少し嬉しくもあつた

「（・・・やっと、独りよがりをやめたね）」

そう・・・一人で出て行くという手段を消してくれた

そこがルナは嬉しかった

今までのイザックだったなら『迷惑を掛けるから』とか言って

一人で行こうとしていた

そこが変わってくれたのは・・・たまらなく嬉しかった

「準備できたかい？」

「はい」

半日が経ったところ・・・家の前に荷物をまとめた三人の姿があった

「・・・行くよ」

「はい」

「ちなみに・・・どこに行くんですか？」

「そうだねえ・・・ライマ国だね」

ルナはそう二人に告げた

「・・・何故です？」

「・・・治安が比較的がいい・・・つてもあるけど・・・」

「「？」」

「ま・・・行けばわかるよ」

そう言いルナは笑う

二人は少し不思議に思いながらもルナの意見に従うことにした

??? ? SIDE . . .

「 . . . エリオが負けたのか . . . 」

暗い部屋 . . . 明かりは真ん中のろうそくのみだ
長い長机に座っているのは4人 . . . そして、一つの空席があった

「ま . . . しょうがないんじゃないですか? . . . エリオはこの
中では

一番弱かったですし . . . 」

そう言ったのは . . . 金髪に目に縦の傷がある男 . . . キラである

「 . . . そうだな . . . なんかやる気もなかったしな 」

二丁の銃を下げた男が椅子の腰掛にもたれながらそう告げる

「 あいつの娘はどうする? 」

フードを深くかぶり、素顔が見えない、声からして男であろう者が

最初に発言した男に問う

「……町ごと焼き払え」

「御意」

フードの男は立ち上がり歩を進め、部屋から出る

そして、最初に発言し、フードの男に命令を下した男……
恐らく彼がリーダーだろう……

「……イザック・フーバーを必ず捕獲しろ……いいな」

男はそう告げた……

そして残った二人は椅子から立ち上がり、男の前に膝をつく……
そして

「「はい……我らが主……」」

そしてリーダーが立ち上がり……部屋から出る
キラともう一人の男も同じように続く

そして……部屋のろうそくが消え……また暗い世界に戻った

第28話（後書き）

はい以上でウリズン帝国編終了です!!

ウリズン帝国騎士団についてはまた後で出す予定……です（汗）

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第29話(前書き)

港町編・・・といってもこの一話で終わりですが・・・^^;

べじぞー！

第29話

NOSIDE・・・

「・・・なんか最近ここに来るのが多いね」

「そうですね・・・商人のときもここに来ましたからね・・・俺は来れませんでした」

「当たり前だろ騎士もいるのに」

前の商人を捕縛した際、全員を港町まで運んだのはルナだ

コリイは絶対に行かせるわけには行かないし、イザックも騎士から身を

隠している

当然そうなるとルナが動くしかなかったからだ

「すみません・・・」

「謝るんじゃないよ・・・それに他国に行ったらもう気にしなくていいじゃないか」

「はい・・・」

イザックは返事をし苦笑する

「コリイ？」

ふとルナがコリイを見ると・・・コリイは水面を眺めてた

「どうしたんだい？」

「ルナさん・・・あれ・・・ウミヘビですよね？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ああホントだね・・・おいで」

ルナがそういつとウミヘビはルナに近寄り・・・手に巻きついた

「はは・・・人懐っこい蛇だね・・・珍しい」

「・・・ルナさんすごいです」

蛇を腕に巻きつけ・・・じゃれ付きだすルナを見てコリイはそう
呟く

「ま・・・エルフは元々動物と仲良くなるのが得意な種族だからね・・・

まあこの体質が・・・人間から距離を置かれる理由にもなってる
んだけどね」

少し悲しそうにルナは俯く
そんな顔をするルナを心配するようにウミヘビはルナの頬を舐める

「はは・・・大丈夫だって・・・イザック？」

ウミヘビにそう言い笑っていると・・・イザックが離れた場所に
いることに
気付いた

「・・・どうしました？」

「い、いや・・・何も」

「「・・・」

あからさま態度がおかしい・・・
何故か足が震えていて・・・ルナを見ようとしない

「・・・・・・・・(スッ)」

「(スッ)・・・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「・・・・・・・・(ススッ)」

「(ススッ)・・・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

ルナが一步前に出ると・・・イザックは一步下がる
ルナが二歩前に出ると・・・イザックは二歩下がる
コリイは・・・二人のやり取りを見て苦笑を浮かべている

「・・・・・・・・あなた蛇苦手なのかい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

「凶星だね・・・・・・・・」

ルナさんは・・・ニヤリと口元を緩ませると・・・

「かわいい所あるんだね・・・やっぱり」

「・・・・・・・・昔から苦手なんですよ」

拗ねたように唇を尖らせながら言うイザック
そんな彼に・・・ルナは苦笑を浮かべ・・・

「ほれ」

ウミヘビをイザックに投擲した

「悪かったって・・・そんなに苦手だとは思わなかったんだって」

「・・・」

「ルナさんが悪いです」

「うっ・・・」

コリイにそう言われ呻くルナ

イザックははまだ涙目でそっぽを向いていた

「悪かったって・・・」

そこからイザックの機嫌が直るには半時間ほど時間がかかった・

「・・・で？ルナさん当てって何ですか？」

今度ルナに『魔槍』の構成方法を詳しく教えてもらうという約束で
機嫌を直したイザックが尋ねる

今イザックたちがいるのは港の工場の裏

イザックは顔を隠すためフード付きのコートを羽織り深くフードをかぶっている

「知り合いがいるんだよ・・・変わってるけどね」

ルナはそう言い苦笑する・・・そこに

「ルナの姉貴~~~~!!!!」

屈強な体をし・・・あごひげを生やした茶髪の男が・・・両手を広げて

ルナに突っ込んできた

ルナは・・・

「ふん！」

「ごぶっ!!」

鳩尾に見事なパンチをくらわせ・・・男は吹っ飛んだ
当然・・・コリイとイザックは突然のことに啞然とする

「・・・さ、さすが姉貴・・・今日も容赦ないっすね」

「・・・馬鹿いつてんじゃないよ・・・ジャック」

「へい・・・この短期間に姉貴に二回も会えるなんて・・・もうすぐお迎えが来る んすかね？」

「呼んでやるうか？」

「・・・目がマジなんで結構です」

馬鹿なことを言い続ける男、ジャックに笑いながら言うルナ
ジャックは目を逸らしながら乾いた笑みを返した

「さて・・・本題に入ろうかね・・・ジャック、何も言わず船をくれ」

「いいつすよ」

ガタン、とイザックとコリイがずっとこけたのは言うまでもない

「・・・あんなあっさり？」

「・・・あの二人一体・・・」

イザックとコリイは話についていけず混乱していた

「・・・いいのかい」

「・・・その坊主見ればわかりますよ」

直後真剣な顔つきになるジャックがイザックのほうを向きそう答えた

「・・・指名手配犯ですよ？そいつ・・・」

「・・・知ってるんのかい」

「当然ですよ・・・王都の方じゃこの話題知らない奴いませんよ・

・

”王殺し”イザック・・・ってね」

「・・・」

イザックは無言でジャックを睨む

対するジャックもイザックから目を逸らすことはなかった

「・・・ま、姉貴の頼みじゃ断れませんよ・・・ここから正面に出る右に

行きますと『ルナムーン号』があります」

「・・・名前はおいといて・・・それで」

「できればツツコんで欲しいのですが・・・まあその船は姉貴専用
に俺が

確保してる奴なんで使ってください」

「・・・悪いね」

「・・・いえ・・・姉貴にはお世話になりましたから」

ルナが暗い顔を見るとジャックは対照的に満面の笑みを浮かべる

「どうか姉貴・・・お元気で」

「ああ・・・ありがとう」

「嬢ちゃんと・・・イザック・フーバー・・・だったか？」

「ああ・・・」

「・・・姉貴のこと頼んだぜ」

そうイザックとコリイに笑みを浮かべて言った

「・・・はい」

「ああ」

短く、二人は返事をする

「・・・もう行くよ・・・ジャック・・・また会おう」

「ええ・・・その時まで！・・・！」

ジャックは笑顔を浮かべたままルナに手を振る

「ありがとうございます！・・・！」

「嬢ちゃんも元気でな！・・・！」

コリイが大きく礼を言うとジャックはそれ以上の大きい声で返事を返す

「イザック!!」

「……………」

ジャックはイザックの名前を呼び……

「姉貴に手え出したら承知しねえぞ!!!!」

ルナとイザックが同時に転び……ルナがありえないほどの速さで彼の前に行き

ジャックは再び殴られるのは言うまでもなかった

そして……

「これが『ルナムーン号』・・・」

「・・・とりあえず名前変えないかい？」

「だ、ダメですよ！せつかくジャックさんがつけてくれたのに」

三人はジャックに言われたとおり進み、船の前に来た

小型船よりは大きい・・・四人くらいなら航海できそうな船がそこにはあった

「じゃあ行こうかね」

「はい」

「楽しみです！！」

こうして、三人はウリズン帝国を後にした・・・

第29話（後書き）

イザツクの苦手なものを出そうと無理矢理いれました・・・
ちよつと無理がありましたかね^^；

次回からライマ国に行きます

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第30話(前書き)

原作キャラ初登場です

どろどろー！

第30話

イザックSIDE・・・

「やっと着いたね」

「・・・ホントですね」

「・・・まだ酔ってるのかい？・・・もう降りて二時間は経つよ？」

俺は青い顔でライマ国の港町・・・フォトシアの表街道を歩いて
いた

「・・・大丈夫ですか？」

「・・・ああ」

コリイは心配そうに俺に尋ねてくる

一応大丈夫と返しているんだが・・・正直辛い

「ええつと・・・どこだっけ？」

「・・・ていうかどこに向かつてるんですか？」

ルナさんは周りを見渡し何やら呟きながら進んでるんで聞いてみることにした

「ん？ああ・・・あたしの古い友人だよ」

「・・・先生のこと・・・知ってる人ですか？」

「・・・ああ」

ルナさんは少し微妙な顔をしたが肯定した

「……ルナさん……俺もわかってますから」

「……うん、悪いね」

「気遣われると余計気になりますから……」

ちよつとへこんだ風に俯くルナさんを見て苦笑する

……先生が……死んだことくらい俺にもなんとなく予想はできた

だが、ルナさんはやはり気にしてるのかこの話題になると暗くなる
気遣ってくれてるルナさんに感謝と……わかってるのにこの話
題に

してしまった自分の行動を少し反省した

「……行きましょう?」

「ああ……」

こうして、俺たち三人はルナさんの友人の家に向かった

NOSIDE・・・

「ここだ！」

突然ある家の前に止まるとルナは声を上げた

「・・・懐かしいね」

感慨深げに家を見つめるルナ

「・・・どんな人なんでしょう？」

「・・・ルナさんの友人だぞ・・・性格が破綻してないといいが」

「おい」

「なんでもないです・・・」

コリイとイザックルナの友人を想像していると

ドスの聞いた声でルナがイザックを睨みつける

即座にイザックはあさつてのほうを向き話題を中断した

「いるかな・・・？」

ルナはそう呟きながらドアの前に立ち・・・コンコン、とノックした

そして数秒後・・・

「はい・・・？」

透き通った声が聞こえ、ドアが開いた

そこには優しそうな顔立ちをし、スラツとした体型で
長い茶色の髪を腰まで下ろした美女が立っていた

「久しぶりだね・・・ユリア」

「・・・嘘・・・ルナ・・・なの？」

「ああ・・・」

ルナは女性、ユリアを見て薄く笑い・・・

そしてユリアは・・・跳躍し、ルナに抱きついた

「うわわわわわ!!」

「ルナ~~~~~~~~~~~~!!!!!!!!!!!!!!」

もちろん衝撃でルナさんは後ろに転び

ユリアはルナの胸で泣きじゃくっていた

「は、離れる!く、苦しい!!」

「ルナ~~~~!!ルナ~~~~!!」

「ああ!!もう!!」

ルナは苦しそうにもがき、ユリアを引き剥がそうとするが・・・
がっちりと腰に手を回され・・・全く離れる気配はない

そしてイザツクとコリィは・・・

「……………」

ジャックのとき同様……全くついていけてなかった

「ごめんね〜見苦しいところを見せちゃったわね」

コリアさんはイザックとコリイにお茶を出しながら苦笑する

「いえ」

「その……全然大丈夫です！」

イザックとコリイはとりあえず出されたお茶をいただきながら
コリアにそう答える

「……それで？ルナが訪ねて来るなんて……何かあったの？」

「ああ……聞いてくれるか？」

「ええもちろんよ」

「……イザック」

「・・・はい」

そしてイザックは話した

ウリズン帝国であった出来事を全て話した

ユリアさんは・・・すごく真剣な表情で俺の話聞いてくれた

「・・・そう・・・イザック君・・・でいいかしら？」

「はい・・・」

「・・・なんていえばいいかわからないけど・・・辛かったね」

「・・・いえ・・・ルナさんとコリイが・・・助けてくれましたから」

イザックはユリアにそう返した

ユリアさんはその答えを聞き嬉しそうに笑った

「そう・・・よかったね？ルナ」

「・・・う、うるさい」

若干照れた感じでそっぽを向くルナ

コリイも同様に俯いている

「・・・吸血鬼か・・・そんなの作ろうとする人たちの気が知れないわ」

ユリアさんは先程までの雰囲気とは180度違う殺気を含んだ雰囲気であらう

「・・・しかもルナの血を使ったり・・・ルナの薬を無理やり持っていったり

・・・そいつら・・・ただじゃおかない・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

急変したユリアさんの態度についていけず、どん引きするイザックとコリイ

そしてルナは深く溜め息を吐いて

「ユリア・・・この子達が引いてる」

「はっ・・・・・・・・」「ごめんなさい!」

そして、ぱっ、と先程の雰囲気に戻るユリア

そしてイザックは思う・・・

「（ああ・・・やっぱりまともじゃないんだ）」

リン 料理が終わってる、剣の腕が異常に強い

ルナ 怒ると怖い、人との繋がりが半端無く広い

ユリア 先程の雰囲気・・・しかもルナへの執着が半端無い

イザックの中ではユリアはルナと同じ位置におかれ・・・

絶対に逆らわないようにしようと心に誓った

「あ・・・そろそろ帰ってくるわ」

ユリアは時計を見て少し嬉しそうに立ち上がる

「子供かい？」

「ええ・・・16歳になる長男と5歳の娘よ」

いきいきとユリアはしゃべる

「仲良くしてあげてね？」

ユリアさんにそう言われイザックもコリイも頷いた

そしてドアが開かれ・・・

「ただいま〜!!！」

「ただいま戻りました・・・お客人か？」

そして姿を見せた

身長は恐らくイザックより高く、屈強な体つきをした青年と茶髪の長い髪を揺らしたまだ幼い少女だ

「ええそうよ・・・男の子のぼうがいザック君で女の子のぼうがコリイちゃんよ」

ユリアさんはそう言い青年のぼうが・・・

「はじめして、ヴァン・グランツと申します・・・よろしくお願
いいたします」

「ティア・グランツです・・・こんにちは！」

二人はそう言い頭を下げた

第30話（後書き）

はいTOAのヴァンとティアでした^^

ガイはこの町では登場しません^^;

30話目でやっと原作キャラが出せました・・・

しかしヴァンとティアの話し方む難しい・・・

でも頑張ります!!

話し方をこうしたほうがいいなどの意見がありましたら是非教えて
ください^^

追記

（ティアとヴァンはTOAでは魔界出身ですがこの話では
魔界が存在しませんので出身地をこう設定しました）

第31話(前書き)

今日はちょっと遅くなりました^^;

どしどしー

第31話

イザツクSIDE・・・

「・・・しかしいんですか？」

「？何がかしら？」

料理を作りながらユリアさんは聞き返す
俺はその手伝いだ

「いえ・・・いきなり押しかけて泊めて貰うのは・・・」
「全然大丈夫よ！むしろ大歓迎よ」

楽しそうに笑うユリアさん

「そうっすか・・・」

そんなユリアさんを見てありがたく思いそして・・・

「だって〜ルナと同じ屋根の下で寝れるんだよぉ〜」
嬉しくって仕方ないよぉ〜」

・・・一歩距離を置いた

「飯まだか〜い？」

リビングからはルナさんの声

「もうちょっとだから待って」

「ユリアさん後はやっときますからルナさんの相手してあげてください」

「え？いいの・・・!？」

「ええ」

そう言つと・・・満面の笑顔を浮かべ

「ありがとぉ〜!!じゃあ早速くっついてくるね!!」

そついいもうダッシュでリビングに駆け込むユリアさん

「・・・別にくっつかなくても・・・」

後で文句言われるだろうなと思ひながら小さく溜め息をつく

「・・・イザックさん？」

「ん？おお・・・ヴァンどうした？」

キッチンに姿を現したのはヴァン

あの後剣術のこととかいろいろ話して仲良くなった
堅物そつなイメージだが案外気さくな奴でよかった

「いえ・・・すいません母上が」

「いやいいよ、俺が言つたんだし」

そつ言い笑いかけるとヴァンは俺の横に立ち

「お手伝いします」

そう言っ て来た
断る理由もないので

「じゃあ悪い、皿出してくれないか？」
「はい」

ヴァンは一枚の大皿を出し俺はその皿にサラダを盛り付ける

「よし・・・後はこの肉だけだから・・・」
「イザツクさん」

今日のメイン、豚の肉を塩コショウで味付けし、簡単に焼いたもの
のだ

それを一人ひとりの皿に分けていると後ろから名前を呼ばれる
コリイと・・・ティアだった

「イザツクさん・・・私も手伝ったほうがいいですか？」
「いやいい」
「あ、あの・・・わたしは？」

ちょっとオドオドしながらそう声を上げたのはティア
この子は少し人見知りをするようでコリイは慣れたみたいだが
俺のときは少しよそよそしい

「いや大丈夫だよ・・・二人とも座るときな」

そう声を掛け、ティアの頭に手を置き軽く撫でる
・・・どうも小さい子とかにはすぐに頭を撫でてしまう癖が俺に
はあるらしい

「・・・はい／＼／」

少し赤くなりながらそう答えた
流石にもう恥ずかしかったか？
そう思っていると

『ああ！もう暑い！！ユリア離れる！』

『ああああ！ルナア』

『ちょ！痛い痛い痛い！！腰！腰に手が食い込んでるって！！』

『・・・あの母上、そろそろ食事・・・』

『ルナア』

「」「」

リビングから聞こえてきた声を聞き三人で苦笑いをする

「・・・二人とも、とりあえずユリアさん止めてきて」

「はい・・・」

「・・・でも」

ティアは何か言いたそうにしている

「ん？」

「・・・あなたに嬉しそうなお母さん・・・久しぶり」

「」

嬉しそうに微笑むティアに俺とコリイは顔を見合わせ笑った

「もうちょっと・・・ああしとくか？」

「そうですね」

俺がそう言うとコリイも肯定した
その言葉にティアは

「……ありがとう」

そう言った

俺もコリイもそんなティアを見て妹ができたみたいに嬉しかった

『……………』

『は、母上！？ルナさんが泡吹いてます！！！！！！』

『ルナア』

『母上！！』

『ヴァン……………うるさい(ガン)』

『ガハッ！(ドサッ)』

『ルナあ』

「……………」

この後、ティアにユリアさんを引き剥がしてもらい
俺はヴァン、コリイはルナさんの手当てをし、
夕食にありつけたのは一時間が経った後だった……

第31話（後書き）

寒くなつてきてキーボードを上手く打てません・・・

感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第32話(前書き)

遅れてすみません><

何とか風邪も治り執筆できました^^

どうぞ!!

追記

無茶苦茶なオリジナル吸血鬼要素出します・・・

批判だけのご勘弁を・・・

第32話

NOSIDE・・・

夜・・・

「・・・ひどい目にあつた・・・」

心底疲れたように言うルナにイザックとコリィは二人して苦笑する

「全く・・・ユリアの奴は・・・」

ブツブツと文句を言うルナだがその顔は嬉しそう
本気で嫌がつてるわけじゃないということは明確だった

そして、今日三人が集まったのは理由がある

「・・・それで？・・・ちよつとやばいかい？」

「・・・はい・・・ちよつと目眩がするようになりまして・・・」

イザックは暗い顔でそう告げる

「そんなに気にするな・・・いちいち気にしてたら毎回暗くなら
なきや

いけないじゃないか」

ルナはそう言い苦笑い

そうイザックに”吸血衝動”の前兆が出始めた

「・・・目眩、食欲不振が前兆と見て間違いないんだね？」

「はい、前に暴走した前の日にもあったので間違いないです」

「そうかい・・・コリイ」

「はい」

「ほんとにやるかい？私がやっても・・・」

「いえ・・・私がやります」

コリイはルナの言葉を聞かずに断った

「そうかい・・・じゃあイザック」

「はい・・・ゴメンな・・・コリイ」

コリイに申し訳なさそうに謝るイザックにコリイは優しく微笑む

「そんな顔しないでください・・・私は・・・イザックさんの力になりたいんですから」

「・・・でも」

「なら・・・また今度女装してくればいいです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
わかった」

「そんなに躊躇うくらい嫌なのかい？」

「当たり前ですよ・・・」

しくしくと泣くイザック

そんなイザックを見てルナはけらけら笑う

そしてイザックは表情を改めコリイの前に立つ

「・・・すまん、じゃあ貰うぞ?」

「……どっぞ」

そう言っつてイザックはコリイに顔を近付ける
そのときコリイは……

「(わわっ……ち、近い……緊張する……!)」

……女装させたりしているが……イザックはコリイの想い人
である

そんな相手が間近に来て……平気ではいらなかった
そして……

「(かぶっ)」

「ん……／＼／＼」

気恥ずかしい感じがするがコリイはきゅっとイザックの服を持ち、
耐えた

ちゆる、ちゆる……と静かな部屋に吸血音が鳴る
そして、数秒後……ゆっくりとイザックはコリイの首元から顔
を離す

「すまん……コリイありがとな」

「……」

イザックはコリイに向かい合い礼を述べる……が
コリイからの返事はない

「?コリイ?」

「どうしたんだい?」

そして……

かくつとコリイの力がなくなった

「コリイ!?!」

急に倒れるように力が抜けた彼女に驚愕し、コリイに呼びかけるが……

「すう……すう……」

寝てるだけであつた……

「……はあ……イザック!?!」

そうしてみるとイザックは……顔を真っ赤にさせて放心状態だつた

「だ、大丈夫かい?」

「……にゃんとか……」

呂律が回つてない時点で大丈夫じゃないと判断したルナ

「とりあえず……あたしはコリイ連れて部屋に戻るよ」

「……そうして下さい……」

イザックはボーっとした感じで生返事を返す

「(あの言い伝え……ほんとだったのかね?)」

そうルナは一つの吸血鬼に関する言い伝えを思い出していた……

その言い伝えとは……

『吸血鬼に恋をした異性はその吸血鬼に血を吸われると……』

自らの欲望に忠実になる』

「（この言い伝え……イザックは知ってるのかね？）」

おぶっている少女、コリイを見て思う

この子の恋は……叶うのか

「（できれば……）」

叶って欲しい……そう願うルナ

息子のような存在のイザック……

娘のような存在のコリイ……

どちらも幸せになってほしい……そう思うから

第32話(後書き)

はい・・・一応ヒロインはコリィのみの予定です
なんか・・・ネタが無くて・・・(泣)

感想、アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第33話(前書き)

・・・原作まで遠い

でござい！

第33話

イザックSIDE・・・

俺は先程の出来事を整理していた・・・

「（なんで・・・あんなこと・・・）」

そう・・・コリイがいきなり・・・キスをしてきたことだ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はある言い伝えを思い出していた・・・

『吸血鬼に恋をした異性はその吸血鬼に血を吸われると自らの欲望に忠実になる』

「・・・・・・・・・・・・・・・・まさかな」

俺は絶対ない・・・そう信じた

だってそうだ・・・吸血鬼である俺が誰かに好かれる・・・
きっとあってはならないことだし・・・自分がそういう存在だと
知られれば

・・・恋人に危害が行くのはほぼ間違いない・・・
もし・・・俺のせいで自分が愛した人が死んでしまったら・・・
俺は耐えられないだろう・・・

コリイなら尚更だ・・・

・・・だから俺は・・・コリイに好きと言わない
・・・自分が好きな子だからこそ、絶対に言わない

俺は自分にそう言い聞かせ・・・ベットに寝転んだ

NOSIDE・・・

「・・・・・・・・・・・・／／／／」

朝早く・・・ユリアの家のリビングを占領している三人の姿があった

「……で？コリイ昨日のことは覚えてるのかい？」

普通に聞いてくるルナだが……顔がにやけていることからコリイが覚えていると確信しているのだろう

「……………はい／＼／」

コリイは小さく答えた

「あぁん コリイちゃんも可愛いわね」

コリアさんはいつの間にか話に溶け込んでおりコリイが赤面するとルナのとおりと同じように抱きつく

「ま……いいんじゃないかい？……一歩前進ってことで」

「……そうでしょうか？……ただ私が襲ったようにしか思えないんですけど……」

「……………」

「……否定してくれないんですね」

ダバァー、と言う効果音が付きそうなくらいの勢いで涙を流すコリイ

「い、いやそんなことないぞ！？……多分」

ルナの言葉に完全にコリイはノックアウトし、机に突っ伏す

「……………」

病みそうだ……コリイはそう思った

そのとき・・・三人の話題の中心人物が現れた

「おはようございます」

「あ、ああ・・・おはよう」

「あらおはよう、イザック君」

一方コリイは・・・

「い、い、い、イザックちゃん!？」

噛みつき噛みであった・・・

「・・・お、おはようございます」

「ああ・・・おはよう」

軽く・・・いつもと変わらずに挨拶を述べると・・・

「朝食の支度してきます」

そう言いキッチンに入っていった・・・

「」「」「」「」

三人はイザックを見送り・・・

「・・・普通過ぎない？」

「・・・だな・・・昨日の動揺はどこいったんだ・・・」

「・・・何も反応なければそれはそれで辛いですね・・・」

イザツクの態度にルナとユリアは不思議に思い・・・
コリィは一人シクシクと泣いていた・・・

第33話(後書き)

両想い・・・にしました

この先どうなるか・・・正直自分にもわかりません^^;

感想、アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第34話(前書き)

とりあえず投稿・・・

ライムでの日常です^^

第34話

NOSIDE・・・

・・・イザック達がフォトシアに来て三日目
場所はアルバート流剣術道場

そこにはルナ、ユリア、コリイ、ティア・・・
そして・・・剣を構える二つの影・・・
イザックとヴァンである

「・・・行きます!!」

「・・・来い」

ヴァンは剣を構え・・・瞬時に後ろに引き・・・

「光龍槍!!」

一気に前に突き出し光の槍を放った
イザックはヴァンに向かいながら剣で受け流し

「魔神剣・双牙!」

二つの剣による衝撃波を打ち出す

ヴァンは横に飛び退く、そこに

「魔神空牙衝!!」

もう一度衝撃波を飛ばし、ヴァンに向かい駆け込みながら剣を突き出す

「ぐっ……！」

衝撃波は受け流したものの突きをくらい後ろに後退するヴァンその瞬間、ヴァンには隙ができそこを見逃すイザックではなかった

「はっ！やあ！たあ！！散沙雨！！秋沙雨！！」

三度の斬撃後合計にして22回の突き……

「がはっ……く！裂破衝！」

突きをくらったヴァンは状況を打破するためダウンを取ろうとイザックに掌底を浴びせようとしたが……突き出した手の先にはイザックはいない……

「あまいな……絶影！」

焦ったヴァンに一言声を掛け……
上空から風を纏った膝蹴りを落としヴァンは気絶した

「……俺の勝ちだ」

イザックはそう言い嬉しそうに笑った

「ヴァン・・・甘いです・・・なんですか！！先程の戦い方は！！」

「・・・申し訳ありません」

「いいですか？ヴァン・・・あなたは体格もあり剣を易々と振り回せる

それは有利になるでしょう・・・しかし！あなたの戦い方では得意な術が使えず

ジリ貧になると何度も・・・」

「・・・誰ですか？あれ」

「・・・信じられないだろうが・・・ユリアだよ」

「・・・」

家のとぎと全く違うユリアさんを見て軽く絶句している二人を見て小さくルナは苦笑する

「現アルバート流剣術道場当主・・・ユリア・グランツその人だ」

「……マジですか」
「……いろいろと追いつけません」

コリイの思いはイザックにも共通するだろう

家では幸せそうな笑顔と優しそうな雰囲気しか見せてないユリア・

しかし、彼女には二つの顔があったのだった

今日それを二人は初めて知ることになったのだった……

「わかったら……外で頭を冷やしてきなさい……」

「はい……」

ヴァンはそういうと立ち上がり道場を出て行った

「さて……ゴメンね？イザック君、つき合わせちゃって」

「全然構いません……俺も体動かしたかったんで」

「そう？……ありがとね」

そう言っユリアとイザックが話していると……

くいくいつ、とユリアの服のすそをティアが遠慮がちに引っ張る

「……母さん……譜歌教えてくれるって……」

「ええもちろんですよ！！……イザック君とコリイちゃんも来るか

し……」

「……お邪魔でなければ」

「是非！」

ユリアさんの誘いにイザックとコリイは答える

特にコリイは譜歌にとっても興味を持っていたので嬉々としていた

「じゃああたしはヴァンが戻ってきたらそっちと一緒に行くよ」

「ゴメンねルナ・・・」

「気にしなくていいよ」

けらけらと笑い飛ばすルナ

「じゃあよろしくね・・・それじゃ行くところか？」

ユリアさんの声にイザック、コリイ、ティアは頷き道場を後にした

その後譜歌を聞き、コリイはティアと共にユリアさんから教えてもらうことになり

二人の譜歌をイザックは聞いていた・・・

途中でルナとヴァンが合流し・・・ヴァンが譜歌を歌ったときの顔と声のギャップにイザック、ルナ、コリイは笑いを堪えるのに必死だったとか・・・

第34話(後書き)

・・・どうでしたか？

いや・・・しゃべり方が難しいです

ヴァンはどうすれば・・・

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第35話(前書き)

引き続き日常・・・

じじい！

第35話

イザックSIDE・・・

フォトシアに来て五日目・・・

俺はこの町の商店街を歩いていた・・・

「よお!!イザック」

「ん・・・?」

歩いていると前方から長靴を履いた中年の男性が声を掛けてくる

「なんか買つてくか?」

「・・・いえ金持つてないんで」

男性は八百屋を経営しているジグさん

はじめてヴァンとこの商店街を歩いたとき知り合った

・・・そのときはローブを着ていたので女の人と勘違いされ

『ユリアさんの息子が別嬪さん連れてきた!!』

と大騒ぎになり・・・商店街の人とは最悪な出会いをしてしまった
・・・そのときヴァンも顔を赤くして照れていたので鳩尾に掌底を
ぶち込み気絶させたのはいい思い出だ

「なんだ金持つてないのか・・・貧乏人め」

「どつきますよ?」

ひくひくと引き攣る顔をどうにか笑みに変え答える

すると八百屋から一人の女性が・・・

「あんた！」

「はい！！！」

「仕事サボらない！！！」

腰に手をあて怒鳴っているのがジグさんの妻、カナさんだ
ジグさんは物凄い速さで八百屋に戻り品々の確認を始めた

「全く・・・ごめんねえ？」

「いえ」

「はい、これ」

するとカナさんは俺の手を持ちおもむろに何かを握らす

「・・・リンゴ？」

「あげるよ」

「え・・・いいんですか？」

「いいよ、今度また何かかっくとくれよ？」

「ええ是非」

俺はそう言いありがたくリンゴを貰いその場から歩を進める
カナさんの声とジグさんの声を聞きながら・・・

少し進むと広場に出た

そこには・・・

「あ！イザックさん！！！」

ティアがいた
友達と遊んでいたのだろう

「おうティア」

「何してるんですか？」

「散歩・・・かな」

特に目的もなかったのでそう答える

「あ！イザツクの兄ちゃん！！」

「あ！ほんとだ！！あそぼー！！」

その声を出し近寄ってきたのは

茶髪と黒髪の少年・・・茶髪の少年はジグさんのお子さんと名前
はカイ

黒髪の少年はその親友でヤットだ

ティアと同じ学校の子でたまたまティアを迎えにいったときに知
り合った

それ以来懐かれたまに遊びの相手をしたりしている

「おう・・・何して遊ぶんだ？」

「缶けり！」

「三人でか？・・・ティアも入るか？」

「いえ私はいいです」

「ええーチャンバラにしようぜ？」

「・・・そうだな！チャンバラがいい！！」

カイがチャンバラと言い出すとヤットも便乗しチャンバラをする
ことになった

「今日こそ・・・」

「一本とる!!」

「はん・・・かかって来いよ」

その後一時間ほど二人の遊びに付き合い、暗くなり始めたので二人を家に帰した

帰り道・・・俺は思う

「（この町の人は・・・いい人ばっかだな・・・）」

そう・・・この町の人は・・・本当にいい人ばかりだ
はじめてここに来たとき・・・正直町に出るのが嫌だった
ヴァンと共に出るということから渋々了承し外に出た

町に出たくない理由はやはり・・・怖かったからだ
吸血鬼になってから・・・俺はルナさんとコリィと森で暮らして
いた

賑わう町に行くのが・・・少し怖かった

それに眼帯をしていることから少し怖がられると言つこともあるはずしてもいいとルナさんには言われたが俺の中ではすでにお守りみたいなもの

なのではずしたくはない・・・

しかし・・・この町の人々には関係なかった

眼帯をしている俺にも・・・いたって普通に・・・気安く声を掛けてくれる

ジグさんや商店街の人たち

はじめはびくびくしながらだった次第に打ち解けて「兄ちゃん」と慕ってくれる

カイヤヤットら子供たち・・・

本当に・・・いい町・・・いい人々だ・・・心からそう思った

そして・・・この町がいつまでも平和にと・・・願った・・・

第35話（後書き）

はい・・・なんか日常の描写って難しかったですね・・・
舐めてました・・・^^；

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

次回はキャラ崩壊のスキット第二弾の予定です・・・
・・・あくまで予定です^^；

閑話・・・スキット2 (キャラ崩壊注意) (前書き)

遅くなりました(汗)

最近時間が無くて・・・(泣)

ちょっと毎日更新は厳しくなるかもしれません><

キャラ崩壊しまくりでよければどうぞ!!

閑話・・・スキット2（キャラ崩壊注意）

『譜歌』

「~~~~~」

「コリイ？何の歌だそれ？」

「あ！イザックさん、これはですね先日ユリアさんに教えてもらった童謡の譜歌です」

「へえ・・・なんか、心地良いな」

「ほ、ほんとですか？」

「ああ・・・なんか癒される」

「そ・・・そうですねか／＼／＼」

「？」

「（笑顔でそんなこと言うのずるいです・・・／＼／＼）」

『ご主人様』

「できました〜・・・じゃあ〜ん！！」（メイド服を掲げて叫ぶ

コリイ）

「「「おおお〜！！」「」（拍手するルナ、ユリア、ティア）

「・・・イザックさん」

「・・・すまん、逃げる！！（がしっ）・・・何？」

「・・・すいません・・・」（がちりとイザックの腕をホールドするヴァン）

「なんで・・・なんでだヴァン！！」

「・・・逃がすと・・・坊主にされるんです！！」（超必死）

「・・・知るかあああああ！！！！！！！！！！」

「「「イザック？（さん？）（君？）」「」

「コリイ・・・あんだ何を言ったんだい？」

「すぐにわかりますよ」

「・・・ノノノ」（赤くなりながらヴァンの前に立つ）

「・・・な、何か？」

「イザックさん・・・可愛くですよ？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

ヴァン）

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「可愛かったよ！イザックさん！！」

「・・・」

にしゃがみこむ）

「？」

『それはやめてほしい』

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「全く・・・」

「・・・」

「まあまあ・・・」

「？」

「・・・」

「了解」

「・・・ガキだねえ」(けらけら笑うルナ)

「・・・たとえ女装してももうルナさんには見せない」

「ごめんなさい」

「「はやっ!？」」「(ルナの謝罪に驚愕するヴァンとコリイ)

『×ゲーム』

「ヴァンの負け」(トランプをしているイザック、コリイ、ティア、ヴァン)

「む・・・」

「兄さん弱い」

「ぐ・・・」

「ヴァンさん3回連続で負けですね・・・何か×ゲームしましょうか？」

「お!いいなそれ・・・何にする?」

「・・・無茶なことは言わないでくださいよ?」

「大丈夫だって・・・何にする?」

「うん・・・じよそ」却下で「・・・まあ・・・そうですね」

「・・・自分で言つといて残念な目でこちらを見ないでください」コリイさん・・・

「・・・あ!」

「どうした?ティア?」

「ちょんまげを切る!」

「「・・・」」「「・・・」」「「・・・」」

「「それだあああ!...!」「(はさみをどこからか取り出すイザックとコリイ)」

「いやだあああ!...!」(その瞬間すごい速度で逃げ出すヴァン)

「待てえええええ!...!」

「逃がしません……!」

「……」冗談のつもりだったんだけど」

『やはり今回も……』

「……」(うわぁ……という顔のイザックとルナ)

「はい できました!!カレーライスです!!」

「あら おいしそうじゃない」

「ほんとですね」

「わぁ」

「……」

「?……どうしたんです?二人とも」

「……まあヴァン食ってみる……二人はちょっと待っていてくれ」

「……?」

「どうぞ ヴァンさん」

「ええ……いただきます(ぱくつ……)だらだらだら」

(汗を大量に掻き出すヴァン)

「どうですか?」

「……ぬ」

「……ぬ?」

「ぬおおおおおおおおおおおおお……!……!……!
!……!辛いいいいいいあああああああ……!……!……!

「……!」

「……」

「……あれ?」

「……ちなみにコリィ……レシピに書いてある以外に何か足したかい?」

「あ、はい……スパイスを20個ほど……」

「……」

「・・・わかったでしょ？・・・俺とルナさんが止めたわけ・・・」
「ええ・・・何というか・・・すごいわね」
「・・・兄さん・・・そういう役になりつつ・・・」
「言うなティア・・・」

閑話・・・スキット2（キャラ崩壊注意）（後書き）

・・・今回もすごいキャラ崩壊のしようだったと思いますか・・・

正直書いてて楽しかったです^^

感想がユーザのみになってましたが今から変えてみようかなと・・・
批判がきたら怖いのでその類のがきたら戻します^^;

第36話(前書き)

超短いです^^;

それでもよければどうぞ！

第36話

NOSIDE・・・

イザックたち三人がフォトシアに来て十日・・・
平和な日々を過ごしていたイザックたち・・・
しかし今日それが・・・壊されることを・・・まだ彼らは知らない・・・

「・・・ヴァン、胡椒とってくれ」

「あ、はい・・・どうぞ」

「悪いな」

朝・・・台所ではイザックとヴァンが食事を作っていた

「しかしイザックさん料理上手ですね」

「ん？まあ・・・な。昔から作ってたし作れて損はないだろ？」

「そうですね」

二人がそんな会話をしていると女性陣も起床してくる

「あら、ゴメンねイザック君」

「いえ」

「イザックさん今日は何作ってるんですか？」

「簡単な野菜炒めとサンドイッチだ」

「早く食べたいです！」

「・・・早く飯」

「・・・ルナさん夜更かししたでしょ・・・全員顔洗ってきてください」

イザックがそう言うと女性陣はそろってキッチンを退出

「はは・・・なんかイザックさん母親みたいですね」

「ああん!？」

「・・・なんでもないです」

・
・
寝めたつもりだったのに逆ギレされヴァンは縮こまるしかなかった・

「……さてと……今日は何するかな……」

イザックは今日何をして過ごすか考え中だ

「(ヴァンと稽古するか? ……いやティアとコリイが譜歌の練習してるの聴くのも悪くないな……カイとヤットの相手するの……)」

そう……いつもどおりのことを思い浮かべていた……
しかし……次の瞬間……その日常は壊された

『皆さん……ごきげんよう』

「!?!」

不意に……声がした

頭に直接呼びかけているようでひどく気持ちが悪い……

『私の名前は……ヨハネス・フルール……そして私の目的はただ一つ……』

「しなさい」

吸血鬼・・・イザック・フーバーを寄越

第36話（後書き）

ね？短かったでしょう？

・・・すみません、今日は全然頭が働かなくて・・・

次話は頑張ります！！

第37話(前書き)

・・・微妙・・・かも

それでもよければどうぞぞぞ！

第37話

NOSIDE・・・

「「「!?!?」」」

その声を聞いた瞬間、三人は違う場所にいなながらも同時に身構えた

「（まさか・・・例の組織・・・!?!）」

いち早く行動を起こしたのはルナ

彼女は先程までヴァンと稽古を行っていた

「る、ルナさん今の・・・」

「・・・ヴァン、あんたはユリアとティアのどこに行きな」

そう言い残し動揺しているヴァンをおいてイザックがいるであろう
居間に急いだ

「（・・・どうやってここを）」

ルナは先程の声のことを考えたが情報がない

一旦考えることを止め、居間へと走った

「イザックさん!!」

今に響いたのは少女の大声
そう、コリイだ

「・・・慌てすぎだ・・・大丈夫だ」

「す、すいません」

コリイはホツとしたように胸をなでおろす

そして

「イザック!!」

「・・・ルナさんも・・・慌てすぎですよ」

苦笑したように居間に駆け込んできたルナを見る
魔槍を持ったままだ

よほど焦ってきたのだらうとイザックは考えた

「・・・悪いね」

ルナさんも安堵したように息を吐く

そこに三つの人影

「イザック君・・・」

「・・・ユリアさん」

ティアを抱きかかえたユリアとヴァンの姿があった

「イザックさん・・・さっきの」

「・・・後で説明する」

イザックはヴァンにそう告げる

その直後、また男の声が響き渡った

『・・・ふむ・・・イザック・フーバー・・・聞こえてるなら・・・

そうですね

今日の正午までに町長宅を訪ねなさい・・・今この町の町長は・・・
私の手にありますから』

「何・・・!？」

「・・・ちっ・・・どうやらエリオとは違って直接は来ないみたい
だな」

『・・・何人で来てもらっても結構ですが・・・今から魔物を町に
解き放つので

その対処に追われるかもしれないね?・・・ハハ・・・』

ヨハネスという男は最後に最悪の言葉を残していった・・・

「・・・ルナ！」

「ああ！ユリアー！準備しな！！」

「ええ・・・でもどうするの？」

ルナは少し考えた後・・・

「・・・イザック・・・一人で行けるかい？」

ルナはイザックを見ながらそう言った

その目には信頼が九割・・・そして不安が一割ほど混じっている
イザックは・・・顔を引き締め

「行きます・・・皆さんは町人の保護に回ってください」

そう告げた

「うわあああ！！」

「何で！何で魔物が！！！」

町中には魔物が放たれていた

それも一匹や二匹ではない・・・

数十匹・・・あるいは百を超えるんじゃないかといづくらいだ

「ガウツ!!」

「ヒッ!？」

一匹のウルフが町人に襲い掛かった・・・
しかし、その牙は町人に傷をつけることはなく・・・
ウルフは縦真つ二つに切断された

「・・・ユリアさん!!」

「・・・みんな!私の家の近くに結界が張ってある!!そこまで避難!!」

男の人は時間稼ぎ!!子供、老人、女性優先で避難して!!」

剣を携えたのは一人の女剣士、そうユリアだった

「・・・ここからは・・・一步も行かさない!!・・・アルバート流剣術師範・・・

ユリア・グランツ・・・行きます」

迫り来る魔物・・・ユリアはいつもの平和な雰囲気は全く感じさせない・・・

鋭い殺気を放ちながら魔物たちと対峙した

場所は変わり・・・

「ヒッ!!」

そこには路地裏に追い詰められた一人の青年

彼の怯える視線の先では・・・木でできた巨人・・・ウドゴレムだ

「・・・・・・・・！」

「ヒイイイ！！！」

ウドゴレムは無言で拳を振り上げ・・・男に襲い掛かる
そこに一本の矢がウドゴレムの腕に突き刺さる

「・・・・・・・・！！！！？？？」

そして・・・突如燃え上がる・・・

「・・・・・・・・紅蓮」

とどめといわんばかりにもう一本の矢
その一本もウドゴレムの胸元に命中し・・・ウドゴレムを焼き尽く
していく

「・・・・・・・・すさまじいですね・・・槍戦士だとばかり思っていました」

「・・・・・・・・あたしはほんとはこっちが本業なんだよ」

そこには魔槍ではなく魔力で作られた弓・・・『魔弓』を構成した
ルナと

そんなルナを尊敬の眼差しで見るヴァンの姿があった

そしてその後ろから・・・

「すみません・・・ここは任しました」

「ああ・・・ちゃんと戻ってきなよ？」

「ええ．．．もちろんです」

イザックだ．．．そしてルナから言われた言葉に笑みを浮かべ
嬉しそうに返事をした

「．．．イザックさん」

「．．．すまんヴァン．．．黙ってて悪かった」

「．．．もういいですよ．．．たといざックさんの正体がどうあ
れ．．．

私のイザックさんに対する尊敬は変わりません」

「．．．ありがとう．．．気をつけるよ？」

「ええ．．．イザックさんも」

イザックとヴァンは拳を打ち付けあい微笑んだ

先程、イザックが自分のことをヴァンとティアに話した

．．．ユリアさんに話したときと同様に緊張したが．．．二人の反
応は

『．．．隠してたことはいろいろ思うところがありますが．．．吸
血鬼が何ですか？

イザックさんはイザックさんです．．．どんなことがあるかと私は．
．．．あなたを信じてますよ』

『イザックさん吸血鬼なの？．．．じゃあ御伽噺は嘘ですね！！
だってイザックさんとても優しいもの！』

普段と変わらなかった．．．いや、普段より．．．嬉しかった

「・・・この事態が収束したら・・・町のみんなに謝らないとな・・・」

「そのときは一緒に頭を下げます！！だから！！」

「ああ・・・きつと戻ってくる！！・・・二人とも頼んだ！！」

「「ああ！！（はい！！）」

イザックは魔物の群れに突貫し、町長宅を目指す

そして二人は・・・

「一掃するよ・・・」

「・・・はい」

数秒後・・・

「龍炎閃！！」

「イグニートプリズン！！」

ルナの技・・・ヴァンの術が炸裂した

町は・・・一瞬で混沌化した

そしてイザックは・・・この事件後、辛い現実を知ることになるとは
このときは思っても見なかった・・・

第37話（後書き）

・・・最近になって全然ネタが浮かばないです><

スランプ？というのかわからないですが・・・

まあ頑張ります^^

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第38話（前書き）

見直したので多分誤字はないと思いますが・・・

見つけたらまた教えてください^^；

どうぞ！

第38話

イザックSIDE・・・

「はあ！！幻晶剣！！」

右足を軸に回転しながら襲ってくる三体の魔物をなぎ払い走る

「時間は・・・」

一時間半・・・といったところだろうか

町長宅までもうすぐ、充分間に合う時間だ・・・

「・・・急がないと」

町は魔物で溢れかえっている

どうやって魔物を手なずけているのかはわからないが今すべきことはとにかく

ヨハネスという男の元に行くこと

イザックは全力で町の道を駆け抜けた

ユリアSIDE・・・

「ふう・・・」

だいたい片付けたか、というところで私は息を吐く

「ユリアさん！」

「ああ・・・ジグさん、大丈夫かしら？」

「ああ！どうってことないさ！！」

手にハンマーを持ったジグさんが鼻の下をこすりながら笑う

・・・一応この人元ライマ国騎士団の小隊長まで行った人なんですよ？

結構すごい人なんです

「・・・カイ君たちは？」

「もうとつくに避難してる・・・しかし・・・」

「ええ・・・ひどいわね」

住宅街や広場はほとんど半壊している

魔物のせいだった

「・・・グランツさん、ジグさん」

「あ・・・」

「どうしました？ここにいと危ないですぜ？」

現れたのは一人の青年

この町フォトシアの町長の御息

「……この魔物の大群は……あのイザック君のせいなのですか？」

「……イザックのせいって言うか……なあ？」

「……彼を狙っているもののせいです」

「……そうは言っても彼が関与しているのは確か……この騒動が終結したら

……わかるでしょう？」

「……ひどくないですかい？」

ジグさんは少し……いや、かなり顔を歪めながら町長息子に食いつく

「私は元々彼の移住を許してはいなかった、
ユリアさんが言うので仕方がなく住ませていたがこんなことがあつては……ねえ？」

いやらしい……そんな笑みを浮かべた町長息子……
実はイザック君のことが大嫌いな

この町長息子……金の力で愛人を何人が困っていた
だけど……その愛人全員が……ねえ？
イザック君のこと好きになっちゃったのよね……
それで嫉妬して暗殺させようとまでしたんだけど返り討ち
その後イザック君に脅されておとなしかったんだけど……

「（ほんとに……最低ね）」

町と自分の親の危機だというのにこの最低息子の頭にはイザック君

への処罰しかない

．．．ほんとに最低．．．

こいつの頭をイザック君の目の前でどつきたいから．．．

早く．．．帰ってきなさい、イザック君

私はそう無事を願いながら．．．

「．．．．．ぼっちゃん．．．下がったほうがいいぜ」

ジグさんがハンマーを構えるのを見て私も剣を構え
また溢れてきた魔物に対峙した

N O S I D E . . .

「はあ．．．はあ．．．着いた」

イザックは息を切らしながらも町長宅の前に立っていた

「・・・行くぞ」

そして門に手を掛け・・・町長の家に入り込んだ

第38話（後書き）

・・・駄文なのは承知です（泣）

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第39話（前書き）

昼以降は更新できなさそうなので・・・

明日から冬休みです！！

家の自営業が忙しいのでそれどころではなくなりますが・・・（泣）

どうぞ！

第39話

イザックSIDE・・・

俺はなんとか町長の家に潜入することができた

あそこの息子は屑だが町長さんはとてもいい人だ
優しく、温かい人物だ

だから・・・

「（・・・助きたい）」

・・・屑はルナさんがエルフだとわかるとすぐに俺たちを町から追
い出そうとしてきた

しかし・・・町長さんはそれを許さなかった
むしろ差別が当たり前前の世の中だというのに・・・

『エルフだからなどという理由で町から追い出すなどあってはなら
ん！！！！』

そう屑に一喝し、俺たちの町への移住を認めてくれた

・・・町長という職についているものは大概が種族差別は当たり前
という意識を持って
いるがこの人は違った

・・・こういう人が・・・俺たちの事情で死んでいい訳がない・・・

「待つててくれ・・・町長・・・！」

俺は長い廊下を駆けながら彼の無事を祈った

ヨハネスSIDE・・・

「ふふ・・・来ましたか」

・・・キラから聞いていた通り・・・強みたいですね・・・
この短時間でこの家に入り込めるのですから

「・・・楽しみです・・・ふふふ」

笑いを抑えられずただただ・・・イザック・フーバーをどう始末し
てから

本部に連れて行くか・・・

それを考えると思考が止まらなくなります・・・

「早く・・・来てくださいよ」

赤い液体がついたその手を舐めながら・・・口元をゆがませた

暗く広い広間に男の不気味な声が響いた・・・

N O S I D E . . .

「・・・・・・・・・・」

イザックは廊下を駆けていくと開けた場所に出た

「・・・・・・・・やあ・・・・・・・・ここにちは」

「・・？」

正面から声がする

先程、脳内に響いた……いやらしいあの声

「……お前がヨハネスか？」

「ええ……初めましてイザック・フーバー……私の紹介はもういいですね？」

フードをかぶっていて表情は見えないが口元が緩んだの牙見えた笑っているのだろう

「……町長はどこだ？」

「……」

イザックが問うと……男は口元をさらに歪ませた……その表情は邪悪なもので……一瞬で町長がどうなったかを悟らされた

「いやあく、あのご老人しぶとかったですよ……君や他の仲間の事を全然しゃべらな

いものですから……ついうっかり」

それを聞いた瞬間……イザックの眼帯がはずされた……晒された両目は鋭く、ヨハネスを睨みつける

「……グラス・ボーガ神の目」

「へえ……その技、情報では時間がかかるはずでしたが？」

一瞬でイザックは切り札の魔眼を出してきた

ヨハネスは笑みを崩さずイザックに問いかける

「俺だつて……この何日も何もしなかったわけじゃない!!!!!!
お前らを倒すため……お前から他のみんなを守るため……も
う俺のために誰かが

傷つかないために……俺は強くなり、お前らと戦う!」

イザックは静かに……怒りを抑えて言う

「ま……町長は救えなかったですけどね」

ヨハネスがこういつた瞬間……イザックが消えた

「……がつ!!」

一瞬驚き、咄嗟に腹部を腕で守る

次の瞬間彼の腕に衝撃が襲い……後ろに飛ばされた

「……だが!!」

イザックは剣を抜き、ヨハネスに突きつける

「……敵を討つことはできる……」

よろけながらヨハネスは立ち上がり……また笑みを浮かべる

「言い訳ですね……」

「……その通りだ……俺のせいで町長は死んだ……なら……
もう被害は出させ

ない！！！！！！！！！！」

「ふふ……なら……その言葉！証明して見せなさい！！！！」

イザックは走り出し、ヨハネスは不敵に笑う……

戦いが始まった……

第39話（後書き）

次回から戦闘です^^

しかし家のほうが忙しくなるのは事実・・・
なので毎日更新は無理だと思いますが・・・

気が向いたら見てやってもらえると嬉しいです^^

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第40話(前書き)

お久しぶりです^^

一週間も更新が止まってしまいました^^；
この一週間はいろいろと辛かった・・・

久々なのでぐだぐだかも知れないですが・・・
それでもよければどうぞ^^；

第40話

NOSIDE・・・

「魔神剣！」

「はっ・・・」

イザックが剣を薙ぎ衝撃波を繰り出す

それをヨハネスはサイドステップでかわし・・・

「・・・エアスラスト！」

無詠唱での風の魔術

風でできた丸い玉がイザックのうえに出現し切り裂く

「瞬迅剣!!」

しかしその拘束から抜け出すだけでなく、ヨハネスに向け剣を突き出すイザック

しかし、次の瞬間・・・ありえないことが起きた

「・・・イラプション！」

「なっ・・・!?!」

術がまだ発動しているにもかかわらず・・・ヨハネスは次の術を唱え終えた

「（連続で・・・無詠唱の魔術だと・・・!?!）」

地底から湧き上がる溶岩で身を焦がしながらもイザツクは何とか脱出する

「・・・レイジングミスト!」

そしてまた・・・無詠唱で術が唱えられる・・・

今度の術は足元から高熱の霧を発生させるもの

その範囲は術の中でも広い部類に入りイザツクでも逃れることは不可能

「・・・うああああああ!!!!」

高熱の霧は数秒に渡って続き、イザツクの身を焼き続けた

「・・・ぐっ!」

「・・・もうダウンですか?・・・つまらないですね・・・」

ヨハネスは期待外れといわんばかりに溜め息を吐いた

「これならまだエリオのほうがましでしたね・・・キラの目は狂ってたんでしょうか?」

「・・・待て・・・この野郎・・・」

「・・・ああ、起きました?・・・まだやりますか?それとも降参します?」

ヨハネスは先程と違い興味無さそうにイザツクを見ながら問う

「……誰が……降参なんかするかよ!!!……陽炎!」

一瞬でヨハネスの上空に移動し膝蹴り

「魔人連牙斬!!」

「……数打ちちゃ当たるとも言いたいんですか?」

そしてイザックは衝撃波を連続で三つヨハネスに向け飛ばす
しかしそのどれもが彼に当たるとはなくヨハネスの顔はさらに興
味を無くしているかに見えた

「……瞬迅剣!閃空裂破!!鳳凰天駆!!」

前進しながら剣を前方に突き出すが受け流され
上空に打ち上げようとすればバックステップで避けられ
炎をまとい上空から攻撃しようとするれば……

「……サイクロン!」

「がっ……うああああああ!!!」

攻撃が当たる前にヨハネスの術……

巨大な竜巻が現れイザックを襲う

そして……再び風によって切り裂かれる

「くっ……!!」

「……勝てないですよ……私たちの組織……『VB』にはね
……」

ヨハネスは倒れたイザックにいやらしい笑顔を浮かべながらそう告
げた

「ぐっ……」

「あれ？まだ生きてたんですか？」

呻き声を聞きヨハネスはイザツクの前に立つ

「……一旦死んでくださいね？……運ばなきゃならないんですから」

そういい、ローブの中からナイフを取り出す

「じゃあ」

そして……イザツクの胸元めがけて振り下ろす……が

「は？」

ナイフが一瞬で飛ばされ手の平に……イザツクの剣が突き刺さっていた

「あ……あああ!？」

「……悪いな……お前らのせいで……頑丈な体と最強の回復力を

持つちまったからな……油断したな？別にあれぐらいで動けなくなるような

体力はしてないんでな……」

イザツクはボロボロの体のまま膝をつき身を起こした

「（馬鹿な!？回復の速度が速い……!？）」

剣を無理矢理引き抜き、バックステップで距離を置きヨハネスは思考をめぐらせる

「その『VB』とか言う組織のことも教えてもらわないといけないからな・・・本気で行く・・・！」

イザックが剣を振りかざすと同時に・・・
彼を青白い光が包み込んだ

第40話(後書き)

・・・やっぱり書いてないと感覚忘れますね^^；
今年はもう更新できないと思います

新年が楽しみですね^^

私はガキつかを見ながら楽しくすごそうと思います^^

皆さんも大晦日楽しんでくださいね^^

それではまた・・・よいお年を！！

第41話(前書き)

明けましておめでとございます^^
今年もどうかよろしく願いします！

ちなみに今回イザツクの秘奥義が出てますが・・・
完全に原作キャラのパクリです^^；

どうか大目に見てあげてください(泣)

それではどうぞ！

第41話

NOSIDE・・・

「散沙雨！」

「ちっ・・・」

イザツクの連続の突き

ヨハネスは横に飛びそれを回避し詠唱する

「エアスラスト！」

風の球体がイザツクとヨハネスの間に発生させ距離をとろうとする
しかしここで

「あああああ!!!」

「!?!」

イザツクはヨハネスの予想を超える行動に出る

・・・躊躇いもなく風の球体に突っ込みヨハネスとの距離を縮めた

「影走斬！」

「がはっ！」

術で無防備になったヨハネスの脇腹に一閃
血が彼から噴き出した

「風雷神剣!!!」

イザツクの突き出した剣と共に落雷
それは見事にヨハネスの頭上に落ち・・・

「く・・・」

平衡感覚を失わせ、再び無防備な状態に陥る

「散沙雨！秋沙雨！！驟雨双破斬！！！」

そして彼の体を・・・イザツクの無数の突きが襲う

「がは・・・」

たまらずに膝をつくヨハネス

そこに

「獅子戦吼！！」

「うあっ！！」

イザツクの秘技、「獅子戦吼」が炸裂

ヨハネスはなす術なく後方に転がる・・・

「・・・終わりだ」

その言葉と共にイザツクの体と剣を紅蓮の炎が包む

「我に纏いし紅蓮の炎よ・・・」

袈裟懸け、横薙ぎ、そして斬り上げ・・・

燃え盛る剣がヨハネスを切り裂き上空に打ち出す・・・

「我が道を阻むものを焼き尽くせ・・・！」

ゆっくりと・・・打ち上げられたヨハネスが落ちてくる

イザックは剣を上段に構え・・・纏った炎の全てを剣に集中させ・・・

「紅蓮・・・火龍斬！！！！！」

振り下ろした・・・龍の頭を模した炎の一撃が地を這いヨハネスに
繰り出される

そして

「うああああああああああ！！！！！！！」

避けることも、防ぐこともできず・・・ヨハネスを襲い
火炎の龍がヨハネスの身を焼きながら壁に当たり・・・爆炎が起こ
った

「・・・俺の・・・勝ちだ」

イザックはヨハネスに背を向け一言・・・そう呟いた

第41話（後書き）

・・・フレンの秘奥義の龍がジエイのやつに代わり
一匹になっただけです・・・

自分のアイデアの無さが非常に辛いです><

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいですよ^^

第42話(前書き)

どうもです^^

ちょっと遅れました^^;

もうちょっと早めに更新できるようにがんばりたいです

ぜひぞー！

第42話

イザックSIDE・・・

「・・・はあ・・・はあ」

勝った・・・

「（・・・流石に・・・グラス・ボガ神の目オーバーリミットと限界突破オーバーリミットの同時使用はきついな・・・）」

息切れし、目眩がする

足に力が入らず、今は地面に腰を下ろしている

「・・・おい」

「・・・なんですか？」

目の前で倒れているヨハネスに声を掛ける
どうやら意識はある、動けないだけのようだ
俺は剣を杖にして立ち上がる

「・・・お前らの組織は・・・何が目的だ」

「・・・」

そう・・・俺はそれが聞きたかった

何故・・・吸血鬼の実験をしていたのか？

何故・・・吸血鬼を欲したのか？

何がこいつらの目的なのか？

ヨハネスは口を開いた

「・・・私の・・・主の・・・望みだから」

「・・・主？」

「ええ・・・私たちの・・・おやのよ・・・うな・・・存在です」

ヨハネスは苦悶の表情を浮かべながら答える

「・・・何故、吸血鬼を求める？」

「・・・我が主の・・・永遠の・・・命のため・・・
に」

「・・・永遠の命」

「そう・・・我が主の・・・幸せのため・・・私たちは行動する」

「・・・何故そこまでそいつに尽くす？」

「・・・親に尽くすのは・・・悪いことですか？」

「・・・」

・・・聞こえはいい・・・だが

「・・・そのために・・・俺の・・・」

ぶるぶると拳が震える

今にも殴りかかってしまいそうになるのを必死に抑える

「俺の・・・日常を・・・壊したのか・・・!？」

「そうです」

ごく普通に・・・そう答えた

「・・・」

歯を食いしばり・・・耐える
そのとき俺は・・・気付けなかった・・・薄く笑っているヨハネスの口元を

「・・・もう・・・いいですか？」

「・・・なにがだ!!！」

イライラしているのを・・・抑えられず激昂する・・・
そして次の瞬間・・・俺の顔から血の気が引くのを感じた・・・

突如、ヨハネスを中心に巨大な魔方陣が浮かび上がった
・・・俺と話している間にひそかに詠唱していたのを・・・俺は気付けなかった

「てめえ・・・・・・・・!!!!！」

即座に剣を持ち倒れているヨハネスに突き立てた

「うぶっ・・・・・・・・！」

彼の口から血が吹き出す・・・が魔法陣は消えない・・・

「・・・フッフッフ・・・もう・・・止まりませんか?」

吐血しながら不気味に笑うヨハネス・・・

「町ごと・・・道連れにしてやります・・・!!フッフ・・・アハハハハハハハ・・・!!！」

しだいに笑い声は小さくなり・・・完全になくなる

「・・・くそ・・・!!」

あの魔法陣は・・・見覚えがある

ルナさんの家に置いてあつた魔道の本にも載っていた有名な術
古代から伝わる最強にして破壊のみを考えて作られた術・・・
しかもあの大きさの魔法陣は・・・恐らく秘奥義・・・
巨大な隕石を降らして一つの国を破滅させたとも言われている

「・・・『メテオスウォーム』・・・!!」

俺は即座に反転し・・・疲れを忘れて町に駆け出した

第42話（後書き）

・・・ネタが浮かばない！

先のことは思いつくのにそれまでの過程が思いつきません・・・
これ私だけですかね？

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第43話(前書き)

・・・ヤバイです

大して高くない私の作品のクオリティが急激に下がってます・・・
文の書き方本とか無いのかな・・・

どうぞ！

第43話

ルナSIDE・・・

「・・・終わりました・・・か？」

「みただね」

肩で息をするヴァンとあたしの視線の先では先程まで暴れていた魔物の死体と

町の外へ蜘蛛の子を散らすように背を向けて逃げていく残りの魔物

「・・・何とかになりました」

「・・・大丈夫かい？」

「まあ・・・なんとか」

そついうがヴァンはやはり辛そうだ

無理もない

ここまで大規模な魔物の大群を相手にするなど滅多にないましてやヴァンはまだ実戦経験が少ない

ここまで戦えただけでも賞賛に値するとあたしは思う

「さて・・・イザツクのところへ・・・!？」

「・・・どうしました」

・・・魔力を感じる・・・しかも巨大な・・・

「・・・なんだい・・・この感じは」

嫌な予感がする

そして・・・あたしの予感はやはりの中してしまった

「イザックさん！」

ヴァンが声を張り上げる

イザックがこちらに向かって走ってくるのが見えたからだ

しかしその顔は・・・勝った者の顔とは思えないほど必死にこちらに駆けて来る

そして・・・

「・・・・・・・・」

「な・・・!？」

「くそ!？ルナさん!ヴァン!!!逃げろ!!!」

・・・町の上空を覆うように・・・巨大な魔法陣が浮かび上がった

ユリアSIDE・・・

「・・・・・・・・・・」

「ユリアさん・・・」

「ええ」

・・・嫌な予感がする

ルナと一緒に私の悪い予感で結構当たるの

それに先程まであんなに暴れていた魔物たちが・・・急に怯えたように逃げていく

私はジグさんと共に結界に避難するために走り出した・・・

「・・・待ってくれ！もう魔物はいないじゃないか！！そんなに走らなくても・・・」

・・・なんか後ろで喚いている馬鹿息子がいるけど・・・事情を説明する暇なんてない

「なんか嫌な予感がするんだ！ぼっちゃんも死にたくなかったら走りな！！！」

「何！？・・・全く！あの三人が来てから面倒ばかり・・・」

・・・置いていこうかしら？

そんなことを本気で思い出したそのとき・・・

「！？」

「なんだ！？」

「・・・まずいわね」

上空に巨大な魔法陣が浮かび上がった・・・

コリイSIDE・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は今、町の人を守るために結界に魔力を注いでいる

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・正直そろそろ辛くなってきました
魔力ももつすぐ底を尽きそう

「(でも・・・・・・・・)」

私は・・・イザックさんたちを信じてる
きつと・・・組織の人なんかには負けない
ルナさんもヴァンさんもユリアさんもジグさんも・・・
みんな無事に帰ってくる

それまでは……

「（私が……町の人たちを守る）」

そう……心に誓った

そして……

「コリイさん！！魔物が逃げていきますー！！」

「……………」

ほら……ね？

イザックさんが勝つと信じていた……

後はみんなが帰ってくるのを待つだけ

そう……思った……しかし

「な、何だあれは！？」

住民の悲鳴に近い声が上がった……

「ティアちゃん……何が……？」

問いかけると先程まで嬉しそうに報告していた顔とは一変し
顔を青くしながら……

「……町の上空に……魔法陣が……」

震える声で……私にそう告げた

第43話(後書き)

・・・次回からどうしよう？

まあ頑張ります!!

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第44話(前書き)

文字数少ないですが・・・
一旦区切りました^^;

どうぞ！

第44話

ルナSIDE・・・

「イザック!!」

「固まれ!ルナさん!ヴァン!!」

イザックは剣を引き抜きあたし達にそう叫んだ
すぐにヴァンを引き寄せ固まって止まる

その後

イザックは跳躍しあたしの目の前に剣を突き立てた

「守護・・・氷槍陣!!!」

そして・・・あたし達の周りに通常時の倍以上の氷の槍が守るよう
に現れた

「・・・イザックさん・・・他のみんなは」
「ヴァン」

あたしは何かを聞こうとしたヴァンの声を遮った
恐らく他の人たちのことだろう
だが・・・

イザックは悔しそうに俯いている

・・・こいつは

私達……だけでも守ろうとしているんだと

そして……魔法陣から巨大な隕石が降り注いだ

イザツクSIDE……

「（くそ……）」

剣を立て、底に魔力を注ぐ

「（くそ……！）」

俺はそれをしながら……唇を噛んだ

「(くそ……!!!!)」

……間に合わない
だから俺は……

「(畜生……!!!!!!)」

……町のみんなより……コリイヤティアやユリアさんより……
二人を守ることを優先した

それが正しいと……自分に言い聞かせながら……

「(頼む……みんな……どうか無事で)」

そのとき、俺が張った氷の槍に……隕石が直撃し
……大地が揺れた

第44話(後書き)

短っ!?

と思った方は正常です^^;

最近筆がなかなか進まなくて(泣)

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第45話(前書き)

今回も短いです・・・^^;

もうちよっと長く書けたらな・・・

第45話

イザックSIDE・・・

「・・・・・・・・う」

俺は目を覚ました・・・
頭が働かない
・・・何が起こった？

そしてそこにひとつの音が聞こえる

「く・・・ヴァン・・・」

・・・聞き慣れた声だった

「！？ルナさん！！」

彼女の声を聞き俺は慌てて飛び起きた

そして起き上がり・・・目の前の光景に・・・言葉を失った

目の前にはルナさん、服が土や埃だらけで汚れており額から血を流しているが無事

そして彼女の膝元にはヴァン

こちらは目立った外傷は無く気絶しているだけのようだ
問題は・・・その先の景色だった

「・・・・・・・・」

人々が行き交う広場は跡形も無く破壊されておりただの瓦礫の山に住宅街は・・・隕石が直撃したのだろう場所は大きなクレーターができており
もちろん家はよくて半壊・・・ほとんどの家が潰されていた
・・・つい数刻前までは活気に溢れていた町が・・・今はその面影すらない
ただの廃墟になっていた

「・・・・・・・・」

・・・頭が真っ白になり何も考えれない

「イザツク！」

ルナさんの声で我に返った

「・・・あたしは回復術を使えない・・・ヴァンの回復を頼む。終わったら・・・生存者を捜そう」

「・・・はい」

落ち着いているルナさんの声に頷きながら俺はヴァンに回復術を施した

・・・自分のせいでこうなったと・・・自分を責めながら

「コリイ・・・ユリアさん・・・ティア・・・どうか無事でいてくれ・・・！」

泣きそうになるのをこらえながら俺は呟いた

あれから・・・ヴァンの意識が回復し生存者を捜しているが

「・・・ダメだね」

ルナさんは・・・倒れている人を見るが・・・

町に転がるのは瓦礫と・・・死体だけ

倒れてきたものの下敷きになった者

隕石に当たり圧死、もしくはバラバラに弾けた者

まさに地獄絵図のような光景だった

「・・・家に・・・戻ってみましょう」

ヴァンは俺とルナさんにそう提案した

「そうだね・・・コリイ達が気になる」

「はい行きましょう・・・イザツクさん？」

二人は歩き出すが・・・俺は歩けなかった

もし・・・コリイが死んでいたら？

・・・そう考えるだけで・・・足が竦む

そこに・・・

「イザック君・・・ルナ・・・ヴァン」

二人のものでない声がかかった

第45話(後書き)

・・・いろいろと頑張らなければ・・・(泣)

でも読んでくれてる人がいるだけでも感謝してます^^
毎日更新できるかはわかりませんが・・・
できるだけ頑張ります!!

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第46話(前書き)

さあライマ国編残りわずかです^^

頑張ります!!

それではごっご^^

第46話

NOSIDE・・・

「ユリアさん・・・」

三人は声の主・・・ユリアに目を向けた
血だらけで腕を押さえているが命に別状は無さそうだった

「母上！」

「大丈夫かい？」

「ええ・・・何とか私は・・・」

ヴァンはホツとしたように胸を撫で下ろし口元を緩ませた
しかしイザックとルナは彼女の言葉に表情を凍りつかせた

「・・・一緒にいた・・・ジグさんは？」

震えそうになる声を必死に抑えながらイザックがユリアに問いかける
ユリアは顔を俯かせ・・・暫し沈黙した
そして返ってきた返答は

「・・・町長の息子を庇って・・・亡くなったわ」

・・・残酷なものだった

イザックSIDE・・・

俺はユリアさんの言葉を聞いてからあまり記憶が無かった
把握しているのはジグさんが死んだってことだけ

「俺のせいだ・・・」

呟いても・・・どれだけ後悔しても・・・

「（もう・・・死んだ町の人や・・・ジグさんは帰って来ない）」

そして俺はユリアさんの家に着くまで全く記憶が無かった

NOSIDE・・・

イザック達はユリアと合流し結界を張っていた家に戻ることにした
道中生存者を探したが見つからなかった

そのことが更にイザックを苦しめ・・・表情は後悔と絶望
その二つが混ざったような顔だった

そして前方から見覚えのあるものが走ってきた

「母さん！兄さん！！」

「ティア！！！」

ティアは走ったそのままの勢いでユリアの胸に飛び込む
そしてユリアは力強く抱きとめ抱擁した

「怪我は無い？」

「はい！兄さんも・・・イザックさんもルナさんも・・・無事でよ
かったです」

ユリアは微笑みティアの頭を撫でようとする

「それよりもコリイさんが！！！」

しかしその前にティアが焦った口調で叫んだ
ユリアは手を止めティアを抱きかかえた

「ルナ！・・・あれ？」

「母上！もう二人は走っていきました！」

「ええ！？」

いつの間に・・・そう思ったユリアは悪くは無い

コリイの名前をティアが出した瞬間二人は全力で駆け出していた

「追おう！ヴァン」

「はい！！」

そして二人を追うためにユリアとヴァンも駆け出した

第46話（後書き）

・・・状況を説明するのって難しいですね・・・^^^;

もうちょっと表現力を豊かにしたいです（泣）

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^^

第47話(前書き)

あの屑再登場です

どろどろ！

第47話

ルナSIDE・・・

「・・・コリイ！」

ティアの言葉を聞きイザックと共に駆け出したあたしは今までに無
いくらい焦っていた

この惨事の中・・・そしてジグさんが死んだという話を聞かされた
後だからか・・・

コリイが・・・死ぬという嫌な予想をしまっている

「・・・」

・・・考えても仕方ない

今は早くあのこの元に着けるように全力で走る

頭の中の嫌な予想を振り払い
ルナは全力で走り続けた

NOSDIDE・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

イザックとルナは先程まで走っていた足を止め呆然としている

・・・家が・・・無くなっていた

そしてその中央に・・・コリイが横たわっていた

彼女をの周りは全くの無傷

・・・恐らく結界を瞬時に強化したのだろう

しかしその強化は全体には及ばず・・・破壊されたところだろう

「コリイ!!」

ルナが叫び駆け寄る

すぐに首と手首に手を当て脈を測る

「・・・よかった」

鼓動を確認したルナは安堵の息を漏らす

「・・・イザック」

「・・・・・・・・」

「おい！イザック!!」

「あ・・・はい」

立ち竦んでいるイザックに声を掛け回復術をかけさせる
そこに

「皆さん・・・元凶のお出ましですよ」

聞きたくなかった・・・この町で二人が唯一嫌いな人間の声が響いた

イザックSIDE・・・

「よくも私たちに顔を見せられましたね・・・」

にやにや笑いながら肩がしゃべる

その後ろには町の人たちが・・・

その顔には今までのような笑顔を浮かべているものはいない
あるのは絶望、恨み・・・あるいは殺意もあるかもしれない

「あなたのせいだ・・・この町は破壊されました・・・どう責任と

るつもりですか？」

何もいえない……

こいつの言ってることは……事実だから

「あんだ……！」

怒気を露わにしたルナさんが怒鳴ろうとするが
一つの声によって遮られた

「ねえ……イザックさん」

声の主はカイだった

「……父さんが死んだってほんとなの？」

そして……泣きそうな顔で俺に尋ねてくる

俺は答えることができず顔を伏せる

「ねえ……母さんも……ヤットもないんだ……みんなどこに
いるの？」

堪えきれなくなったのか……カイの頬に涙が流れる

「これも全部……イザックさんのせいなの？」

「……」

……カイの顔を見てられなかった

そして……一言

「……すまない」

俺はそう言った

その瞬間頭部に痛みが走った

「返せよ……!!」

足元に転がったのは石

カイはしゃがみ石を拾い振りかぶり

「父さんを……みんなを……返せよ!!」

投擲した

俺は避けようとはしなかった

頭部にまた直撃し血が流れる

それを引き金に後ろの町の人も各々の思いをぶつけるように俺の周りに集まり出す

「妻を……返せ!!」

そう言いながら俺の顔を殴る男性

……この人はいつも温和で最近結婚し幸せの絶頂にいた人だ

「うちの子を返してよ!!!!」

この女性も知っている

……たしか学校の教員だ

子供と二人暮らしだったがそれでも幸せそうにしていたのを覚えて
いる

「家族を・・・返せえええ!!」

泣きながら太い木の棒で俺を殴る男性

・・・よくジグさん達の八百屋に来ていじられていた人だ

みんな・・・いい人たち・・・そしていい町だったのに

俺のせいで変わった

ルナさんは俺に攻撃する人たちを止めようとしている

ルナさんに被害がいつてないのは安心だった

おれは何度殴られようと・・・血を流そうと・・・

何もせず立ち続ける

「止めなさい!!」

凜とした声が響いた

ユリアさんだ

口の中に鉄の味がすることに気付きながらユリアさんのほうを見る

「・・・こんなことして何になるのかしら？」

町の人・・・特に肩を睨みながらユリアさんは静かに問う

「・・・・・・・・」

全員が沈黙する

「彼が痛めつけられるのは当然だと思いますが？」

そんな中屑がしゃべりだした

「……」

「彼がこの町に来なければ……この町はこんなことにならなかつた……違いますか？」

「……あなた……いい加減に」

「もういいです……ユリアさん」

言葉を続けようとするユリアさん
俺はそれを遮り……膝をついた

「……謝っても……許してもらえないことはわかってる……
だけど……」

そして俺は頭を地面にこすりつけ

「すみませんでした」

土下座をした

……こんなことをして何になる

そう思うが……俺にはもう何もできない

「ははは!!!まだ頭が高いんじゃないか!？」

屑の声が聞こえ

頭を踏みつけられる

瓦礫や石の破片が額に刺さり血が少量流れる

「ほらほら!! もつと・・・ぎゃぷ!!?」

ぐりぐりと踏まれているときなり悲鳴が聞こえ
頭の上からあいつの足の感覚が無くなる

「・・・それ以上するなら・・・殺すよ?」

頭を上げると

拳を握り締めもう片方の手に魔槍を構成したルナさんが立っていた

歯が欠け情けない顔になり、それに似合った悲鳴を上げながら後ず
さる肩

ルナさんはこちらを向き直り・・・

「行くう・・・」

そう言いながら俺の手を引いた

・・・もう何も考えたくなかった俺は・・・無意識に手をとった

第47話（後書き）

さて、嫌な終わり方でしたがここで一旦切ります^^;;

今回はいつもより少し多めにかけました^^

（たかが知れてますが・・・）

次話でしばらくヴァンとティアとはお別れです・・・

また見てもらえると嬉しいです^^

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第48話(前書き)

フォトシア遂に終わりました!!

後はライマ国を出てそして・・・

原作まで長い・・・

どろぞろー!

第48話

イザックSIDE・・・

あれから俺はルナさんに手を引かれ町の入り口に来た。
そこにはコリイをおぶったヴァンとティアが立っていた。

「・・・行くのですか？」

「ああ・・・世話になったね・・・迷惑かけてはつかで・・・」

「そんなこと無いです！」

「ありがとうティア・・・イザック」

「あ・・・じゃあ・・・な」

俺は二人と目を合わさずにそう返す。ルナさんはコリイをヴァンからもらいおぶると

二人に向き直る。

「短い間だったけど・・・ありがとう」

二人にそう告げ俺とルナさんは背を向け歩き出した。

「また・・・会いましょう!!」

「イザックさん！ルナさん!!コリイさん!!私・・・また会えるって信じてますから!!」

二人が・・・そう叫んでいるのが聞こえる。
そして・・・

「イザック君！ルナあ!!!!」

「え？」

「は？ちよっ……！？」

……駆けて来る音が聞こえ振りぬくと同時に……ルナさんが押し倒される。

こんなことをするのはやはり……

「……ユ、ユリアアアアアアアア！！！！！！」

「ひ、ひたいひたひ！！」

青筋を立てながら全力でユリアさんの頬を捻るルナさん。

涙目になりながら何とか逃れようとするユリアさん……。

「う……うう……」

「あ！コリイ！！ご、ゴメンよ！！」

下敷きになったコリイの呻き声を聞いたルナさんは即座に立ち上がる。

そしてまたコリイをおぶり直し、一回溜め息をついてから三人に再び向き直る。

「行くよ……ユリア」

「ええ……気をつけてね？」

「ああ、わかってるよ」

ユリアの言葉に苦笑するルナ。

「ここから西の港にあいつがいるから頼りにするといいわ」

「……あいつが？放浪してたんじゃ」

「この前顔出しに来たのよ……しばらくはいるって言ってたわ」

「わかった・・・本当にすまない」

「いいのよ・・・イザック君」

ルナさんとの会話を切り俺に話しかけるユリアさん。

何を言われるのだろうか・・・？

貶されるか？罵倒されるか？・・・

そんなことあるはずが無いのに考えてしまっ

しかしそんな思いはすぐに消え去った。

何故なら・・・いきなりユリアさんに抱きしめられたから・・・

「え・・・？」

「・・・気にするな、とは言わないわ。だけどイザック君」

抱きしめていた腕の力を緩め、俺と目が合う。

真っ直ぐ・・・こちらを見つめる。

その目は綺麗でそれでいて力強さを感じる不思議な目。

「あなたは精一杯やったわ・・・それは町の人みんなわかってる。

だけど今までこんなこと無かった・・・大切な人を理不尽によって

亡くすことも・・・ね」

「・・・」

「悲しみ・・・絶望が限界に達したみんなは・・・いえ、そうなっ

た人は責任を求める・・・それが今回あなたにいったの・・・現

にあなたのせいって言うのが大きいわ。」

その言葉に俺は顔を俯かせる。

「なら・・・」

俺の頬を優しく手を当てユリアさんは顔を上げさせる。

「・・・もう私達のような・・・人を出さないように・・・繰り返さないで」

ユリアさんは俺にそう言った。

「償いたいと思う気持ちがあるなら・・・ね?・・・あなたなら・・・できるでしょ?だってアルバート流剣術を数週間で習得しちゃうんだもの!」

にこりと微笑みながら

「・・・辛い思いを二度も味合わなかったために・・・頑張りなさい」

この人は・・・変わらなかった。

片手で右の目を覆うが・・・自然と涙が出た。

「あらあら・・・」

「全く・・・泣き虫だね・・・相変わらず」

「・・・そうなんだ」

声を出してまた泣いた・・・

変わらなかったこの人に安心や嬉しさを感じながら・・・
そして俺は心に誓った。

この町の悲劇を・・・理不尽な死を・・・
命を懸けて、二度と引き起こさせないと・・・

第48話（後書き）

・・・どうでしたか？

まあぐだぐだなのはいつものことなんで・・・
・・・これでも一生懸命なんです（泣）

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

第49話（前書き）

昨日は更新できずすいませんでした><

ちょっと家に帰るのが遅かったものでそのまま寝てしまいました・・

・

今回は前半にイザックとコリイ
後半にルナさんの心境です！

どうぞ！！

第49話

イザックSIDE・・・

あの後俺達は三人と別れた。

泣き終えた後の恥ずかしさは半端が無かったが・・・

「・・・大丈夫か？コリイ？」

「はい・・・すみません・・・迷惑をかけて」

今コリイは俺がおぶっている。

三人と別れ、ルナさんの言うとおりに歩くこと数時間。

コリイは目を覚ました。

三人と挨拶ができなかったことにショックを受けていたがまた会えると

言うルナさんの説得で若干不貞腐れながらも落ち着いた。

しかし・・・コリイは足を怪我していたらしく歩けなかった。

ルナさんだつてずっとコリイをおぶれるわけではないので

今は交代して俺がおぶっている。

・・・しかし・・・コリイの顔が赤いような・・・気のせいかな？

「（はわわわわわ！！イ、イザックしゃんの顔が／＼・・・どどどどどうしよおおおお！！お、重くないかな・・・？もし重いか思われていたら・・・もう！！何でこんな時に私もイザックさんも魔力空っぽなんですか！！！！）」

・・・絶賛パニック中だったコリイだったが・・・イザックが知ることは無い。

N O S I D E・・・

ルナ、イザック、コリイがフォトシアを出て数時間。夜も更けてきたので野宿することに決めた一行。

「・・・ルナさん・・・どこに向かっているんですか？」

イザックはルナに言われるがままついて来たので全く行き先を知らない。

無論気絶していたコリイも同じだ。

「・・・西のほうにもう一つ港町がある・・・そこからまた違う国に行こうと思うんだがそこにも知り合いがいるって聞いたからちよ

つと殴りに・・・コホン・・・会いに行こうと思ってるんだよ」「

・・・言い直した言葉を深く追求しないと

イザックとコリイは瞬時にアイコンタクトで確認しあった。

何故なら・・・微笑んでいるルナの目が・・・笑ってない。

ああいう時はそつとしとくのが一番だからだ。

追求したら拳で黙らせるか、延々と話されるかのどちらかだからだ。

「ま、というわけだ・・・あんた達は寝な」

「いや俺が・・・」

そこまで言うところナはイザックに結構な威力のでこピンをしてきた。

「ぐおおおお・・・」

「あ、悪い・・・力加減間違えた」

けらけらと笑うルナ・・・

確実にわざとだ、とイザックは思った。

「・・・もう魔力残ってないんだろ？回復したら替わってくれたらいいから・・・」

そう言いイザックとコリイを岩の下に座らせる。

「すみません・・・」

「いいつて言ってるだろ？・・・コリイは完全に眠そうだし」

苦笑しながらコリイを見るルナ。

隣にいるコリイを見るととうとうと夢と現実の狭間を彷徨っている。

「ほれ・・・とつと寝な」

「はい・・・すいません・・・」

岩にもたれかかるイザックをすぐに睡魔が襲った・・・
そして数分後・・・彼は夢の中へと旅立った。

「・・・ユリアに励まされたって・・・辛いもんは辛いだろうに・・・」

一緒に生活していればわかる・・・

ルナは明らかにイザックが無理をしていることに気付いていた・・・

「（あたしは・・・この子の力になれなかった・・・）」

それがルナはとても悔しかった・・・

「せめて・・・今だけでもゆっくり眠りな・・・」

きつとこれからも・・・辛い出来事が彼を襲うだろう・・・

「（今度こそ・・・あたしはこの子を・・・）」

ルナはイザックの顔を見つめながら・・・

息子同然のこの子の力になることを・・・心に誓った。

第49話（後書き）

長くないのはいつも通りですが・・・

最近また車校とかで時間がなかなかとれず・・・
度々更新できなくなるかもしれないかもしれませんが・・・

まあ言ってもしょうがないのでできるだけ頑張ります！！

感想・アドバイスしてもらえると嬉しいです^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6388y/>

テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー～吸血鬼物語～

2012年1月14日11時45分発行